丹 波 市

平　野　遺　跡

― 一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書Ⅸ ―

2011（平成23）年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

丹 波 市

平　野　遺　跡

― 一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書Ⅸ ―

2011（平成23）年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

全景（南西から）

全景（北から）

緑釉陶器・灰釉陶器（外面）

同（内面）

例　　言

1．本書は、丹波市青垣町に所在する平野遺跡の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路事業に伴うものである。建設省近畿地方建設局　兵庫国道事務所（当時）の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成12年度に全面調査を実施した。

3．遺構実測は、全体を1/50のスケールによる航空写真測量を日本テクノ株式会社神戸事務所に委託して行い、一部の遺構・土層堆積等の実測については調査員及び調査補助員が行った。遺構の製図及び遺物の実測・製図は兵庫県立考古博物館嘱託員が行った。

4．写真は、遺構を調査員が担当し、遺物については株式会社タニグチ・フォトに委託した。

5．本書の図版１「平野遺跡の位置」は、国土地理院発行の1/25,000「矢名瀬・福知山西部・大名草・黒井」を使用した。また、図版３「平野遺跡周辺の主要遺跡」は、旧氷上郡青垣町発行の1/2,500都市計画図を縮小して使用した。

6．本書で使用した標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基とし、方位は国土座標Ⅴ系の座標北を指す。

7．本書の編集・執筆は西口が行った。

8．調査で出土した遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（兵庫県明石市魚住町清水字立合池の下630-1）に、作成した写真・図版等の資料は兵庫県立考古博物館（兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号）において保管している。

9．なお、発掘調査及び報告書の作成にあたっては、旧氷上郡教育委員会から御指導等を頂いた。記して感謝の意を表すものである。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　本発掘調査……2
　第３節　整理作業……2
第Ⅱ章　位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……4
　第３節　平野遺跡周辺の遺跡……5
第Ⅲ章　確認調査の概要……7
　第１節　調査の方法……7
　第２節　調査の結果……7
第Ⅳ章　本発掘調査の概要……8
　第１節　本発掘調査の概要……8
　第２節　Ａ地区の調査……8
　第３節　Ｂ地区の調査……19
第Ⅴ章　地形の分析……23
第Ⅵ章　まとめ……25

表　目　次

表１　出土遺物　観察表（Ⅰ）……21
表２　出土遺物　観察表（Ⅱ）……22
表３　建物規模一覧……25

図　版　目　次

図版１　遺跡の位置
図版２　平野遺跡周辺の主要遺跡一覧
図版３　平野遺跡周辺の主要遺跡
図版４　調査区周辺の地形
図版５　遺構全体図Ⅰ
図版６　遺構全体図Ⅱ
図版７　Ａ地区北壁・西壁土層断面
図版８　Ｂ地区西壁・Ａ地区下層断割トレンチ土層断面
図版９　掘立柱建物SB01
図版10　掘立柱建物SB02
図版11　掘立柱建物SB03
図版12　掘立柱建物SB04・SB05
図版13　掘立柱建物SB06・SB07
図版14　掘立柱建物SB08・SB09
図版15　各土坑
図版16　落ち込み・焼土坑
図版17　溝
図版18　Ａ地区掘立柱建物及び柱穴出土土器
図版19　Ａ地区遺構及び包含層出土土器(土師器)
図版20　Ａ地区包含層出土土器（土師器）
図版21　Ａ地区包含層出土土器（須恵器）
図版22　Ａ地区包含層出土土器（古代～中世）・Ｂ地区包含層出土土器

写真図版目次

巻頭写真図版１　全景（南西から）・全景（北から）
巻頭写真図版２　緑釉陶器・灰釉陶器（外面）・同（内面）

写真図版１　航空写真（平野地区周辺）
写真図版２　全景（上が東）
写真図版３　調査地点遠景（南から）・調査地点遠景（南西から）
写真図版４　調査区近景（南から）・調査区近景（南東から）
写真図版５　調査区近景（南西から）・調査区全景（北から）
写真図版６　Ａ地区全景（西から）・Ａ地区西半の遺構（南西から）・Ａ地区上段の遺構（東から）
写真図版７　Ａ地区上段の遺構（南東から）・Ａ地区北東隅の遺構（南から）・Ａ地区南西隅の遺構（北から）
写真図版８　Ａ地区　掘立柱建物SB01の柱穴
写真図版９　Ａ地区　掘立柱建物SB02・SB03の柱穴
写真図版10　Ａ地区　掘立柱建物SB05・SB08・SB09他の柱穴
写真図版11　Ａ地区　柱穴
写真図版12　Ａ地区　焼土坑・落ち込み
写真図版13　Ａ地区　溝
写真図版14　Ａ地区　西壁
写真図版15　Ａ地区　北壁
写真図版16　Ｂ地区　全景（北西から）・Ｂ地区全景（南西から）・Ｂ地区全景（西から）
写真図版17　Ｂ地区　西壁
写真図版18　Ａ地区　下層断割トレンチ
写真図版19　Ａ地区　掘立柱建物柱穴出土土器
写真図版20　Ａ地区　各柱穴出土土器Ⅰ
写真図版21　Ａ地区　各柱穴出土土器Ⅱ
写真図版22　Ａ地区　土坑・落ち込み出土土器
写真図版23　Ａ地区　溝及び包含層出土土師器Ⅰ
写真図版24　Ａ地区　包含層出土土師器Ⅱ
写真図版25　Ａ地区　包含層出土土師器Ⅲ
写真図版26　Ａ地区　包含層出土土師器Ⅳ
写真図版27　Ａ地区　包含層出土須恵器Ⅰ
写真図版28　Ａ地区　包含層出土須恵器Ⅱ
写真図版29　Ａ地区　包含層出土須恵器Ⅲ
写真図版30　Ａ地区　包含層出土　古代～中世土器・Ｂ地区　包含層出土須恵器Ⅰ
写真図版31　Ｂ地区　包含層出土須恵器Ⅱ・緑釉陶器・灰釉陶器

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

国土交通省近畿地方整備局（旧建設省近畿地方建設局）兵庫国道事務所が進める一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路事業に伴い、平成３年度以降、兵庫県教育委員会においては工事対象範囲の埋蔵文化財調査について随時実施してきた。

〔分布調査の経過〕

平成３年度に計画路線内のうち、氷上郡春日町（現氷上市春日町）から同青垣町遠阪にかけて、即ち、近畿舞鶴自動車道春日インターチェンジから遠阪トンネルの区間約24.4㎞について分布調査を行い（遺跡調査番号910019）、今回報告する平野遺跡（№31地点）を含め41箇所について埋蔵文化財が包蔵される可能性が高いと判断された。

調査の組織

調査主体	兵庫県教育委員会		
調査事務	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所		
		所長	内田隆義
	調査第１課	主査	長谷川　真
	総務課	課長	田中豊秀
調査担当	調査第２課	主査	水口富夫
		技術職員	中川　渉・多賀茂治・鈴木敬二・柏原正民
		事務職員	広野　誠
	調査第２課	技術職員	平田博幸・西口圭介・藤田　淳

〔確認調査の経過〕

分布調査の結果を受け、平成11年11月に確認調査（遺跡調査番号990256）を実施した。平野遺跡（№31地点）については、６世紀から16世紀代の遺構・遺物の出土をみた。

調査期間は、平成11年11月19日。調査面積は40㎡であった。

調査の組織

調査主体	兵庫県教育委員会		
調査事務	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所		
		所長	寺内幸治
	企画調整班	調査専門員	山本三郎
		主査	深井明比古
	総務課	課長	岩澤重則
調査担当	調査第１班	主査	平田博幸
		技術職員	鈴木敬二
		研修員	大崎晃司

第２節　本発掘調査

分布調査・確認調査の結果を踏まえ、国土交通省近畿地方整備局（旧建設省近畿地方建設局）兵庫国道事務所より平成12年４月３日付建近兵調第75号で依頼を受け、本発掘調査を実施した。

調査の方法は、調査対象範囲の670㎡について、水田耕土･近世以降の堆積土については機械力によって排除し、以下の堆積については人力によって掘削・精査を実施した。

また、ヘリコプター使用による空中写真撮影を７月28日に実施している。

調査期間は、同時に調査を実施した沢野遺跡・城ノ腰遺跡を含め平成12年６月15日～11月27日であった。

調査の組織

調査主体	兵庫県教育委員会		
調査事務	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所		
		所長	寺内幸治
	企画調整班	調査専門員	山本三郎
		付	稲田　毅
	総務課	課長	森　俊雄
調査担当	調査第１班	主任調査専門員	輔老拓治
		主査	西口圭介
		技術職員	鈴木敬二
		臨時的任用職員	海邉博史
	調査参加者　中村真也・中里明伸		
作業委託	株式会社氷上土建		

第３節　整理作業

出土遺物の整理については、平成12年（本発掘調査時）に遺物洗浄を実施した以外すべて平成22年度に実施した。

調査第１課：西口圭介

整理保存班：岡田章一

実測・製図・レイアウト：池田悦子・岡崎輝子・尾鷲都美子・柏木明子

接合・補強・撮影補助等：吉田優子・伊藤ミネ子・嶺岡美見・吉村あけみ・佐々木愛

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境（図版１・３）

平野遺跡は兵庫県丹波市青垣町中佐治字平野に所在する。

丹波市（旧氷上郡）青垣町は、神戸市より北北東へ64㎞、大阪より北北西へ76.5㎞で兵庫県丹波市（旧氷上郡）の最北端部に位置している。旧丹波国に属し、南を旧氷上郡氷上町、西・北を朝来市（旧朝来郡）山東町・生野町、東を京都府福知山市・天田郡夜久野町と接し、東経135度の日本標準子午線が通る。当町は佐治町と芦田村・神楽村・遠阪村の３ヶ村が昭和30年に合併し町域を形成してきた。更に平成16年11月、氷上郡全域の町合併により丹波市となった。平成22年９月現在の丹波市青垣町の人口は6,769人、世帯数は2,326世帯、合併前の青垣町の面積は99.86㎢である。

青垣町は、所謂氷上盆地（或いは氷上低地）とよばれる平野の北端に位置しているが、耕地が開けた南方の氷上町・春日町に比べ非常に狭隘である。

四方を山に囲まれており、西部には三国岳・粟鹿山、南部には岩屋山といった標高700ｍから1000ｍ級の高峰が巡る。

河川は、ともに粟鹿山に源を発する加古川（佐治川）と遠阪川が主要な河川として町域内を南流している。両河川の合流点に広がる氾濫原や両河川が造り出す河岸段丘と、両河川にそれぞれ流れ込む稲土川・法用谷川・平野川・奥塩久川などの中小河川が生み出す扇状地が、狭隘な地形の中に居住域や生産域を確保しているのである。

氾濫原と中小河川が造る扇状地のうち、比較的広い可耕地や市街地を確保できる地点は青垣町域では南半にかたより、両河川が合流する佐治・沢野周辺もしくは南に隣接する芦田地区に限られている。北半の遠阪川沿いの遠阪・山垣・中佐治地区や、佐治川沿いの神楽地区では、河岸段丘に向かって口を開いた谷は小さく、この小規模な谷部に形成された扇状地に集落が営まれ、遠坂～和田・山垣・中佐治などの比較的広い平地を主な耕地として現在に至っている。

今回、調査を実施した平野遺跡は、遠阪谷から東へ分岐した谷にある。遺跡は谷部に合流する、比較的小さなしかし深い谷部の西隣りに隣接する小規模な扇状地に存在する。本発掘調査を行ったこの小規模な扇状地は、南北に伸びる２本の尾根に囲まれており、中央を分断する様に豊富な水量をもつ水路が流れ出ている。扇状地自体は急傾斜であることから、現在は住居は営まれておらず、畠・水田として使用されていた。

以上のように狭隘な地形が目立つ青垣町であるが、交通・流通の面からは重要な位置を占めている。青垣町より南へと下る加古川（佐治川）は、最終的には瀬戸内海へと流れ出ている。この加古川を利用した舟運は近世には特に活発に行われ、氷上町には舟座がおかれたが、明治時代の鉄道の開通によって衰退した。丹波市氷上町石生には分水界が存在しており、日本海へと流れ出る由良川（黒井川）とともに、標高100ｍを超えない低い分水界を通じた交通路は『氷上回廊』・『加古川・由良川の道』と呼ばれ瀬戸内側・日本海側の南北をつなぐ重要なルートであったと評価されている。

同ルートは現在の国道175号へと引き継がれ、更に氷上町石生周辺で176号と合流、青垣町佐治にて明石方面から播州峠を越えて加古川沿いに走る427号と合流し、遠阪峠を越え、日本海側へと通じている。また遠阪谷に限って見るならば、遠阪峠以外にも、遺跡が所在する平野から福知山へ抜ける榎峠、山垣

から福知山へ抜ける梨木峠、和田から谷を詰め福知山へと抜ける千原峠など他地域へと出る山越えの峠が複数知られており、山陰道と言う基幹道から葉脈状に発達した交通路が存在したことがわかる。

第２節　歴史的環境

平野遺跡が所在する中佐治地区は、江戸時代には中佐治村と呼ばれ、明治時代には遠坂村・山垣村と合併し遠阪村となっていた。この遠阪村の主部は遠阪峠の麓から遠阪川が南流してゆく全長４㎞たらず、幅300ｍ程度の狭隘な谷内である。この谷は遠阪谷と呼ばれている。因みに、『とおさか』は３ヶ村を含む広域の範囲である谷全域あるいは峠を表記する場合には『遠阪』の字を用い、峠麓の集落のみを指す場合には『遠坂』の字が当てられている。

青垣町は平安時代には氷上郡に含まれ、『和名抄』には佐治郷の存在が記載されている。佐治郷は現青垣町のほぼ全域と考えられ、『丹波志』では大名草・大稗・小稗・稲土・市原・小倉・惣持・佐治・中佐治・檜倉・文室・山垣・遠坂・小和田・口塩久・奥塩久・東芦田・田井縄・西芦田・栗住野の20村としており、山垣地区・中佐治地区もその中に含まれていたと考えられる。

前節において少しふれた古代山陰道のルートは当地では現国道427号とほぼ重複していたと考えられている。中世・近世を通してもほぼ同じルートを通っていたと考えられ、『京街道』とも呼ばれることがある。

古代山陰道は大枝・野口・小野・長柄と各駅家を結び、おそらく氷上郡へ入る手前で丹後支路を分けるが、氷上郡を走る本道は更に星角駅家を通り、佐治駅家、更に遠阪峠を越え、但馬国の最初の駅家である粟鹿駅家へと至る。星角駅家は現丹波市氷上町石生あるいは市辺周辺に比定されており、粟鹿駅家は近年の発掘調査の成果から遠阪峠の但馬側の麓にあたる山東町柴とほぼ確定されている。

佐治駅家は、遺称地名の旧佐治郷内に存在することは確実であるが、正確な所在地は不明のままである。現在の佐治地区の中心は沢野・小倉地区と隣接する青垣町役場周辺に求められるが、中佐治の名称、丹波志による『山垣字横土居よりも奥を上佐治、口を下佐治』との記載などを考慮するならば、近世以前の佐治の中心を遠阪谷中に求めることも無理ではなく、推定地として中佐治周辺が上げられている。

現在の所、確度の高い遺跡・遺構は検出されていないが、詳細分布調査の結果をもとにあえて佐治駅家の候補地を挙げるならば、古代から中世にかけての遺物が広範囲に広がる中佐治地区の中佐治遺跡、同じく古代から中世にかけての遺物が広範囲に広がる山垣地区の遠阪遺跡、古代に属する布目瓦が採取された山垣遺跡、更に北方の字馬場畑に所在する散布地が候補として上げられる。

谷中での交通関係を示す地名を検討した場合、古代山陰道に係わる研究の中では、山垣地区に『大道』地名があることが知られている。『大道』は山陰道を指すと考えることができる。山垣地区の『大道』地名は北から字カゴ畑大道下・字松倉大道下・字大道がある。これらの『大道』地名は現在の国道沿いもしくは更に西側の山寄りにあり、何れも遠阪川右岸にある。少なくとも山垣地区では山陰道は遠阪川右岸の山際を北上していた可能性が高いと考えられる。駅家の中枢部（駅館院）が山陰道に面していたと考えるならば、河川を間に挟むことは考え難く、中佐治遺跡・山垣遺跡はその点では不適と考え、右岸側に位置する遠阪遺跡及び馬場畑散布地周辺に駅家が存在する可能性を考えておきたい。

遠阪遺跡が存在する地点は現在の遠阪谷内の中心的な場所でもあり、小学校を含む集落は他の集落に比べ規模が大きい。但馬側から遠阪峠を越え南下してきた場合、狭隘な谷が最初に大きく開ける場所でもある。後述するが、中世前期に地頭職として足立氏が山垣地区に拠点をおいた理由の一つは遠阪谷の

中央の纏まった平地と言う点にあったと考えてもよいであろう。

馬場畑散布地は更に峠寄りにある平坦地である。字名以外に、遠阪谷が扼される立地にあり、南方への見通しもよく興味深いが、現状では中世の遺物の散布地として把握されている。しかし現地では極々少量であるが古代の須恵器も見受けられ、更に詳細を確認する必要があろう。

佐治駅家についてこれ以上紙数を割く余力はないが、『大道』以外に注目したい地名として遠阪遺跡の対岸、左岸側にある『字萬田口』がある。萬田は馬田即ち駅田（駅起田）の存在を想起させる。

中世前期には、佐治郷を継承して佐治荘が成立する。佐治荘の成立年代・本家・領家などは不明であるが、貞和五年（1349）十一月二十七日の『大徳寺領諸荘園文書目録』の追記によれば、文和四年(1355)には佐治荘内の吉宗名が大徳寺領であったことが伺える。

佐治荘は佐治郷北部を継承して成立しており現青垣町の北半に広がると考えられる。その主要な範囲は遠阪谷にあったと考えられる。遠阪字今出に所在する熊野神社には『シヨウノ宮』があり神楽谷四ケ、遠阪村、山垣村、中佐治村、朝来郡柴村の産土神と『青垣町誌』は伝えている。『シヨウノ宮』は『荘の宮』を指すと考えられ、佐治荘の惣社として機能していた可能性が考えられる。

佐治荘の地頭は足立遠政が承元三年（1209）に補されて関東から入部したとされ（足立系図）、山垣地区を本拠に荘内には一族が広く分布した。城ノ腰遺跡の北側には、中世後期に足立氏が拠点とした山垣城跡があり、谷中には主に15世紀代に活動したと考えられている方形居館跡の山垣館跡が存在している。山垣館跡からは黒色土器も出土しており遺跡の始まりが更に遡る可能性も考えられよう。

足立氏は中世後期には山垣城を拠点とした国人へと成長するが、天正七年（1579）明智光秀の丹波攻めによって落城、敗亡し、一族の多くは帰農し、現在に至っている。

第３節　平野遺跡周辺の遺跡（図版２・３）

平野遺跡周辺を含めた旧氷上郡内全域の遺跡については、氷上郡教育委員会発行『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書⑷－兵庫県氷上郡青垣町』（1997）・『ブラ山・ボラ山』（1995）・兵庫県教育委員会発行『七日市遺跡』・『市辺遺跡』・『横田遺跡』・『沢野遺跡』・『城ノ腰遺跡』など既刊の北近畿自動車道建設関連の報告書に詳しく、本報告では多くを触れない。周辺の遺跡については、分布地図と一覧を上げておく。

遠阪谷内ではこれまでに旧石器時代の遺構・遺物は確認されていない。明確に人々の生活痕が確認できるのは縄文時代に入ってからで、平成13年度に調査を行った土井遺跡からは縄文時代中期の土器が出土しており、もっとも古い。後期の土器も土井遺跡・田ノ口遺跡・沢野遺跡で出土している。また土井遺跡では時期不明ながら、狩猟に伴う陥穴を調査している。縄文晩期の土器は応相寺遺跡で纏まって出土しており、土井遺跡・沢野遺跡・田ノ口遺跡でも出土している。田ノ口遺跡と沢野遺跡では遺構に伴っていないが、弥生時代前期の土器と一緒に出土しており、応相寺遺跡とのあり方の違いを検討する必要がある。

また土井遺跡では弥生時代中期の竪穴住居・土坑、弥生時代後期の木棺墓などを調査している。

弥生時代の大規模な集落遺跡は、規模の大きな扇状地が広がる沢野遺跡において後期の竪穴住居・土器棺墓が検出されている。竪穴住居は古墳時代初頭にかけて継続して多数調査されている。沢野遺跡は青垣地区では最も広い扇状地に展開する遺跡として、以後、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代の集落遺跡が広範囲に確認されている。ボラ山遺跡では弥生時代末から古墳時代初頭の台状墓14基が調査されている。

古墳時代の集落遺跡は、遠阪谷内では土井遺跡・応相寺遺跡・沢野遺跡などがあり、後期の竪穴住居を検出している。特に沢野遺跡では古代にかけて継続的に多数の竪穴住居が築かれている。

古墳は、ブラ山古墳・ボラ山１号墳群・中佐治古墳群・応相寺古墳群・沢野遺跡などで調査が行われている。ブラ山古墳では竪穴石室と小石棺を調査している。ボラ山１号墳群では円墳を調査している。中佐治古墳群では、尾根の先端で、５世紀末頃の竪穴系横穴式石室を埋葬施設とする円墳である中佐治５号墳を調査している。尾根の頂上では６世紀の木棺直葬墳を埋葬施設とする円墳を２基調査している。応相寺古墳群では７基の横穴式石室を埋葬施設とする小規模な円墳を調査している。沢野遺跡では居住域内で後期の木棺墓を検出している。

古代の遺跡は平野遺跡以外には、沢野遺跡・土井遺跡・田ノ口遺跡において奈良時代から平安時代の遺構・遺物が検出されており、山垣遺跡・遠阪遺跡・中佐治遺跡・応相寺遺跡等において遺物が採取されている。

飛鳥時代から奈良時代の遺構は概して少なく、遠阪谷では土井遺跡において飛鳥時代の竪穴住居、奈良時代の土坑を検出している。

平安時代の遺跡は沢野遺跡・土井遺跡・田ノ口遺跡・伝平等寺跡・平野遺跡などの遺跡があげられる。遠阪谷では、田ノ口遺跡・土井遺跡・平野遺跡が何れも９～10世紀頃より集落を形成あるいは拡大しており、11世紀更には中世へと続く。これらの遺跡からは緑釉陶器などの官衙的な遺物が出土しており、土井遺跡では工房址、田ノ口遺跡では経塚や屋敷墓を伴っており、開発領主や有力農民の住居と考えられている。

中世の遺跡としては10世紀から続く上記の遺跡のほか、山垣館・伝平等寺跡（12世紀から）などがある。山垣館は13世紀に佐治荘へ関東から入部した足立氏の拠点である。足立氏は関東で培った湿地開発の技術によって周辺（字蛇湿などの地名が残る）を開発していったと考えられる。

伝平等寺跡は隣接する土井遺跡と密接な関係を持つ寺院遺跡である。

土井遺跡は、在地有力者の住居を指す土居に通じる『土井』や『カイチ』、用水管理に関わる『湯落ち』などの荘園地名を持っており、田ノ口遺跡と並び、中世佐治荘の主要な集落遺跡であったと考えられる。また、伝平等寺跡は土井遺跡の村落内寺院であったと考えられる。

第Ⅲ章　確認調査の概要

第１節　調査の方法

分布調査において遺物の散布をみた工事範囲について、水田１筆ごとに試掘坑（トレンチ）を１箇所ずつ計４箇所設定した。各試掘坑の規模は２ｍ×５ｍ（10㎡）の長方形である。それぞれの試掘坑において、遺構・遺物の有無及び土層の堆積状況を確認した。

第２節　調査の結果

調査地は東向きの、狭く傾斜の緩い谷の出口にあたっている。

調査対象範囲の中央を国道429号が横切っている。この国道よりも谷奥（山側）に第１トレンチ・第２トレンチを設定し、谷側に第３トレンチ・第４トレンチを設定した。

調査の結果、第３トレンチ・第４トレンチにおいて遺構・遺物を確認した。

各トレンチの概要は以下の通りである。

〔第１トレンチ〕

現水田耕作土が30㎝ほど堆積しており、その下層には1.2ｍ程度の厚さで礫混じりの褐色粗砂が堆積している。谷の上部から小規模な土石流によって運ばれてきたと判断される。

遺構は検出されなかった。

〔第２トレンチ〕

現水田耕作土が30㎝ほど堆積しており、その下層には1.2ｍ程度の厚さで礫混じりの粗砂が堆積している。谷の上部から小規模な土石流によって運ばれてきたと判断される。下層には土壌化した粗砂が出現するが遺構は検出されなかった。

〔第３トレンチ〕

本発掘調査における上段部分に設定したトレンチである。

現水田耕作土に暗褐色土（土壌層・遺物包含層）を検出し、更に下層の暗黄褐色極細砂を遺構面として掘立柱建物に伴う柱穴４個を検出した。

柱穴内からは９世紀代の須恵器高台杯片が出土している。

〔第４トレンチ〕

本発掘調査における下段部分に設定したトレンチである。

現水田耕作土に暗褐色土（土壌層・遺物包含層）を検出し、更に下層の暗黄褐色極細砂を遺構面として柱穴３個を検出した。

時期は第３トレンチ検出の柱穴と同じく９世紀代と考えられる。

以上の調査結果から、国道429号よりも下方南側に遺跡が存在すると判断された。

第Ⅳ章　本発掘調査の概要

第１節　本発掘調査の概要

確認調査結果を受け、本発掘調査を平成12年度に実施した。

本発掘調査対象区は、主尾根から南に伸びる２つの尾根に挟まれた谷部に立地している。谷の中央には現在でも谷奥より豊富な水量を提供する水路が南流しており、水路を挟み、東側をＡ地区（約609㎡）、西側をＢ地区（61㎡）として、２つの調査区を設定した。検出した遺構のほとんどはＡ地区に集中しており、Ｂ地区では僅かな柱穴を検出するにとどまった。

第２節　Ａ地区の調査

Ａ地区は、谷の奥から流れ出る水路の東側に位置しており、南北26m、東西33m、調査面積約609㎡を測る変形10角形の調査区である。

調査の結果、９世紀を中心とした遺構・遺物を検出した。

当該地は、斜面地の開田による削平が著しい部分である。調査前の当該地の景観は上下２段の水田となっている。上下段の落差は大きく、特に下段の水田平坦面を確保するために大きくカットされ、削られている。このため、北側（谷奥側）・南側（谷前面側）に比べ、中央の遺構の密度は薄い状態である。調査に際しては、このカット面を含むA地区南半を下段、一段高い谷奥側を上段として調査を行った。

１．A地区の層序（図版７　写真図版14・15）

北壁・西壁の土層断面図をあげた。

北壁は１層表土の下には厚く近現代の２層（整地層）が存在しており、その下に遺構面を構成する土壌層・整地層が出現する。遺構面は２面存在することが土層堆積より読み取れ、それは西壁によって更に明確である。北壁では３層が第１面の土壌層に対応し、４層･６層が第１面を構成する整地層である。

これに対して、７層はやや深い部分にあり、第２面の土壌層に対応する。８層は第２面を構成する整地層と考えられる。

北壁の堆積から第１面・第２面ともに西側へ傾斜していることが分かる。これは、遺構面が南側だけでなく西側へも傾斜することを示している。これは後述するＢ地区西壁の堆積で更に顕著である。

西壁の示す堆積状況は以下の通りである。

表土下に近現代の整地層（盛土）１・20層が存在する。これらはＡ地区の北壁２層に対応する。

13・14層は攪乱土を埋土にしており近世以降の溝埋土である。

２層・11層は比較的水平に堆積する土層である。Ａ地区北壁の３層に対応する。この層は土壌化しており炭を含む。

３層・５層・17層は２層・11層の下にあり、ほぼ水平に検出されている。特に17層はその上面についても水平な面を造り出している。

２層・11層と３層・５層・17層はＡ地区における第１面を構成する整地層と土壌層（あるいは炭が広く含まれていることから火災層）と考えられる。

４層は３・５層を掘りこむ土坑と考えられる。２層が被覆する。第１面の遺構と捉えられる。

18層は17層の直下にあり、地形の傾斜にあわせてやや斜めに堆積する。Ａ地区における第２面を構成する土壌層と考えられる。炭を含む７層あるいは９層についても18層に続く層位と考えられる。

８層・19層は７層・９層・18層の下にある。地形の傾斜にあわせてやや斜めに堆積する。第２面を構成する堆積層と考えられる。

８層上面から切り込む15層はSD06の埋土である。11層が被覆することから第１面もしくは第２面に伴う遺構と考えられる。柱穴12・16についても同じである。

以上の点から西壁では２枚の土壌層があり、それぞれ下層に整地層あるいはベースとなる堆積層が出現している。これは今回の調査において部分的に析出した２枚の遺構面に対応すると考えられる。

特に第１面では、南北の傾斜に対して段差を造り、土を盛り出して幅５ｍ前後の平坦面を造り出していることが特徴的である。

２．遺構

掘立柱建物跡９棟・焼土坑４基・土坑５基・落ち込み１基・溝９条を検出している。掘立柱建物跡は調査区北半部と南半部に集中して検出している。

⑴　掘立柱建物群・柱穴群

掘立柱建物は上段において２棟、下段において７棟復元できた。これ以外に300個近い柱穴を検出している。

掘立柱建物のうち、総柱建物と考えられるものは１棟（SB01）、棟持ち柱を持つと考えられる建物が４棟（SB02・SB03・SB06・SB09）、側柱建物が４棟（SB04・SB05・SB07・SB08）復元できた。

柱穴から出土した遺物は少ないが、９世紀・10世紀代の遺物に加え、少量であるが７世紀前半あるいは11世紀に下る遺物が出土している。

SB01（図版９　写真図版６・７・８）

検出状況　調査区南西半、SD04の南側において検出した。SB02・SB03・SB08・SD05・SD07・SD08と重複するが先後関係は不明である。

後世の削平により建築時の地面の状況は不明であるが、柱穴の深さが大きく変わらないことから推して、緩やかな北から南への傾斜地に建てられていたと考えられる。

形状・規模　桁行方位をN70°Eに取る総柱建物跡である。桁行東西３間（7.40m）・梁行南北３間（6.60m）の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.40m～2.50m・梁行１間1.80m・2.30m・2.50mである。

北梁行の間には２箇所柱穴が検出されており、間仕切りもしくは床支えの柱であったと考えられる。

柱　穴　円形を基本とし掘方径30㎝～60㎝、柱痕は径約20㎝～25㎝、深さは約30㎝～50㎝である。

出土遺物　柱穴SP1194から製塩土器６・須恵器皿３、SP1214から須恵器蓋１・須恵器杯Ａ２が出土している。

SB02（図版10　写真図版６・７・９）

検出状況　調査区南西半、SD05の南側において検出した。SB01・SB03・SB05・SD07・SD08とは重複するが先後関係は不明である。

後世の削平により建築時の地面の状況は不明であるが、緩やかな北から南への傾斜地に建てられていたと考えられる。

形状・規模　桁行方位をN71°Eに取る棟持ち柱を持つ建物跡である。桁行東西４間（9.40m）・梁行南北２間（5.40m）の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.60m・2.10m・梁行１間2.70mを基本にしているが、北桁行の柱穴は細く、間隔についてもばらつきがある。

棟にあたる部分に３個の柱穴が通り、掘方径の規模から棟持ち柱であった可能性が考えられる。

柱　穴　円形を基本とし掘方径40㎝～70㎝、柱痕は径約20㎝～30㎝、深さは約40㎝である。

出土遺物　柱穴SP1175から須恵器杯Ａ７が出土している。

SB03（図版11　写真図版６・７・９）

検出状況　調査区南西半、SD04の南側において検出した。SD05とは柱穴が切り合い古い。SB01・SB03・SB08・SD07・SD08とは重複するが先後関係は不明である。

後世の削平により建築時の地面の状況は不明であるが、柱穴の深さが大きく変わらないことから推して、緩やかな北から南への傾斜地に建てられていたと考えられる。

形状・規模　桁行方位をN19°Wに取る棟持ち柱を持つ建物跡である。桁行南北３間（9.00m）・梁行東西２間（5.20m）の規模と考えられる。建物の柱間は、桁行１間3.20mと2.60m・梁行１間2.50m～2.60mである。棟にあたる部分に３個の柱穴が通るが、全体に規模は小さい。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約30㎝～50㎝、柱痕は径約30㎝、深さは約30㎝～40㎝である。

出土遺物　柱穴SP1235から須恵器杯８、SP1250から須恵器平瓶９が出土している。

SB04（図版12　写真図版９）

検出状況　調査区南東半に位置し、SB05・SB06の北側に近接する。

形状・規模　桁行方位をN80°Wに取る側柱建物跡である。桁行東西２間(5.80m)・梁行南北１間(2.60m・2.80m）の規模と考えられ、南側の歪みが激しい小規模な建物であったと考えられる。ただし、南桁行きの中間の柱がなく、両梁行の柱間が揃わない点から、南北棟であった可能性も残る。建物の柱間は、桁行１間約2.40mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約30㎝～50㎝、柱痕は詳らかではない。

出土遺物　柱穴SP1150から土師器小皿10が出土している。

SB05（図版12　写真図版９・10）

検出状況　調査区南東半に位置し、SB02と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN71°Wに取る側柱建物跡である。桁行東西２間(5.30m)・梁行南北２間(3.20m)の規模である。建物の柱間は、桁行１間約2.65m・梁行１間1.60mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径60㎝と30㎝の２種、柱痕は径約20㎝、深さは約30㎝である。

出土遺物　柱穴SP1153から須恵器蓋11が出土している。

SB06（図版13　写真図版９）

検出状況　調査区南東端に位置する。南コーナーの柱穴は調査区外にある。

形状・規模　桁行方位をN43° Eに取る棟持ち柱を持つ建物跡である。桁行東西３間（5.00m）・南北梁行１間（2.80m）の規模である。建物の柱間は、桁行１間約1.20mもしくは2.60mである。南北の桁行で柱穴が片側に密な点が特徴である。

柱　穴　円形を基本とし掘方径30㎝～40㎝である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB07（図版13　写真図版６・７）

検出状況　調査区北端に位置する。建物の大半は調査区外にある。

形状・規模　軸方位をN30° Eに取る側柱建物跡と考えられる。南北１間（2.50m）以上・東西２間（4.70m）以上と考えられるが、一部柱穴が消失しているため正確な規模は不明である。柱間は2.0mと2.60mの２種ある。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約40㎝前後、柱痕は径約20㎝、深さは約40㎝である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB08（図版14　写真図版６・７）

検出状況　調査区中央西寄りに位置する。SB01・SB03と重複しているが先後関係は不明である。

形状・規模　桁行方位をN69° Eに取る側柱建物跡である。桁行東西２間（5.50m）・梁行南北２間（4.40m）の規模である。建物の柱間は、桁行１間2.80m・梁行１間1.80m・2.60mである。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約40㎝～60㎝、柱痕は径約20㎝、深さは約30㎝である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SB09（図版14　写真図版６・７）

検出状況　調査区北端西寄りに位置する。建物の大半は調査区外にある。

形状・規模　軸方位をN19° Wに取る棟持ち柱を持つ建物跡である。桁行南北４間（2.90m）以上・梁行東西２間（5.20m）の規模である。建物の柱間は、南北で0.70mと密に柱穴が存在する。東西は2.60m前後を測り、間仕切りに伴うと考えられる柱穴を２個検出している。

東辺の柱穴は５個と多く、板壁などの施設が存在した可能性が考えられる。

柱　穴　円形を基本とし掘方径約30㎝～40㎝、深さは約50㎝を超える。

出土遺物　柱穴SP1083から須恵器蓋12、須恵器杯13が出土している。

⑵　土坑・落ち込み・焼土坑

土坑５基・方形落ち込み１基・焼土坑４基を検出した。

SK1101（図版15）

検出状況　調査区西端において検出された。SB01の北西に近接する。

形状・規模　不整な楕円形を呈する。規模は長径約0.85m・短径0.80m・深さ約40㎝を測る。土坑底は丸く掘られている。

埋　土　３層に分かれて堆積しており、上層には炭化物を含む黒褐色礫混じり細砂、中層には黄褐色細砂、最下層には褐灰色シルト質細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK1124（図版15）

検出状況　調査区北端において検出された。SB07と重複して存在する。

形状・規模　卵形を呈する。規模は長径約1.0m・短径0.75m・深さ約25㎝を測る。土坑は箱形に掘られ、底面は平坦に掘られている。

埋　土　土坑底には褐色砂質土細砂が溜まり、その上をにぶい黄褐色砂質土細砂が埋め尽くしている。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK1126（図版15）

検出状況　調査区北西端において検出された。SB09と重複して存在する。

形状・規模　洋梨形を呈する。規模は長軸約0.80m・横幅0.65m・深さ約28㎝を測る。土坑底は薬研状に掘られており矩形の断面形状である。

埋　土　堆積は大きく３層に分かれるが何れも水平に堆積する。下層にはにぶい黄褐色粗砂混じり極細砂が堆積しており、中層には暗褐色粗砂混じり極細砂、上層には中層よりやや暗い暗褐色粗砂混じり細砂が堆積する。

出土遺物　須恵器杯蓋30・皿31・杯B32が出土した。

SK1218（図版15）

検出状況　調査区中央西寄りにおいて検出された。SD04と切り合い新しく、SB08と重複して存在する。

形状・規模　平面形状は不整な俵形。規模は長軸約0.9m・横幅0.75m・深さ約45㎝を測る。尖底状に掘られている。

埋　土　堆積は大きく３層に分かれる。下半には黄灰色シルト混じり粗砂が北半を中心に堆積する。その上をにぶい黄褐色シルト質細砂が埋め、上層には暗黄灰色礫混じり細砂が堆積する。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK1233（図版15）

検出状況　調査区中央、SB02と重複して存在する。

形状・規模　長楕円形、豆形を呈する。規模は長軸約0.8m・短軸0.43m・深さ約12㎝を測る。土坑は浅い箱形に掘られ、底面は平坦に掘られている。

埋　土　埋土は１層、にぶい黄褐色細砂が堆積する。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SX1230（図版16　写真図版12）

検出状況　調査区中央北寄りにおいて検出された。SX1130と切り合い、SB08の東隣に位置する。

形状・規模　不整な隅丸方形を呈する。規模は東西約1.90m・南北約2.30m・深さ約６㎝を測る。土坑の底部は平坦であり、人為的に掘削され、削平を受けたと考えられる。

埋　土　埋土に灰黄褐色シルト・粗砂混じり細砂が堆積している。

出土遺物　土師器甕33が出土している。

備　　考　SX1130と接しており、関連する可能性がある。

SX1130（図版16　写真図版12）

検出状況　調査区中央北寄りにおいて検出された。SX1230と切り合い、SB08の東隣に位置する焼土坑である。

形状・規模　不整な円形を呈する。規模は径約0.6m・深さ約６㎝を測る。浅い皿状を呈する。

埋　土　焼土層である。

出土遺物　出土遺物はない。

備　　考　SX1230と接しており、関連する可能性がある。

SX1129（図版16）

検出状況　調査区北西端、SB09南西側において検出された。SX1300と近接する焼土坑である。

形状・規模　円形を呈する。規模は径約0.45m・深さ約10㎝を測る。土坑は丸底に掘られている。

埋　土　焼土・炭が混じる暗褐色細砂混じり極細砂が堆積する。

出土遺物　出土遺物はない。

SX1276（図版16　写真図版12）

検出状況　調査区北西端、SB09東側において検出された焼土坑である。

形状・規模　不整な円形を呈する。規模は径約0.4m・深さ約５㎝を測る。底面は凹凸が激しい。

埋　土　焼土が充満する。

出土遺物　出土遺物はない。

SX1300（図版16　写真図版12）

検出状況　調査区北西端、SB09西側において検出された。SX1129と近接する焼土坑である。

形状・規模　卵形を呈する。規模は長軸約0.35m・短軸0.3m・深さ約６㎝を測る。土坑は箱形に掘られ、底面は平坦である。

埋　土　全体に薄く焼けており、褐色粗砂混じり細砂が堆積する。

出土遺物　出土遺物はない。

⑶　溝状遺構

溝状遺構は９条検出している。SD03は近世以降に造成された石垣に伴うもので、出土遺物も近代以降のみであったため、本報告より除外した。

SD01（図版17　写真図版13）

検出状況　調査区下段北端において検出した。上段との境に接し、下段を区画する溝である。SD02・SD06と並行して東西方向（N79° E）に走り、西端から直角に南へと曲がる。

形状・規模　東西から南に流れる幅35㎝・深さ25㎝・検出全長19mを測るＵ字形の溝である。

埋　土　埋土は黄灰色極細砂。

出土遺物　須恵器杯・甕、土師器甕などの細片が出土しているが、図示できる出土遺物はない。

SD02・SD06（図版17　写真図版13）

検出状況　調査区下段北端において検出した。上段との境に接し、下段を区画する溝である。SD01と並行して東西方向（N85° E）に走り、西端から直角に南へと曲がる。SD02とSD06の間は途切れ約３ｍ間が空いているが、同一の溝と考えられる。標高が低くなるSD06はSD02に比べ幅が広がる形状になるものと考えられる。

形状・規模　SD06では幅60㎝・深さ10㎝、浅い皿状の断面形状をとる。

埋　土　埋土は黄灰色極細砂。

出土遺物　須恵器、土師器甕などの細片が出土しているが、図示できる出土遺物はない。また、SD02の埋土上部からは染付片も出土している。

SD04（図版17）

検出状況　調査区下段中央において検出した東西方向（N81° E）に走る溝である。SK1218と切り合い先行する。またSB08と重複する。

形状・規模　浅い皿状の断面を持ち、規模は幅33㎝・深さ５㎝・全長10ｍを測る。走向はSD07・SD08に近い。

埋　土　灰黄褐色シルト質細砂が堆積している。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

SD05（図版17　写真図版13）

検出状況　調査区下段中央において検出した東西方向（N64° E～N81° E）に走る溝である。SB03と切り合い新しい。また、SB01・SB08と重複する。

形状・規模　浅いＶ字状の断面を持ち、規模は幅85㎝・深さ18㎝・全長11ｍを測る。溝は傾斜に合わせ、緩い円弧を描き、走向はSD09に近い。

埋　土　灰黄褐色シルト質粗砂混じり細砂が堆積している。

出土遺物　須恵器杯A35・杯B36が溝底より出土している。このほか、須恵器甕・高杯、土師器甕片が出土している。

SD07（図版17　写真図版13）

検出状況　調査区下段南寄りにおいて検出した。N81° Eに走向を持つ。SD08と並行している。

形状・規模　浅い皿状に掘る。全長8.0ｍ・幅23㎝・深さ４㎝を測る。走向はSD04に近い。

埋　土　黄灰色細砂が堆積している。

出土遺物　須恵器椀底部37が出土している。

SD08（図版17　写真図版13）

検出状況　調査区下段南寄りにおいて検出した。N81° Eに走向を持つ。SD07と並行している。

形状・規模　浅い皿状に掘る。全長7.5m・幅35cm・深さ７cmを測る。走向はSD04に近い。

埋　土　黄灰色細砂が堆積している。

出土遺物　須恵器杯B38のほか、サヌカイト剥片が出土している。

SD09（図版17　写真図版13）

検出状況　調査区下段南端寄りにおいて検出した。SB06と重複する。

形状・規模　浅いＵ字形の断面形状を持つ。全長5.6m・幅37cm・深さ10cmを測る。走向はSD05に近い（N71° E）。

埋　土　にぶい黄褐色粗砂混じり細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

３．遺物（図版18～22　写真図版19～30）

Ａ地区の遺物は116点図示した。

⑴　掘立柱建物出土の遺物（１～13）

１～６はSB01に伴う柱穴から出土した遺物である。

１・２はSP1214から出土した。

１は須恵器杯蓋である。頂部に摘みはない。口縁部は屈曲し、端部は肥厚する。天井部は回転ヘラ削りの後ナデを施す。

２は須恵器杯Ａである。底部外面はヘラ切りの後板ナデを行う。

３はSP1194から出土した須恵器皿Ｂである。口縁部は屈曲し水平に伸びる。端部はやや肥厚する。

４・５はSP1201より出土した。

４は須恵器杯Ｂの底部である。やや外側へ踏ん張る高台を張り付ける。

５は須恵器杯の底部片である。外面に墨書があるが意味は不明である。

６はSP1194より出土した製塩土器である。口縁部は内湾し、端部は上面が丸みを持つ厚手の製品である。

７はSB02に伴う柱穴SP1175から出土した須恵器杯Aである。底部の殆どを欠く。口縁部は強い回転ナデにより心持ち外反を見せる。

８・９はSB03に伴う柱穴から出土した遺物である。

８はSP1235から出土した須恵器杯Ａである。２・７に比べ杯部は外方へ開く。

９はSP1250から出土した大型の平瓶の口頸部である。口縁端部はやや受け口となり上面に面を持つ。

10はSB04に伴う柱穴SP1150から出土した土師器底部である。薄手の作りから皿の可能性もある。

11はSB05に伴う柱穴SP1153から出土した須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境が明確ではない平坦な器形である。口縁端部は折り返され、断面は三角形である。

12・13はSB09に伴う柱穴SP1083から出土した遺物である。

12は須恵器蓋である。杯蓋ではなく短頸壺に伴う蓋の可能性が高い。天井部は丸く、頂部は回転ヘラ切りを施す。

13は須恵器杯Ｇの口縁部である。立ち上がりは短く内傾し、返りもまた短く外方へ向く。

⑵　各柱穴出土の遺物（14～29）

14～29は建物として復元できなかった柱穴より出土した遺物である。

14はSP1184から出土した土師器杯片である。口縁端部は強くヨコナデする。内面には放射状の暗文を施す。

15はSP1256出土の土師器甕の上半である。口縁部はくの字に屈曲し、体部外面は粗い縦刷毛、内面は横刷毛を施す。

16はSP1012出土の須恵器杯Gの口縁部である。立ち上がりは短く内傾し、返りは水平に張り出す。

17はSP1192出土の須恵器杯蓋である。平坦な器形を持ち、口縁端部は折り返され、断面は矩形である。

18はSP1174出土の須恵器杯B底部である。貼り付け高台は短く端部は内傾している。

19はSP1079出土の土師器杯である。底部が丸く、12同様の蓋の可能性もある。

20はSP1191出土の須恵器杯Ａである。

21はSP1165出土の土師器椀である。内面には横方向のヘラ磨きを施し、若干のススが残存することから粗雑な黒色土器とも考えられる。底部は回転糸切りを施す。

22はSP1097より出土した須恵器椀である。体部が外方へ開きロクロナデの凹凸が顕著である。

23はSP1206より出土した瓦器椀底部である。内面にはヘラ磨きが認められる。底部は回転糸切りを施す。

24はSP1009より出土した須恵器椀底部である。突出しており、回転糸切りを施す。

25はSP1171より出土した須恵器椀底部である。内面は窪み、外面は回転ヘラ切りである。

26～29は下層の柱穴SP2003から出土した。

26は小型の土師器甕である。球形の体部を持ち外面には粗い縦刷毛を施す。

27は土師器甕である。口縁部は外方に開き端部内側は窪む。体部外面には縦刷毛、内面には横刷毛を施す。

28は27と同形態甕の口縁部である。

29は須恵器杯Ｂ底部である。貼り付け高台は短く端部は水平である。

⑶　各遺構出土の土器（30～38）

30～38は土坑・溝出土の遺物である。

30～32はSK1126より出土した。

30は17と同様の須恵器杯蓋である。天井部は回転削り後ナデを施し、口縁端部は折り曲げ、断面は矩形である。

31は須恵器皿で、口縁端部は紡錘形、底部外面はヘラ切り未調整である。

32は須恵器杯Ｂで、口縁部を欠く。貼り付け高台は短く断面は逆台形である。

33はSX1230より出土した土師器甕である。ラッパ形に開く口頸部に卵形の体部を持つ。体部外面は縦方向の板ナデ、内面は横方向の板ナデの後頸部付近に更に横刷毛を施す。

34はSX1256出土の瓦器椀である。心持ち突出する底部に、口縁部付近において内湾する体部を持つ。

35・36はSD05より出土した須恵器杯である。

35は杯Ａで、外方に開く杯部を持ち、器壁は全体に厚い。

36は杯Ｂで、内湾する体部に外側へ踏ん張る短めの貼り付け高台が付く。

37はSD07より出土した須恵器椀である。突出する底部に外方へ開く体部が付く。

38はSD08より出土した須恵器杯Bである。口縁部を欠く細片である。高台は体部との境近くに付き、断面は角形、端部は水平である。

⑷　**包含層出土の土師器**（39～78）

39～78は包含層出土の土師器である。

39～55の内50・53・54は高杯で、それ以外は杯である。

39・40・41は平坦な底部より杯部が上方に立ち上がり、須恵器杯Ａに形状が類似する。39は内外面にヘラ磨きを施す。

42・43・44は内部に放射状の暗文を施す、器高の低い皿形態の製品である。何れも口縁部はヨコナデを施す。

また、44は46と同じく口縁端部が外反する。体部をヘラ削りの後、横・斜め方向のヘラ磨きによって調整している。

45～49・51・52・55は丸みを帯びた体部を持つ杯である。

45～48・51については外面を横方向のヘラ磨き、内面は放射状の暗文を施す。

51は外面下半はヘラ磨きを施し、口縁部はヨコナデを施す。

49は内面はヨコナデ、外面は板ナデを施す。

52は内外面の調整は定かではない。

55は体部外面はヘラ削りを施す。

50は内外面にヘラ磨きを施すが、形状から高杯の杯部と考えられる。

53は高杯の脚部である。外面はヨコナデ、脚裏は横刷毛を施す。

54は卵形の杯部を持つが、口縁部を欠く。脚部には円形の透かし孔が存在するが、個数は不明である。外面は縦方向の板ナデを施す。

56～69は土師器甕である。

56・57は口縁部が短く外反する小型甕である。体部は球形で、外面には縦刷毛、内面には横方向のヘラ削りを施す。

58～60は、口縁部が立ち上がった後大きく外反する中型の甕である。

58は内外面刷毛調整、59・60は、内面は横方向のヘラ削りを施す。

61は口縁部が直口し端部が外側へ水平に拡張する。

62は器壁が薄く、口縁部は緩やかに外反している。

63～65は何れも口頸部がくの字に屈曲する。

63・64は口縁部が外反し端部が水平に近く張り出す。

65は厚手の器壁を持つ。外面は縦刷毛、内面には横方向のヘラ削りを施す。

66は立ち上がった頸部から口縁部が大きく屈曲し、水平に張り出す。端部は摘みあげる。

67は最大腹径を頸部に持つ長胴形の甕である。

68は口縁部が水平に張り出す大型の甕の口縁部である。

70・71は直線的な口縁・体部を持つ土師器甑である。外面には刷毛を主とした調整を施し、内面は削りによる調整を行っている。

72・73は甕もしくは甑の取手である。

74・75は製塩土器である。外面は口縁端部までともに指オサエ痕が残る。74はほぼ外方へ開き、75はやや直口し厚手である。

76・77・78は黒色土器椀である。

76は内面に横方向のヘラ磨きを施す。内外面ともに炭素が吸着する。

77は突出する底部を持つ内黒の黒色土器である。底部は回転ヘラ切り、外面には指オサエ痕が残る。

78は77に比べやや底部の突出が低い内黒の黒色土器である。底部は回転糸切りである。

⑸　包含層出土の須恵器（79～110）

79～110は包含層から出土した須恵器である。

79～87は須恵器杯蓋類である。

79は天井部を欠く。12と同様と考えられる。

80は摘みを持たない。立ち上がりは短く、返りより下方に殆ど出ない。

81・82は杯Ｂに伴う蓋である。

83は口縁端部で屈曲する。

84は83に比べ天井部が丸く、口縁端部付近の屈曲は緩やかである。内面に墨痕があり、転用硯に使用されたと考えられる。

85は84に比べ杯部が直線的に傾斜し、口縁端部の折り返しは三角形である。

86は口縁部が大きく屈曲する。端部の折り返しは丸みを帯びる。

87は口縁端部の折り返しが退化し内面に僅かな窪みとなる。天井部は広く回転削りを施す。

88～93は須恵器杯Eに属す。

88は口縁端部が外反する。89～92はほぼ直口する。93を含め何れも底部は回転ヘラ切りを行い、ほとんど未調整である。

94・95は須恵器皿Ａである。口縁端部が強いナデによって外折する。底部はヘラ切り後ナデを施す。

96～98は須恵器杯Ａである。杯部は何れも外方へ素直に開き、底部はヘラ切り後ナデを施す。

99は須恵器皿Ｂである。体部の形状は94と類似する。高台は高く、体部との境近くに貼り付けられる。端部は外傾する

100～107は須恵器杯Ｂである。

100は小径である。杯部は深く、立ち上がりは急である。高台は高く、体部との境近くに貼り付けられる。端部は若干外傾する。

101は杯部が直に立ち上がり、高台は体部の境よりかなり内側に貼り付けられる。断面は細く逆台形を呈し、端部は平坦である。

102は深い器形である。高台は低く、体部との境近くに貼り付けられる。断面は細く逆台形を呈し、端部は平坦である。

103は102に比べ浅い器形である。杯部は外方へ開く。高台は低く、体部との境近くに貼り付けられる。断面は逆台形を呈し端部はやや外傾する。

104の器形は102に近く、高台は低く外側へ踏ん張りをみせる。体部との境近くに貼り付けられる。

105は深い器形であるが、口縁部を欠く。高台は低く、体部との境近くに貼り付けられる。断面は角

形を呈し、端部は平坦である。

106・107は底部のみの破片である。

106の高台は低く、体部との境近くに貼り付けられる。端部を外側に拡張し、下面は平坦である。107は体部との境近くに貼り付けられる。断面は逆台形を呈し端部は平坦である。

108は平瓶の体部である。把手部分の痕跡が残る。肩部に稜を持たず、最大径は中ほどにある。

109は壺の体部である。肩が張る器形である。

110は台付き壺の底部である。貼り付けた台は剥離している。

111～116は包含層より出土した古代末から中世の遺物である。

111・112は須恵器椀、底部を欠く。ともに大きく開く形である。

113は突出する須恵器椀底部である。外面は回転糸切り、内面は窪む。

114は須恵器捏鉢。口縁端部は丸く内側に巻き込む。14世紀末～15世紀初頭の時期が想定される。

115は須恵器壺の下半である。底部は突出し回転糸切り後ナデを施す。

116は緑釉陶器椀である。口縁部を欠く。ほぼ全体に釉が施され篠産と推定される。

第３節　Ｂ地区の調査

Ｂ地区は、谷の奥から流れ出る小川の西側に位置しており、Ａ地区の水路を挟んだ東隣に位置する。長辺17m、短辺13m、調査面積約61㎡を測る三角形の調査区である。

調査の結果、平安時代を中心とした遺物が出土した。遺構は柱穴９個と乏しい。

１．Ｂ地区の層序（図版８　写真図版17）

Ｂ地区の西壁の土層断面を上げた。Ａ地区に対して明瞭な遺構面は検出しがたいが、堆積は以下の様相をみせる。

１層～５層は、Ａ地区の北壁２層・西壁１・２層に対応する。これらは、近現代の整地層（盛土）である。

６層・７層は比較的水平に堆積する土層である。

６層は、Ａ地区北壁の３層、あるいは西壁における６層に対応する。

７層はＡ地区北壁の６層、あるいは西壁における７層・12層・14層に対応すると考えられる。

６層・７層はＡ地区における第１面を構成する整地層と土壌層（あるいは火災層）に対応する。

８層は地形の傾斜にあわせて斜めに堆積する。Ａ地区北壁の７層、あるいは西壁における８層・15層・16層に対応すると考えられる。８層はＡ地区における第２面を構成する土壌層と考えられる。

９層・10層・11層は第２面を構成する層位、Ａ地区北壁の８層、あるいは西壁における19層・20層に対応すると考えられる。

Ｂ地区ではＡ地区における第１面・第２面に相当する層序が認められるが、Ａ地区において認められる平坦面の造成は乏しく、第２面を構成する８層が厚く斜めに堆積するなど、建物群の立地には適さない傾斜地にあたると考えられる。このことは、逆にＢ地区には遺物が流れ込みやすかったことを示している。

２．遺構（図版５・６　写真図版16）

柱穴は９個と乏しい。ほ場整備による削平のため残りが悪く、建物の復元はできなかった。柱穴群は

調査区北半を中心に分布しており、掘立柱建物跡が存在した可能性は高い。

３．遺物（図版22　写真図版30・31）

13点図示した。図示した遺物はすべて包含層から出土している。

⑴　平安時代前期の遺物（117～123）

117は口径55㎝を超える大型の土師器鍋の口縁部である。端部外面が凹線状に窪む。

118は須恵器杯蓋である。天井部は回転ヘラ削り後ナデを施す。

119は須恵器杯蓋である。口縁部は強い回転ナデによって屈曲する。

120は須恵器皿である。底部外面は回転ヘラ切り後ナデを施す。口縁部は強いナデによって若干外反する。

121は須恵器杯Ａである。底部外面は回転ヘラ切り後ナデを施す。

122は須恵器杯Ｂ底部である。底部外面は回転ヘラ切り後ナデを施し、高台を張り付ける。

123は須恵器小壺の下半と考えられる。丸底を呈し、外面はナデ、内面は指オサエとヨコナデによる整形・調整を行う。

⑵　平安時代後期の遺物（124～129）

124は黒色土器椀底部である。心持ち突出した底部を持ち、底部は回転糸切りを施す。外面には横方向、内面には横方向と不定方向のヘラ磨きを施す。時期は11世紀代、丹後型の黒色土器であろう。

125は黒色土器椀底部である。心持ち外側へ踏ん張る輪高台を持ち、内外面ともに横方向のヘラ磨きを施す。

126は須恵器椀口縁部片である。やや浅い器形と考えられる。

127は灰釉陶器椀である。外側へ踏ん張る厚手の貼り付け高台に、緩やかに内湾する体部と外反する口縁部を持つ。口縁端部は丸みを帯びる。釉薬は内外面とも底部に及んでいない。

128は緑釉陶器椀である。やや外側へ踏ん張る厚手の貼り付け高台に、緩やかに内湾する体部を持つ。口縁部を欠く。高台裏には回転糸切り痕が残る。釉薬は高台裏と畳付きに及んでいない。

129は緑釉陶器椀である。丸みを帯びた短めの貼り付け高台に、緩やかに内湾する体部を持つ。口縁部を欠く。高台裏には回転糸切り痕が残る。釉薬は体部外面下半・底部外面には及んでいない。

表１　出土遺物　観察表（Ｉ）

報告番号	図版番号	写真図版番号	種　別	器　種	出土地区	出土遺構	層　位	備　考	法　量（cm）		
									口径	器高	底径
1	18	19	須恵器	杯蓋	A 地区 中～下段西端	SB01・SP1214	埋土	完掘時	(14.7)	2.2	
2	18	19	須恵器	杯 A	A 地区 中～下段西端	SB01・SP1214	埋土	完掘時	(13.0)	(3.9)	(10.4)
3	18	19	須恵器	皿 B	A 地区	SB01・SP1194			(15.8)	(2.0)	(11.5)
4	18	20	須恵器	杯 B 底部	A 地区 下段西側	SB01・SP1201	埋土中	断ち割り	－	(1.85)	(13.1)
5	18	21	須恵器	杯 底部	A 地区	SB01・SP1201			－	(0.6)	－
6	18	19	土製品	製塩土器	A 地区	SB01・SP1194			(11.6)	(4.0)	－
7	18	19	須恵器	杯 A	A 地区 下段西側	SB02・SP1175	埋土上層		(12.6)	(2.85)	－
8	18	20	須恵器	杯 A	A 地区	SB03・SP1235			(13.6)	(3.7)	(9.2)
9	18	20	須恵器	平瓶	A 地区	SB03・SP1250			(17.8)	(5.4)	－
10	18	20	土師器	小皿	A 地区 東側	SB04・SP1150	埋土上層		－	(1.3)	(6.2)
11	18	20	須恵器	杯蓋	A 地区 下段中央	SB05・SP1153	埋土中	断ち割り	(13.0)	(0.9)	
12	18	20	須恵器	蓋	A 地区	SB09・SP1083	埋土上層		(10.2)	(3.2)	
13	18	20	須恵器	杯 G	A 地区	SB09・SP1083	埋土上層		－	(2.45)	－
14	18	19	土師器	杯	A 地区 下段西側	SP1184	埋土上層		－	(1.9)	－
15	18	20	土師器	甕	A 地区 下段東側	SP1256	埋土中	完掘　写真有	(23.3)	(5.8)	－
16	18	20	須恵器	杯 G	A 地区	SP1012			(10.6)	(2.45)	－
17	18	20	須恵器	杯蓋	A 地区	SP1192			－	(0.95)	
18	18	20	須恵器	杯 B 底部	A 地区	SP1174			－	(1.2)	(13.0)
19	18	20	土師器	杯	A 地区 上段西側	SP1079	埋土中	完掘	(11.25)	(4.3)	－
20	18	20	須恵器	杯 A	A 地区	SP1191			－	(2.2)	(5.6)
21	18	21	土師器	椀	A 地区	SP1165			(16.3)	(5.05)	(6.1)
22	18	21	須恵器	椀	A 地区 西端	SP1097	埋土	完掘時	(13.7)	(4.6)	－
23	18	21	瓦器	椀 底部	A 地区	SP1206			－	(1.4)	6.6
24	18	21	須恵器	椀 底部	A 地区 上段中央	SP1009	埋土中	完掘	－	(2.15)	(7.1)
25	18	21	須恵器	椀 底部	A 地区	SP1171			－	(3.45)	(9.6)
26	18	21	土師器	甕	A 地区 上段東側	SP2003	埋土中		(10.5)	(5.05)	－
27	18	21	土師器	甕	A 地区 上段東側	SP2003	埋土中		(13.4)	(9.9)	－
28	18	21	土師器	甕	A 地区 上段東側	SP2003	埋土中		(14.0)	(3.65)	－
29	18	20	須恵器	杯 B 底部	A 地区 上段東側	SP2003	埋土中		－	(1.4)	(9.0)
30	19	22	須恵器	杯蓋	A 地区 上段西側	SK1126	埋土中		(14.2)	(1.2)	
31	19	22	須恵器	皿	A 地区 上段西側	SK1126	埋土中		(15.0)	1.8	(13.0)
32	19	22	須恵器	杯 B	A 地区 上段西側	SK1126	埋土中		－	(2.35)	(8.8)
33	19	22	土師器	甕	A 地区	SX1230	埋土中		(14.2)	(11.05)	－
34	19	22	瓦器	椀	A 地区 下段東側	SX1256	埋土上層	遺構	(10.4)	3.7	(4.66)
35	19	23	須恵器	杯 A	A 地区	SD05	埋土底　須恵器①	写有り	(12.4)	(3.1)	(9.9)
36	19	23	須恵器	杯 B	A 地区	SD05	埋土底　須恵器②	写有り	(13.1)	4.15	(8.2)
37	19	23	須恵器	椀	A 地区 下段中央	SD07	埋土中		－	(1.7)	(3.2)
38	19	23	須恵器	杯 B	A 地区 下段中央	SD08	埋土中	アゼより東側	－	(2.3)	－
39	19	24	土師器	杯	A 地区 下段中央	遺構面直上		人力掘削試掘 Tr.南側	(11.25)	2.6	(8.35)
40	19	24	土師器	杯	A 地区 下段東端部	遺構面直上		人力掘削	－	(3.8)	－
41	19	24	土師器	杯	A 地区 上段	遺構面直上		人力掘削	(15.4)	(3.38)	－
42	19	23	土師器	杯	A 地区 上段北東部	深掘り	赤褐色土中		(12.0)	(2.3)	(7.6)
43	19	24	土師器	杯	A 地区 上段北東部	深掘り	赤褐色土中		(13.7)	(2.55)	(8.5)
44	19	23	土師器	杯	A 地区 上段北東部	深掘り	赤褐色土中		(11.6)	(2.45)	－
45	19	24	土師器	杯	A 地区 上段		遺構面上		(10.9)	3.05	丸底
46	19	23	土師器	杯	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	(11.9)	(3.6)	－
47	19	24	土師器	杯	A 地区 北東隅	側溝	赤褐色炭混じり層		(11.18)	(3.4)	－
48	19	24	土師器	杯	A 地区 北東隅	側溝	赤褐色炭混じり層		(11.8)	4.2	－
49	19	23	土師器	杯	A 地区		遺構面上	調査区北東隅	11.9	3.8	－
50	19	24	土師器	高杯	A 地区 北東隅	側溝	赤褐色炭混じり層		(10.5)	(3.35)	
51	19	24	土師器	杯	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	(11.5)	(3.85)	－
52	19	24	土師器	杯	A 地区 上段東側	深掘 Tr.		東端壁より5m	(12.0)	(3.8)	－
53	19	23	土師器	高杯	A 地区		遺構面上	調査区北東隅	－	(4.1)	(9.4)
54	19	24	土師器	高杯	A 地区		包含層中		－	(6.4)	－
55	19	23	土師器	杯	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	(12.2)	(4.6)	－
56	20	24	土師器	小型甕	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	(8.0)	(10.75)	腹径 (12.6)
57	20	24	土師器	小型甕	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	(11.7)	(9.7)	腹径 (14.0)
58	20	24	土師器	甕	A 地区 上段			機械掘削 北東端 下層遺構含む	(14.8)	(6.4)	－
59	20	24	土師器	甕	A 地区 上段			機械掘削 北東端 下層遺構含む	(15.6)	(5.0)	－
60	20	24	土師器	甕	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	(15.2)	(4.1)	－
61	20	24	土師器	甕	A 地区 下段中央部	遺構面直上		人力掘削試掘 Tr.南側	(16.15)	(3.8)	－
62	20	24	土師器	甕	A 地区 下段	試掘 Tr.南側 遺構面直上		機械掘削	(17.1)	(4.6)	
63	20	25	土師器	甕	A 地区		遺構面上	調査区北東隅	(18.0)	(6.2)	－
64	20	24	土師器	甕	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	(23.5)	(5.25)	－
65	20	24	土師器	甕	A 地区 上段東側	深掘 Tr.		東端壁より5m	(29.2)	(6.0)	－
66	20	25	土師器	甕	A 地区 中段		黄褐色土		(20.75)	(11.5)	－
67	20	25	土師器	甕	A 地区		遺構面上	調査区北東隅	(26.45)	(10.1)	－
68	20	25・26	土師器	甕	A 地区 上段	遺構面直上		人力掘削	(38.0)	(2.4)	－
69	20	25・26	土師器	甕	A 地区 下段西側	遺構面直上		人力掘削	－	(5.25)	－
70	20	25・26	土師器	甑	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	(27.9)	(8.55)	－
71	20	25・26	土師器	甑	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	－	(8.8)	－
72	20	25・26	土師器	把手	A 地区 上段東側	深掘 Tr.		東端壁より5m	長さ (7.4)	(5.5)	幅 4.2
73	20	25・26	土師器	把手	A 地区 上段中央	遺構面	下層	深掘	長さ (7.0)	(8.1)	幅 (3.95)

表２　出土遺物　観察表（Ⅱ）

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土地区	出土遺構	層位	備考	法量（cm）		
									口径	器高	底径
74	20	26	土師器	製塩土器	A 地区 下段中央部	遺構面直上		人力掘削試掘 Tr.南側	－	(3.25)	－
75	20	26	土師器	製塩土器	A 地区 下段中央部	遺構面直上		人力掘削試掘 Tr.南側	(12.0)	(5.7)	－
76	20	26	黒色土器	椀	A 地区		包含層中		(13.0)	(2.65)	－
77	20	26	黒色土器	椀 底部	A 地区 下段中央部	遺構面直上		人力掘削試掘 Tr.北側	－	(1.9)	(5.9)
78	20	26	黒色土器	椀	A 地区 南側	遺構面直上		機械掘削	－	(1.5)	6.2
79	21	27	須恵器	杯蓋	A 地区 上段東側	遺構面精査			(9.9)	(3.15)	
80	21	27	須恵器	杯蓋	A 地区 下段中央部	遺構面直上		人力掘削試掘 Tr.南側	(7.5)	1.9	
81	21	27	須恵器	杯蓋	A 地区 下段			機械掘削	－	(1.9)	
82	21	27	須恵器	杯蓋	A 地区 下段	試掘 Tr.南側 遺構面直上		機械掘削	－	(1.9)	
83	21	27	須恵器	杯蓋	A 地区 上段	遺構面直上		人力掘削	(14.6)	(1.8)	
84	21	27	須恵器	杯蓋	A 地区 下段	試掘 Tr.南側 遺構面直上		機械掘削	(14.4)	(2.3)	
85	21	27	須恵器	杯蓋	A 地区 下段	試掘 Tr.南側 遺構面直上		機械掘削	(14.9)	(1.6)	
86	21	27	須恵器	杯蓋	A 地区 下段			機械掘削	(18.6)	(1.55)	
87	21	27	須恵器	杯蓋	A 地区 下段	試掘 Tr.南側 遺構面直上		機械掘削	(22.1)	(1.45)	
88	21	27	須恵器	杯 E	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	(9.3)	4.1	－
89	21	28	須恵器	杯 E	A 地区 上段東側	遺構面精査			(10.5)	3.95	(6.3)
90	21	28	須恵器	杯 E	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	(10.2)	(3.7)	－
91	21	28	須恵器	杯 E	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	(9.8)	(2.25)	－
92	21	27	須恵器	杯 E	A 地区 上段東側	深掘 Tr.		東端壁より5m	(9.8)	(3.65)	(7.2)
93	21	28	須恵器	杯 E	A 地区 上段東側	遺構面	下層	深掘	－	(2.95)	(6.0)
94	21	28	須恵器	皿 A	A 地区 下段中央部	遺構面直上		人力掘削試掘 Tr.南側	(14.7)	(2.05)	(12.08)
95	21	28	須恵器	皿 A	A 地区 下段			機械掘削	(13.6)	(2.4)	(10.5)
96	21	28	須恵器	杯 A	A 地区 下段西側	遺構面直上		人力掘削	(13.4)	3.15	(10.58)
97	21	27	須恵器	杯 A	A 地区 南側	遺構面直上		機械掘削	(13.5)	3.4	7.6
98	21	28	須恵器	杯 A	A 地区 下段中央部	遺構面直上		人力掘削試掘 Tr.南側	(13.3)	3.85	(9.4)
99	21	29	須恵器	皿 B	A 地区 下段	試掘 Tr.南側 遺構面直上		機械掘削	(17.0)	2.7	(13.2)
100	21	29	須恵器	杯 B	A 地区 下段北側溝			深掘	(9.9)	4.65	(6.05)
101	21	29	須恵器	杯 B	A 地区 下段			機械掘削	(12.9)	(3.55)	(8.25)
102	21	29	須恵器	杯 B	A 地区 下段	試掘 Tr.南側 遺構面直上		機械掘削	(15.2)	4.15	(11.8)
103	21	29	須恵器	杯 B	A 地区 南東部	遺構面直上		機械掘削	(17.8)	(3.75)	(13.1)
104	21	28	須恵器	杯 B	A 地区 上段			機械掘削	(17.7)	4.5	(14.3)
105	21	29	須恵器	杯 B	A 地区 下段東端部	遺構面直上		人力掘削	－	(4.5)	(10.65)
106	21	29	須恵器	杯 B	A 地区 上段	遺構面直上		人力掘削	－	(1.3)	(9.1)
107	21	29	須恵器	杯 B	A 地区 下段中央部	遺構面直上		人力掘削試掘 Tr.南側	－	(2.0)	(9.3)
108	21	28	須恵器	平瓶	A 地区 上段中央	遺構面	下層		－	(11.3)	腹径 (20.6)
109	21	29	須恵器	壺	A 地区 北端	遺構面直上			－	(7.0)	－
110	21	29	須恵器	台付壺	A 地区 上段			機械掘削 北東端 下層遺構含む	－	(4.3)	(6.0)
111	22	30	須恵器	椀	A 地区 上段		北壁際側溝	掘削中	(16.1)	(2.91)	－
112	22	30	須恵器	椀	A 地区 下段東端部	遺構面直上		人力掘削	(15.8)	(3.5)	－
113	22	30	須恵器	椀 底部	A 地区 下段東端部	遺構面直上		人力掘削	－	(1.75)	(5.8)
114	22	30	須恵器	捏鉢	A 地区 上段			機械掘削 北東端 下層遺構含む	(23.2)	(2.75)	－
115	22	30	須恵器	壺	A 地区 下段中央部	遺構面直上		人力掘削試掘 Tr.南側	－	(3.9)	(7.83)
116	22	30	緑釉陶器	椀	A 地区 上段			機械掘削 北東端 下層遺構含む	－	(2.4)	(4.55)
117	22	30・31	土師器	鍋	B 地区 下段東側	遺構面直上		人力掘削	(55.6)	(2.5)	－
118	22	30・31	須恵器	杯蓋	B 地区 下段東側	遺構面直上		人力掘削	(15.8)	(1.65)	
119	22	30・31	須恵器	杯蓋	B 地区 下段東側	遺構面直上		人力掘削	(18.0)	(1.5)	
120	22	30・31	須恵器	皿	B 地区 下段東側	遺構面直上		人力掘削	(14.6)	(1.8)	－
121	22	30・31	須恵器	杯 A	B 地区 下段東側	遺構面直上		人力掘削	(14.7)	(3.4)	(10.4)
122	22	30・31	須恵器	杯 B 底部	B 地区 下段東側	遺構面直上		人力掘削	－	(2.25)	(13.8)
123	22	30・31	須恵器	壺 底部	B 地区 下段東側	遺構面直上		人力掘削	－	(4.0)	丸底
124	22	31	黒色土器	椀 底部	B 地区 下段東側	遺構面直上		人力掘削	－	(1.45)	6.25
125	22	31	黒色土器	椀 底部	B 地区	北壁側溝・遺構面直上			－	(1.75)	(8.1)
126	22	31	須恵器	椀	B 地区	北壁側溝・遺構面直上			－	(3.5)	－
127	22	31	灰釉陶器	椀	B 地区			機械掘削	(10.15)	(3.45)	4.5
128	22	31	緑釉陶器	椀	B 地区			機械掘削	－	(3.0)	(7.6)
129	22	31	緑釉陶器	椀	B 地区			機械掘削	－	(2.1)	6.2

第Ⅴ章　地形の分析

平野遺跡の地形分析については、立命館大学文学部　非常勤講師　青木哲哉氏に依頼し、知見を頂いている。

遠阪地区において実施した埋蔵文化財発掘調査は、今回報告する平野遺跡以外に山垣地区に位置する城ノ腰遺跡、遠阪地区の土井遺跡・田ノ口遺跡など広範囲に亘っており、青木氏にはその都度、調査を依頼し、遠阪谷に分布する遺跡の立地について検討を加えて頂いている。

今回の報告では紙数の限りもあり、平野遺跡に限定した地形分析を掲載する。そして、周辺及び遠阪谷更には旧氷上郡全体を視野にいれた考察については、本報告書では触れない。また、本稿は現地において作成して頂いたコメント（現地表から遺構面までの観察と、下層への断ち割り作業による観察の計２回の分析を頂いている。）を西口が統合し、起稿したもので、更なる分析を重ねることによって変更される可能性があることをあらかじめお断りしておきたい。また、誤謬については西口に責がある。

今回の調査では、主に当該遺跡付近の地形と、調査区における遺構検出面以浅の堆積物を観察した。

平野遺跡は山垣地区に所在する城ノ腰遺跡と同じく山麓に発達する支流性の扇状地（麓屑面）に位置している。いずれの扇状地も、背後の山地に刻まれた谷中から、堆積物が供給されることによって形成されたものである。

これらは、氷上盆地の上流部（およそ北半分）を占める本流性の扇状地と比べてかなり急な地表傾斜を呈している。この地形に立地する兵庫県北中部の類例には、旧氷上郡氷上町横田遺跡や朝来市朝来町薬師前遺跡、同和田山町筒江大垣遺跡、篠山市河津館址などがあげられる。

今回報告する平野遺跡と、前回報告した山垣地区の城ノ腰遺跡の両調査区では、扇状地堆積物の最上部が観察されている。

平野遺跡の基本的な層序と堆積物の特色は、次のとおりである。

現地表面から遺跡が形成された面までを中心に観察すると、調査区中央部～東部の微高地では、黄灰色を呈する礫混じり砂質シルトの上に、暗赤灰色の礫・砂混じりシルト、黒灰色（南部では暗褐灰色）の礫・砂混じりシルト、灰色のシルト、褐灰色の礫・砂混じりシルト、褐灰色の礫混じり砂質シルトおよび現耕土が堆積している。

このうち、暗赤灰色の礫・砂混じりシルトと黒灰色（暗褐灰色）の礫・砂混じりシルトには土器片が混入する。前者は調査区北部に局地的に分布し、堆積物全体に炭と焼土が混入する。これは自然堆積とは考えにくい。攪乱を受けた堆積物か、あるいは凹地を整地するための人為的な盛土である可能性が高い。後者は９～10世紀頃の表土である。この堆積物からは、６世紀頃の遺物も検出されることから、この時期にも表土であった可能性が考えられる。調査区西端には旧河道が認められ、旧河道内では褐灰色の礫・砂混じりシルトと暗褐灰色の礫混じり砂質シルト（旧表土）が観察できる。これらは、黒灰色（暗褐灰色）の礫・砂混じりシルトの上位に位置する。９～10世紀には旧河道はまだ埋積されておらず、地表の起伏は現在より大きかったと考えられる。

更に遺構検出面からの断ち割りを行い、断面を観察した。

断ち割り断面では、旧中州を構成する堆積物と旧河道の埋積物、ならびにこれらを覆う堆積物が観察

される。これらは城ノ腰遺跡と同様、河成扇状地の堆積物である。旧中州堆積物は、断ち割り断面の最下位にみられ、礫・砂混じりシルトを挟む暗黄灰～褐灰色のシルト質砂礫である。その上面高度は、Ａ地区（全調査区の中央部～東部）とＢ地区（全調査区の西部）の境界付近で最も高くなり、比高は１ｍを超える。調査区の北側に分布する旧中州の先端が、この付近に存在すると考えられる。旧中州堆積物中には、黒褐色の砂混じりシルトが挟在する。これは旧表土であり、旧中州の形成中に安定した環境が存在したことを示している。

断ち割り断面では、旧河道がＡ地区東部で認められる旧河道内には、黒褐色のシルトと褐灰色のシルト質砂礫が堆積している。これは、当初湿地化していた流路内に、その後出水による砂礫の堆積がなされたことを物語る。旧中州堆積物と旧河道の埋積物の上位には、暗黄褐～灰褐色の礫・砂混じりシルトが認められる。この堆積物は、東方へ徐々に厚く堆積し、旧中州及び旧河道を埋没させている。

前回の調査（現地表から遺構面までの観察）で明らかになった内容と合わせると、平野遺跡の地形環境は以下のようになる。それは、①中州の形成とその東側（Ａ地区東部）における流路の形成→②流路底の湿地化と砂礫の埋積→③礫・砂混じりシルトの堆積に伴う旧中州と流路の埋没→④旧中州西側（Ｂ地区西部）における流路の形成→⑤流路底における砂礫の堆積→⑥安定した環境の現出→⑦主に礫混じり砂質シルトの堆積による流路の埋積である。なお、①の中洲が形成される際と、⑦の流路が埋積される過程では、それぞれ安定した環境がみられた。

９～10世紀を中心とする時期の人間生活は、⑥の安定した環境下で営まれた。この頃、Ａ地区の西半分とＢ地区東端が埋没した旧中州の先端上に、Ａ地区の東半分は埋没した旧河道上に位置していた。また、Ｂ地区の西部には、完全に埋積されていない流路が存在する状態であった。Ａ地区北東部の整地を目的とする盛土（あるいは攪乱された堆積物）は埋没旧中州の端から埋没旧河道上にかけて分布する。

以上の点が指摘できる。

第Ⅵ章　まとめ

調査の結果、平野遺跡は、７世紀後半・８世紀後半～９世紀代を中心に10世紀代前半、更に10世紀後半～11世紀、14世紀末～15世紀初頭にかけて継続した遺跡であることが判明した。

建物は９棟復元できた。建物はその方位から以下のグループに分けることが可能である。

Ａ群　建物の軸方位をN70°Ｅ前後に取るもの　SB01・SB02・SB03・SB05・SB08・SB09

Ｂ群　建物の軸方位をN80°Ｗ前後に取るもの　SB04

Ｃ群　建物の軸方位をN43°Ｅに取るもの　SB06

Ｄ群　建物の軸方位をN30°Ｅに取るもの　SB07

比較的方位を同じくするＡ群のSB01・SB05からは８世紀後半から９世紀前半の遺物が纏まって出土しており、出土遺物に近い時期に掘立柱建物群が形成された可能性が考えられる。

また、Ａ群の掘立柱建物は９棟のうち６棟が属しており、最も集落が機能していた時期である。

建物は床面積が50㎡前後の大型建物と面積15㎡前後の小規模建物に分かれており、主屋棟と付属屋が併存していたと考えられるが、調査範囲が限定的であるため、集落の配置については明らかではない。

Ｂ群の掘立柱建物SB04からは土師器底部10が出土しており、Ａ群よりも新しく10世紀代の建物の可能性が高い。

Ｃ・Ｄ群の建物については出土遺物がなく建物の時期は明らかではない。

出土遺物からは、SB09から出土した須恵器12・13や須恵器杯Ｇ16など７世紀に遡る遺物が出土しており、集落の開始が７世紀代に遡る可能性は高い。また、包含層から多量に出土している土師器杯あるいは須恵器杯についても、その中心は８世紀から９世紀代にあると考えられ、Ａ群が示す建物群の盛期と矛盾がない。しかし、黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器など10世紀から11世紀にかけての遺物が出土しており、遺跡のもう一つのピークが10世紀から11世紀代にあった可能性がある。

この様な集落の形成と継続の状況は、例えば遠阪地区において調査を実施した土井遺跡とも類似しており、緑釉陶器・灰釉陶器や墨書土器、転用硯あるいは製塩土器の存在など官衙的な遺物を所有する点についても類似している。

平野遺跡は山陰道から分かれ、福知山へと抜ける基幹道に面しており、交通の結節点としての立地に

表３　建物規模一覧

遺構名	建物形式	規模		床面積(㎡)	軸方位	時　期	備考
		桁行×梁行(間)	桁行×梁行(m)				
SB01	総柱建物	3×3	7.4×6.6	48.8	N70°Ｅ	平安前期	Ａ群
SB02	棟持柱建物	4×2	9.4×5.4	50.7	N71°Ｅ	平安前期	Ａ群
SB03	棟持柱建物	3×2	9.0×5.2	46.8	N19°Ｗ	平安前期	Ａ群
SB04	側柱建物	2×1	5.8×2.7	15.6	N80°Ｗ	平安中期	Ｂ群
SB05	側柱建物	2×2	5.3×3.2	16.9	N71°Ｗ	平安前期	Ａ群
SB06	棟持柱建物	3×1	5.0×2.8	14.0	N43°Ｅ		Ｃ群
SB07	側柱建物	1×2	2.5×4.7	11.7	N30°Ｅ		Ｄ群
SB08	側柱建物	2×2	5.5×4.4	24.2	N69°Ｅ	平安前期	Ａ群
SB09	棟持柱建物	4以上×2	2.9以上×5.2	15.0以上	N19°Ｗ	平安前期	Ａ群

ついても注目する必要がある。

Ａ群の建物の多くが、後の有力名主層の住居に匹敵する床面積を有している点を考えれば、田堵層などの存在を念頭に置く必要があると考えられる。

今回の調査では、遠阪谷の支谷に存在する、扇状地に展開した小規模な集落遺跡を調査することができた。

青垣町域での他の律令期の集落遺跡の例として、平野遺跡のほか、山垣地区の城ノ腰遺跡、遠阪地区の田ノ口遺跡（谷奥の遺物から推定）・土井遺跡があげられる。遺跡の規模の大小はあるが、立地の点からは、その何れもが、大規模な扇状地を避け、隣接する山麓に開いた小規模な扇状地にある点は興味深い。規模の大きな扇状地は８世紀代に至っても安定せず、特に遠阪谷は急峻な山に囲まれ、洪水起源の土砂が活発に供給されていたために、居住地としては適さなかったことがその要因と考えられる。

大規模な扇状地が安定し開発されるのは中世を待たなければならず、積極的な土地利用は段丘化が終了した遠阪川周辺の低地から（例えば山垣館周辺）と捉えることもできよう。

例えば、城ノ腰遺跡が存在するヲニ山の山麓には、古代の遺物が採取される小規模な扇状地がもう１箇所存在する。大規模な扇状地を挟み、山垣城を西側にみる地点にある無名の古代遺物散布地（図版３-27）は氷上郡埋蔵文化財分布調査（1996）によってその存在が明らかとなったが、城ノ腰遺跡と同様の小規模な律令期の集落が存在する可能性は高い。少し推測を広げてみるならば、遠阪谷に存在した律令期の集落遺跡は、山麓に点在する小規模な扇状地に立地しており、その多くが複合遺跡として、前代からの立地を引き継いで存在していると捉えることができる。これらの遺跡は一様に（途中で途絶える期間があっても）10世紀代まで存続し、廃絶あるいは10世紀を境に拡大してゆくのである。

本報告書において何度か触れた遠阪地区の田ノ口遺跡や土井遺跡は10世紀代に入って拡大し、中世遺跡へと継続してゆく遺跡であり、これらの遺跡は佐治郷の再開発に関わった開発領主や有力農民（田堵や富豪層）の住居・集落と考えられる。この様な有力な集落に対して小規模な、例えば城ノ腰遺跡の様な集落は有力者に従属する立場となり、吸収されるか、早い時期に廃絶する。平野遺跡は城ノ腰遺跡に比べ、規模が大きく、中世に入る直前まで続くが最終的には廃絶する集落であったと捉えられる。

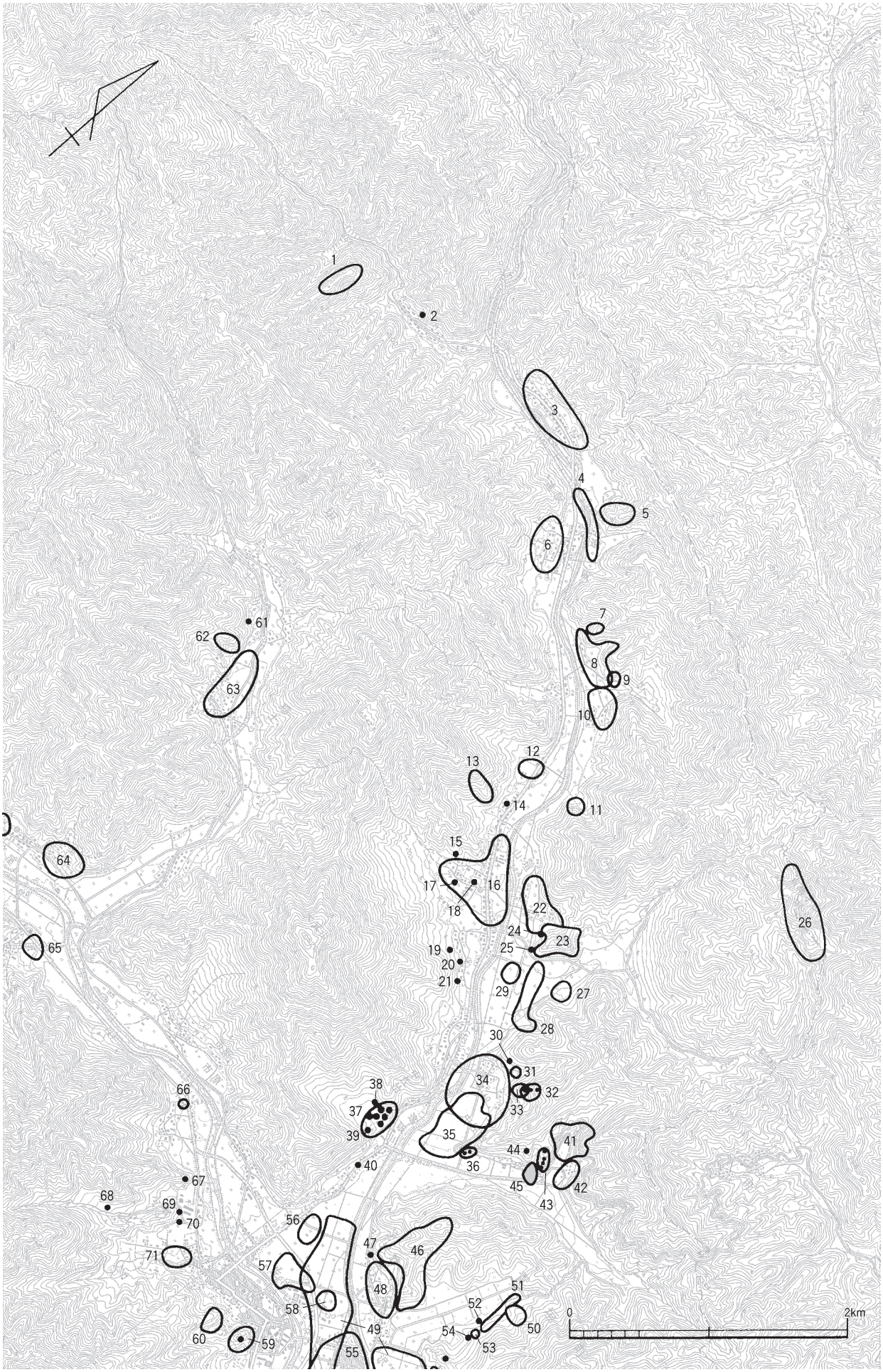
図　　版

1.兵庫県の位置　2.丹波市の位置　3.平野遺跡の位置（1/200,000）

図版2　遺跡

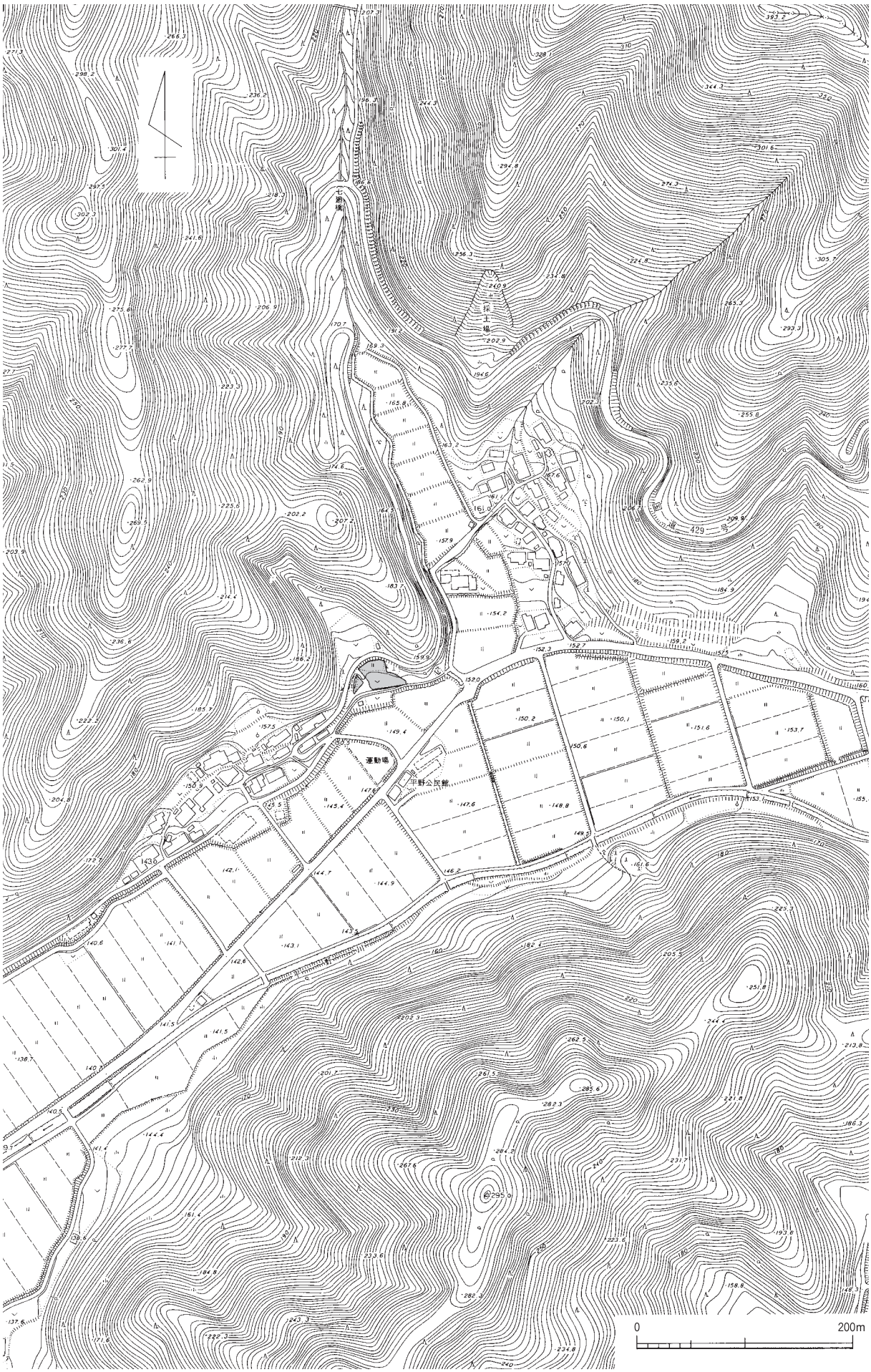
図版3	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	時代	種類
1	780054	遠阪城跡	丹波市青垣町遠阪	中世	城館
2	780055	鶏足寺経塚	丹波市青垣町遠阪	中世	経塚
3	780056	町上･町並遺跡	丹波市青垣町遠阪	近世	散布地
4	780057	田ノ口遺跡	丹波市青垣町遠阪	縄文～中世	集落・墳墓・経塚
5	780037	田ノ口城跡	丹波市青垣町遠阪字田ノ口奥山	中世	城館
6	780058	ザイノ遺跡	丹波市青垣町遠阪	中世～近世	散布地
7	780059	湯落城跡	丹波市青垣町遠阪	中世	城館
8	780060	土井遺跡	丹波市青垣町遠阪	縄文～近世	集落・墳墓
9		伝平等寺跡	丹波市青垣町遠阪	中世	集落
10	780061	西ノ上遺跡	丹波市青垣町遠阪	中世	散布地
11	780063	中ヶ谷城跡	丹波市青垣町山垣	古墳～近世	城館
12		馬場畑散布地	丹波市青垣町山垣	中世	散布地
13	780036	松倉城跡	丹波市青垣町山垣寺奥山	中世	城館
14	780017	堀殿古墳	丹波市青垣町山垣字堀殿	古墳	古墳
15	780016	唐鍬古墳	丹波市青垣町山垣字唐鍬	古墳	古墳
16	780064	遠阪遺跡	丹波市青垣町山垣	古墳～近世	散布地
17	780013	横薮古墳	丹波市青垣町山垣字横薮	古墳	古墳
18	780014	上地前古墳	丹波市青垣町山垣字上地前	古墳	古墳
19	780015	西落古墳	丹波市青垣町山垣字西落	古墳	古墳
20	780068	荒神ヶ谷古墳	丹波市青垣町山垣	古墳	古墳
21	780028	天福寺跡	丹波市青垣町山垣字白石	中世	寺院
22	780065	山垣遺跡	丹波市青垣町山垣	奈良～近世	散布地
23	780035	山垣城跡	丹波市青垣町山垣字城山	中世	城館
24	780012	鉢ノ木田古墳	丹波市青垣町山垣字針ノ木田	古墳	古墳
25	780066	東寺古墳	丹波市青垣町山垣	古墳	古墳
26	780062	鳥帽子山城跡	丹波市青垣町山垣	中世	城館
27			丹波市青垣町山垣	奈良	散布地
28	780067	城ノ腰遺跡	丹波市青垣町山垣	奈良～中世	集落
29	780042	山垣館跡	丹波市青垣町山垣字堀の内	中世	城館
30	780070	見勢ノ尾古墳	丹波市青垣町中佐治	古墳	古墳
31	780071	東寺遺跡	丹波市青垣町中佐治	古墳～中世	散布地
32	780072・780137・780138	中佐治古墳群	丹波市青垣町中佐治	古墳	古墳
33	780073	中佐治城跡	丹波市青垣町中佐治	中世	城館
34	780069	中佐治遺跡	丹波市青垣町中佐治	奈良～近世	散布地
35	780039	中佐治条里	丹波市青垣町中佐治	中世	条里
36	780074・780139	ビハクビ古墳群	丹波市青垣町中佐治	古墳	古墳
37	780053	応相寺遺跡古墳群	丹波市青垣町応相寺	古墳・中世	集落
38	780027	応相寺跡	丹波市青垣町中佐治字応相寺	近世	寺院
39	780003・780128～780133	応相寺1～7号墳	丹波市青垣町中佐治応相寺	古墳	古墳
40	780041	代官屋敷跡	丹波市青垣町中佐治字田辺	中世	城館
41	780011	早坂古墳群	丹波市青垣町山垣字早坂	古墳	古墳
42	780075	有河内遺跡	丹波市青垣町中佐治	奈良～近世	散布地
43	780076・780140～780142	平野古墳群	丹波市青垣町中佐治	古墳	古墳
44	780077	針ノ木田古墳	丹波市青垣町中佐治	古墳	古墳
45	780078	平野遺跡	丹波市青垣町中佐治	奈良・平安	集落
46	780034	寺内城跡（小和田城跡）	丹波市青垣町澤野字谷替	中世	城館
47	780026	極楽寺跡	丹波市青垣町澤野字寺山	近世	寺院
48	780086	小和田遺跡	丹波市青垣町沢野	奈良～近世	散布地
49	780038	沢野条里	丹波市青垣町澤野条里	中世	条里
50	780088	沢野城跡	丹波市青垣町沢野	中世	城館
51	780087	今村谷古墳	丹波市青垣町沢野	古墳	古墳
52	780089	沢野奥古墳	丹波市青垣町沢野	古墳	古墳
53	780090	オオサルタ城跡	丹波市青垣町沢野	中世	城館
54	780091	オオサルタ古墳	丹波市青垣町沢野	古墳	古墳
55	780052	沢野遺跡	丹波市青垣町沢野	奈良～中世	集落
56	780079	大海遺跡	丹波市青垣町沢野	古墳～平安	散布地
57	780080	中市場遺跡	丹波市青垣町沢野	奈良～中世	散布地
58	780081	カシヤカイ遺跡	丹波市青垣町沢野	奈良・平安	散布地
59	780018	佐治丸山古墳	丹波市青垣町佐治字丸山	古墳	古墳
60	780033	佐治城跡	丹波市青垣町佐治字丸山	中世	城館
61	780029	常光院跡	丹波市青垣町稲土字香野	近世	寺院
62	780121	稲土城跡	丹波市青垣町稲土	中世	城館
63	780122	稲土遺跡	丹波市青垣町稲土	奈良～近世	散布地
64	780123	文室遺跡	丹波市青垣町文室	奈良・平安	散布地
65	780043	檜倉製銅遺跡	丹波市青垣町檜倉字大道端	近世	製銅
66	780082	佐治神社祭祀遺跡	丹波市青垣町小倉	奈良～近世	祭祀
67	780010	段ヶ谷古墳	丹波市青垣町小倉字段ヶ谷	古墳	古墳
68	780084	石仏山大通寺跡	丹波市青垣町小倉	近世	寺院
69	780083	段ヶ端古墳	丹波市青垣町小倉	古墳	古墳
70	780023	光明寺跡	丹波市青垣町小倉字ボウケ谷	近世	寺院
71	780085	梅ノ本遺跡	丹波市青垣町佐治	奈良～中世	散布地

平野遺跡周辺の主要遺跡一覧

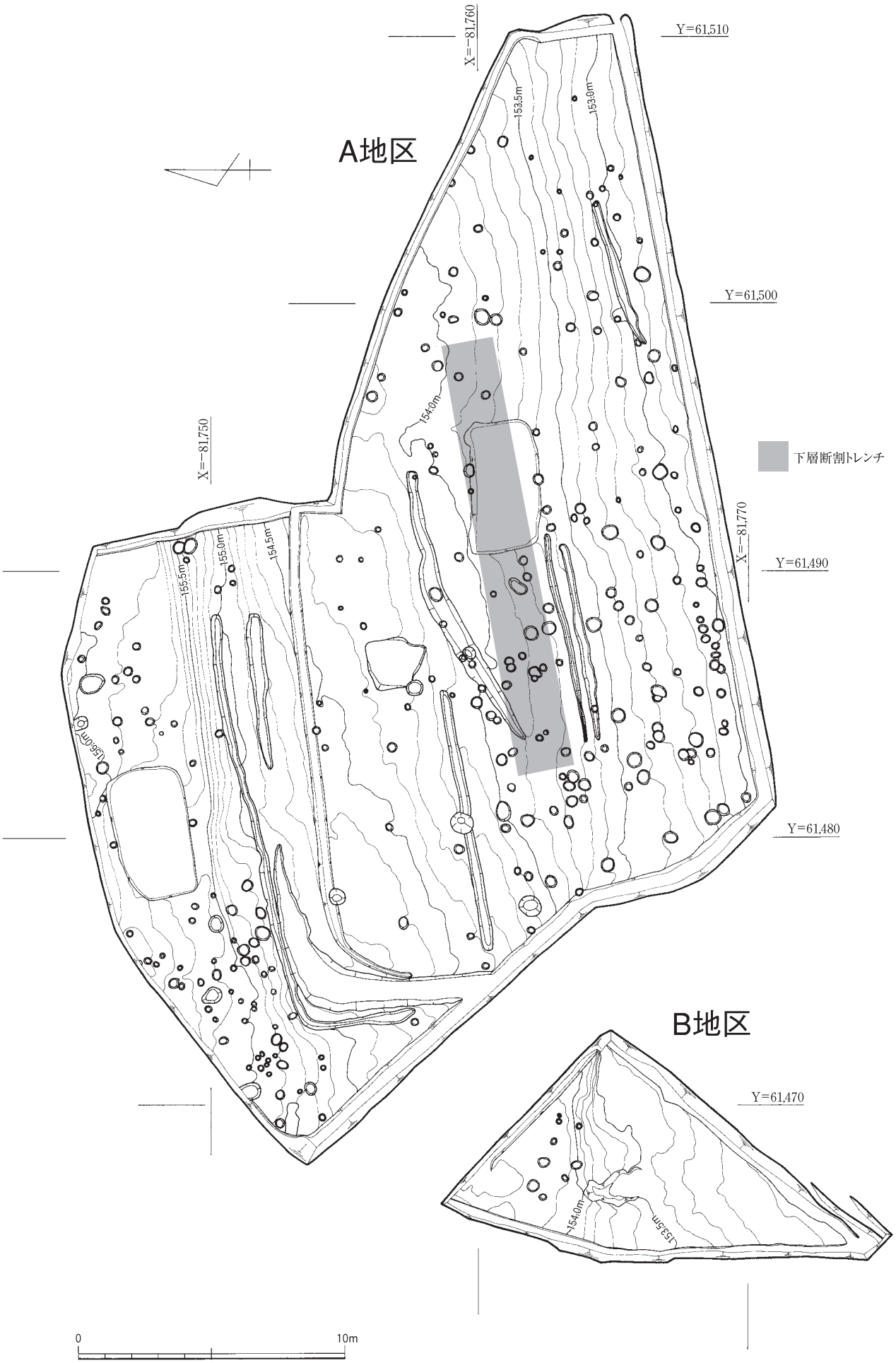


平野遺跡周辺の主要遺跡

図版4　遺跡

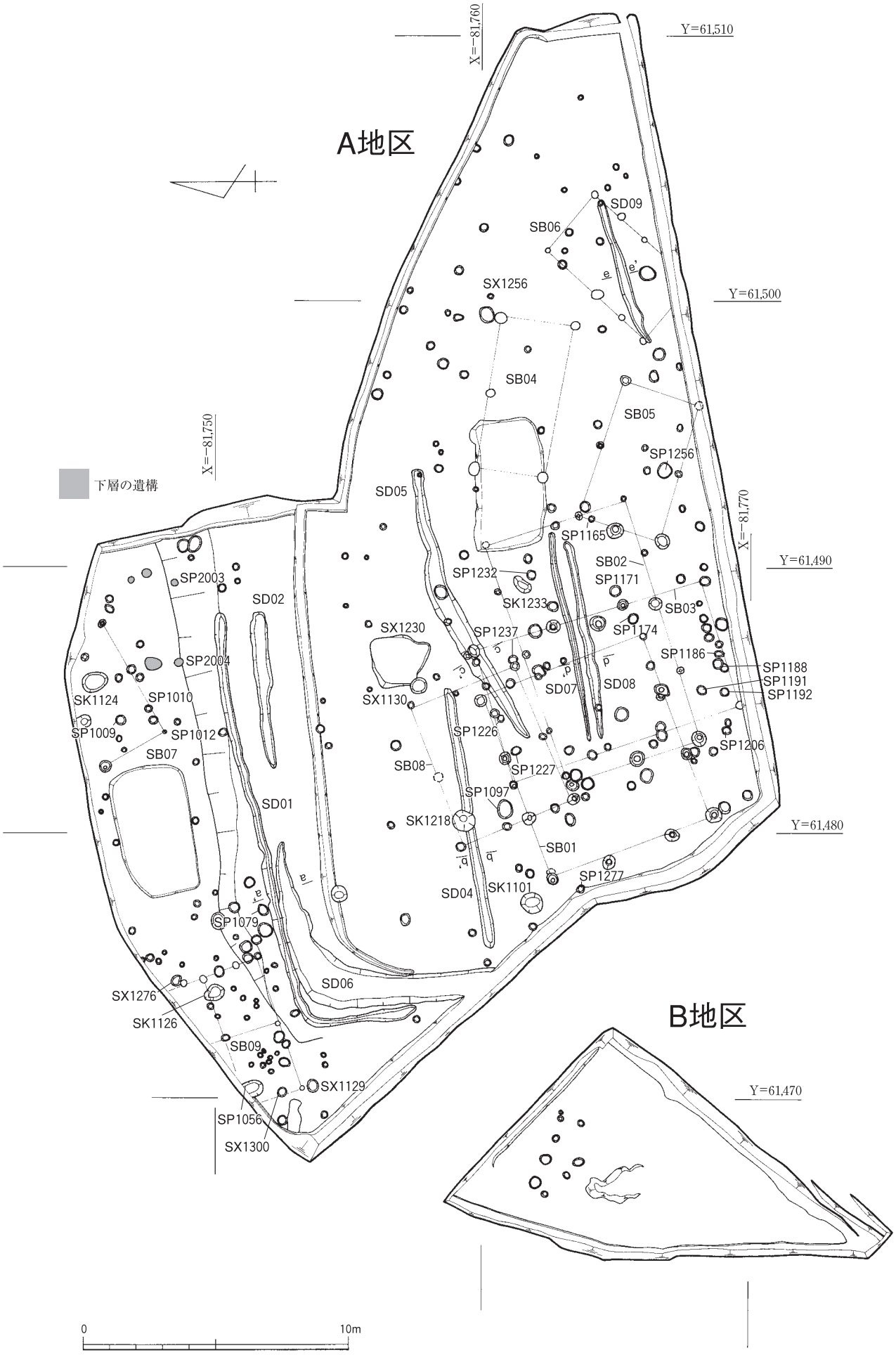


調査区周辺の地形


A地区
B地区
X=−81,760
X=−81,750
X=−81,770
Y=61,510
Y=61,500
Y=61,490
Y=61,480
Y=61,470
153.5m
153.0m
154.0m
155.5m
155.0m
154.5m
156.0m
154.0m
153.5m
下層断割トレンチ
0
10m

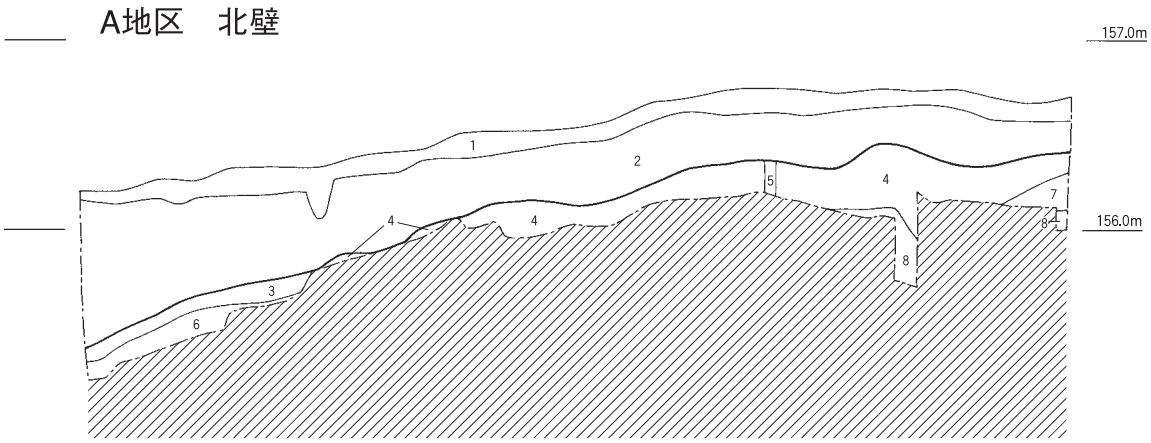
遺構全体図Ⅰ

図版6　遺構

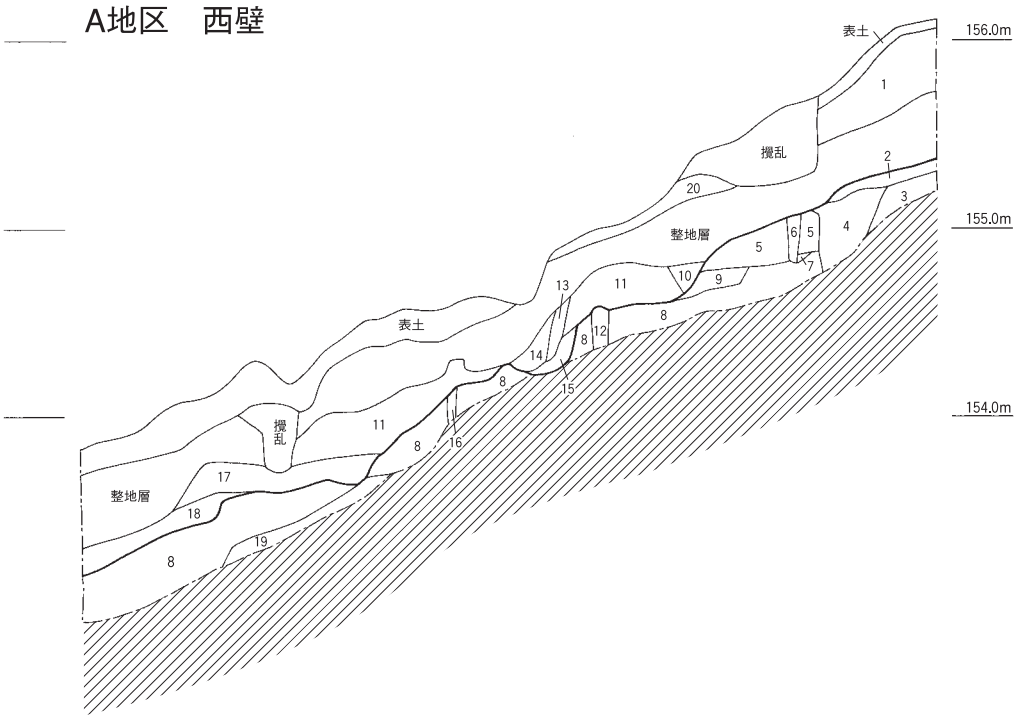


遺構全体図Ⅱ

A地区　北壁



A地区　西壁

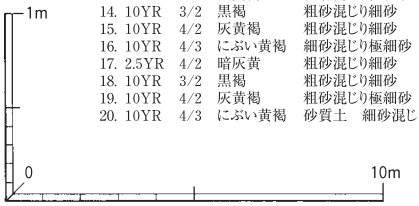


北壁

1. 10YR　3/1　黒褐　細砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質　しまり悪い
2. 10YR　4/2　灰黄褐　細砂混じり極細砂　φ0.1～1cmの礫含む　砂質　しまり普通
   10YR　3/2　黒褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質　しまりやや悪い
3. 10YR　3/1　黒褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～1cmの礫・炭含む　砂質　しまりやや悪い
4. 10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～2cmの礫含む　やや粘質　しまり普通
   10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり極細砂をまばらに含む
5. 10YR　3/2　黒褐　細砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質　しまり普通(Pit)
6. 10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～0.3cmの礫含む　まばらにφ5～10cmの礫含む　粘質　しまり良い
7. 7.5YR　3/4　暗褐　粗砂混じり細砂　φ0.5～1cmの礫多く含む　炭多く含む　砂質　しまり普通
8. 7.5YR　6/6　橙　細砂混じり極細砂　φ0.5～1cmの礫含む　やや粘質　しまり良い

西壁

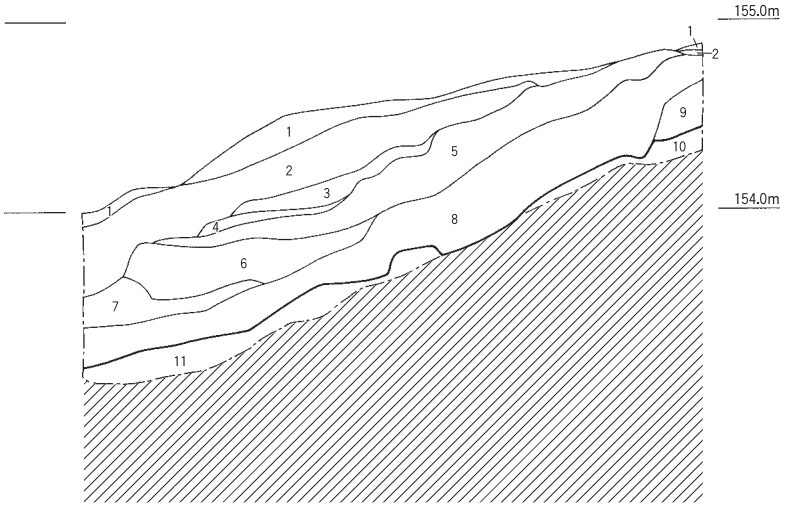
1. 10YR　4/2　灰黄褐　細砂混じり極細砂　φ0.1～1cmの礫含む　砂質　しまり普通
   10YR　3/2　黒褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質　しまりやや悪い
2. 10YR　3/1　黒褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～1cmの礫含む　砂質　しまりやや悪い
3. 10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～0.3cmの礫含む　まばらにφ5～10cmの礫含む　砂質　しまり良い
4. 10YR　3/2　黒褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～1cmの礫・炭含む　砂質　しまり良い(Pit)
5. 5YR　4/4　にぶい赤褐　粗砂混じり極細砂　φ0.3～1cmの礫含む　砂質　しまり普通
6. 10YR　3/2　黒褐　細砂混じり極細砂　φ0.3～1cmの礫含む　砂質　しまり普通(Pit)
7. 7.5YR　3/3　暗褐　細砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　炭若干含む　砂質　しまり普通
8. 10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～1cmの礫含む　砂質　しまり普通
9. 10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～1cmの礫含む　砂質　しまりやや悪い
10. 焼土　5YR　6/6～6/8　橙　細砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫・炭含む
    下半部(10YR　3/3　暗褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む)が混じる
11. 10YR　3/3　暗褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～1cmの礫含む　まばらにφ1～3cmの礫含む　砂質　しまり普通
12. 10YR　3/1　黒褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質　しまり良い(Pit)
13. 10YR　4/2　灰黄褐　細砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　炭若干含む　砂質　しまり普通
14. 10YR　3/2　黒褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質　しまりやや悪い
15. 10YR　4/2　灰黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質　しまり普通
16. 10YR　4/3　にぶい黄褐　細砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質　しまり普通(Pit)
17. 2.5YR　4/2　暗灰黄　粗砂混じり細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質　しまり普通
18. 10YR　3/2　黒褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～1cmの礫含む　砂質　しまり普通
19. 10YR　4/2　灰黄褐　粗砂混じり極細砂　φ0.5～1cmの礫含む　まばらにφ1～3cmの礫含む　砂質　しまり普通
20. 10YR　4/3　にぶい黄褐　砂質土　細砂混じり極細砂　しまり普通　φ0.5cm以上の礫含む(1に類似)



A地区北壁・西壁土層断面

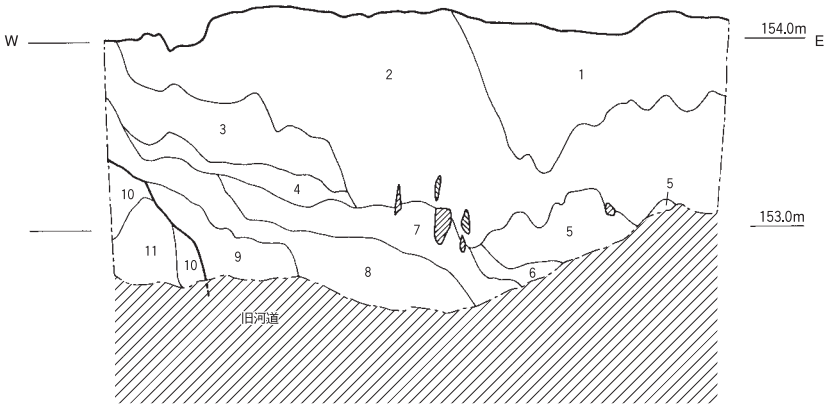
図版8　遺構

B地区　西壁

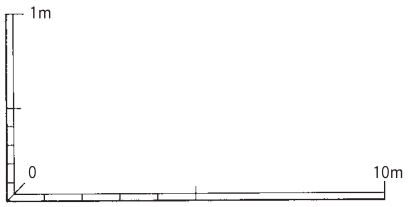


1. 10YR　4/2　灰黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～1cmの礫含む　砂質　しまり普通
2. 10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.5～1cmの礫含む　砂質　しまり良い
3. 10YR　4/2　灰黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.5～2cmの礫含む　砂質　しまり普通
4. 10YR　4/2　灰黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.5～1cmの礫・少量の炭含む　砂質　しまり普通
5. 10YR　4/2　灰黄褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～1cmの礫含む　砂質　しまり悪い
6. 10YR　3/2　黒褐　粗砂混じり極細砂　φ0.5～1cm、まばらにφ1～5cmの礫含む　やや粘質　しまり普通
7. 10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質　しまり普通
8. 10YR　3/1　黒褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～1cm、まばらにφ3～5cmの礫・少量の炭含む
9. 10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.5～1cm、φ3～5cmの礫を多く含む　砂質　しまり悪い
10. 2.5Y　5/3　黄褐　細砂混じり粗砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質　しまり悪い
11. 10YR　4/4　褐+N　5/0　灰　粗砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫を多く含む　上面に鉄分が沈殿　粘質　しまり悪い

A地区　下層断割トレンチ

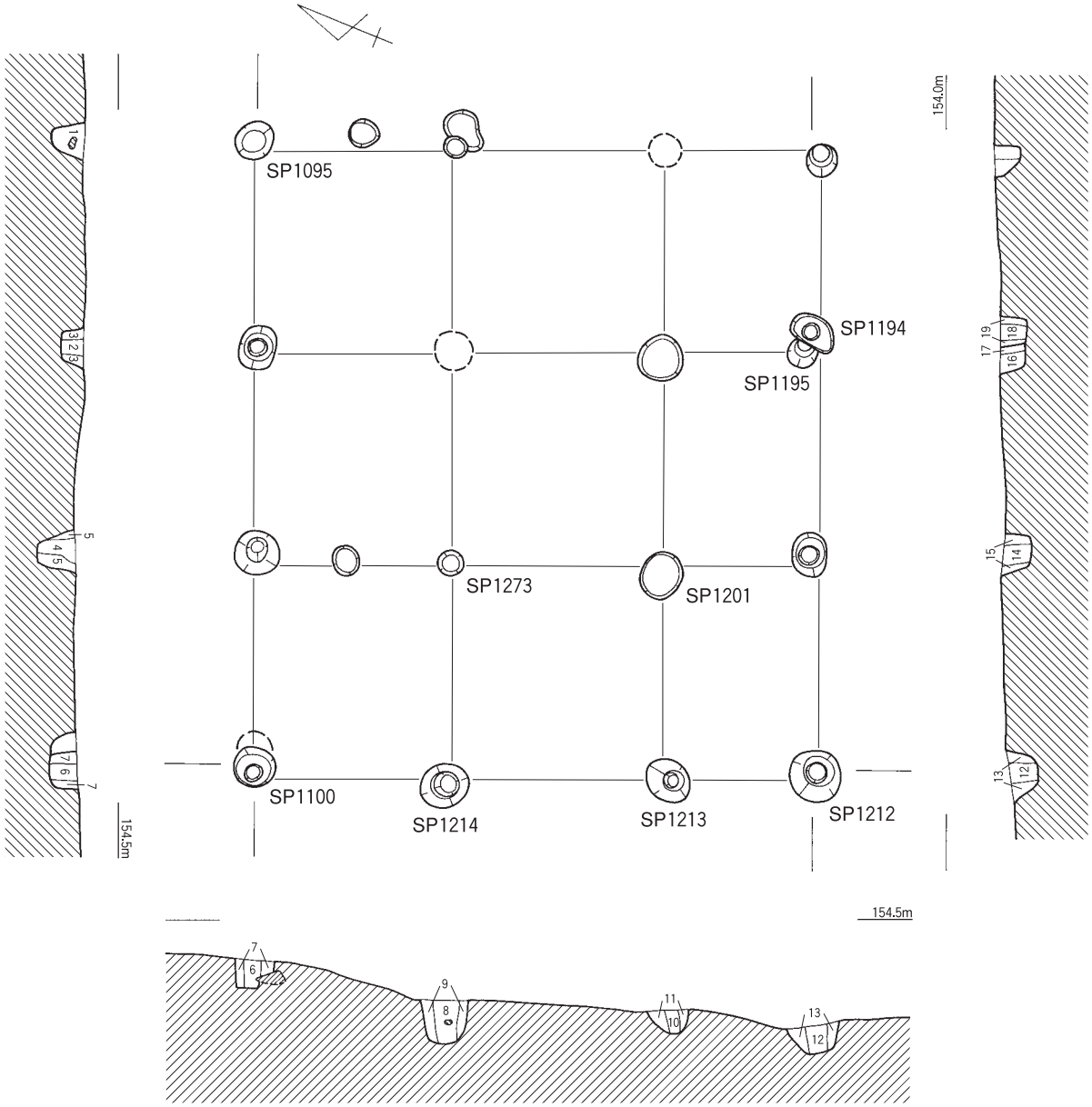


1. 灰褐　シルト質・砂礫　φ1cm以上の亜角礫含む　最大φ5cm（シルトが多い）　砂質シルト
2. 暗黄褐　礫・砂混じりシルト　φ3cm以上の亜角礫を主に含む　最大φ7cm
3. 暗褐灰　礫混じり砂質シルト　φ1～5cmの亜角・角礫含む　最大φ13cm
4. 黄褐　シルト質砂
5. 褐灰　シルト質砂礫　φ1～3cmの亜角礫を主に含む　最大φ12cm　シルト質砂
6. 黒褐灰　シルト
7. 暗灰　砂礫　φ2cm以上の亜角礫を主に含む　最大φ6cm　粗砂
8. 暗褐灰～黒褐灰　砂混じりシルト（表土）　しまり良い
9. 暗黄褐　礫・砂混じりシルト　φ2cm以上の礫含む
10. 暗黄灰　シルト質・砂礫　φ1～3cmの亜角礫を主に含む　最大φ6cm　砂質シルト
11. 暗黄褐　礫・砂混じりシルト　φ2cm以上の礫含む　しまり良い



B地区西壁・A地区下層断割トレンチ土層断面

SB01



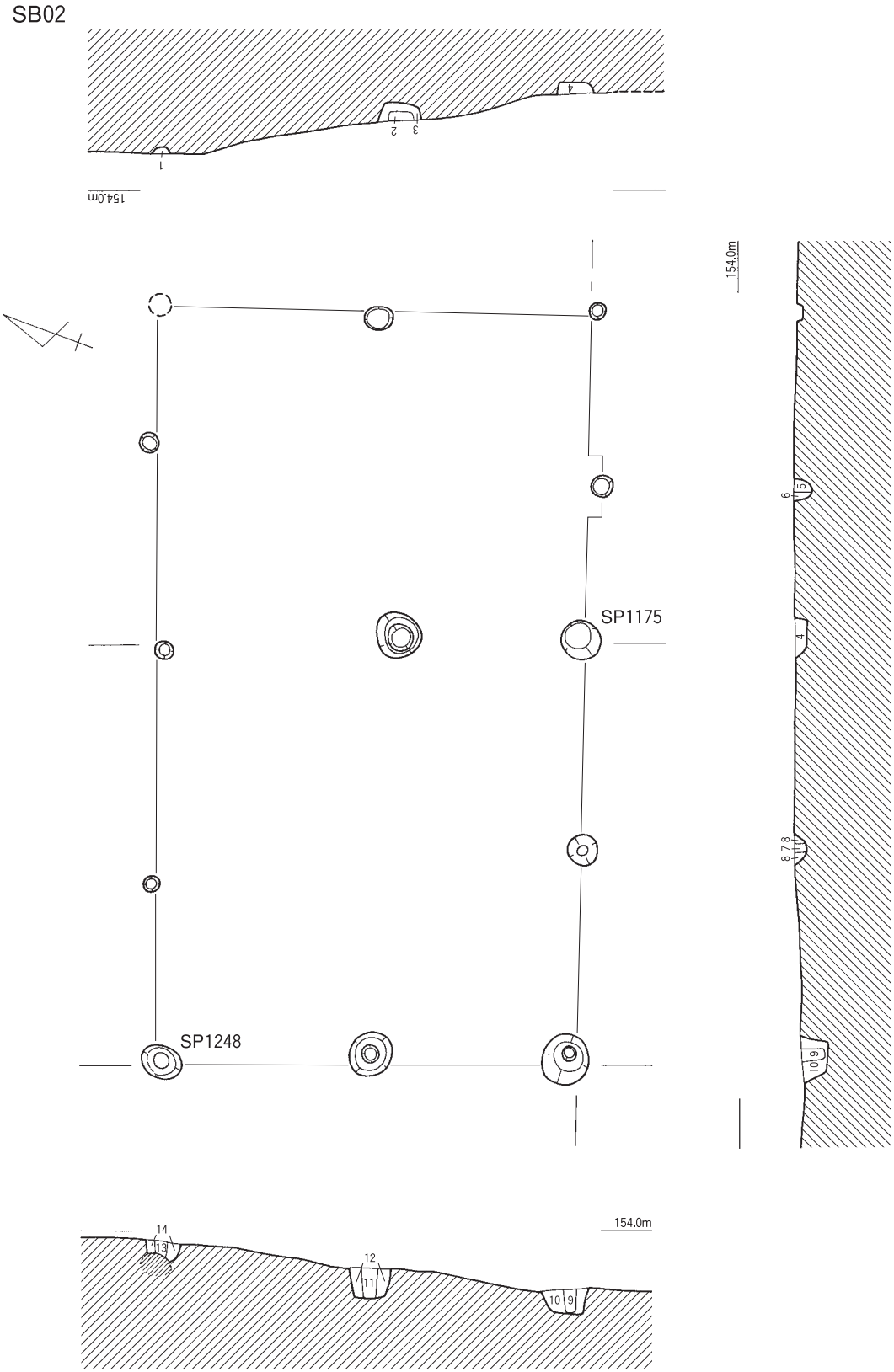
1. 10YR　4/3　にぶい黄褐　細砂　φ1cm以下の礫含む　砂質土　しまり普通
2. 7.5YR　5/1　褐灰　粗砂混じり細砂　φ0.5cm以下の礫を若干、炭化物をわずかに含む　砂質土　しまり普通
3. 7.5YR　6/1　褐灰　粗砂　φ0.1cm程度の礫、炭化物含む　砂質土　しまり普通
4. 10YR　5/2　灰黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.5cmの礫、土器片含む　砂質土　しまり普通
5. 7.5YR　5/2　灰褐　粗砂混じり細砂　φ0.3cm以下の礫をわずかに含む　砂質土　しまり普通
6. 10YR　5/2　灰黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.5cmの礫含む　砂質土　しまり普通
7. 7.5YR　5/2　灰褐　粗砂混じり細砂　φ0.3cm以下の礫をわずかに含む　砂質土　しまり普通
8. 5YR　4/1　褐灰　細砂　φ0.5cm以下の礫、土器片含む　粘質土　しまり普通
9. 2.5Y　6/1　黄灰　粗砂混じり細砂　φ0.5cm以下の礫を若干含む　粘性砂質土　しまり普通
10. 10YR　6/1　褐灰　粗砂混じり細砂　φ1cm以下の礫を若干含む　粘性砂質土　しまり普通
11. 2.5Y　6/1　黄灰　粗砂混じり細砂　φ0.5cm以下の礫を若干含む　粘性砂質土　しまり普通
12. 5YR　5/2　灰褐　粗砂混じり細砂　φ1cm以下の礫をわずかに、炭化物を若干含む　粘性砂質土　しまり普通
13. 2.5Y　6/1　黄灰　粗砂混じり細砂　φ0.5cm以下の礫を若干含む　粘性砂質土　しまり普通
14. 10YR　4/2　灰黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.5～1cmの礫、炭少量含む　砂質土　しまり普通
15. 10YR　3/3　暗褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～1cmの礫、炭少量含む　砂質土　しまり普通
16. 2.5Y　4/2　暗灰黄　粗砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　やや粘質　しまり悪い
17. 10YR　4/2　灰黄褐　細砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質土　しまり悪い
18. 10YR　4/2　灰黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～1cmの礫含む　砂質土　しまり普通
19. 10YR　3/2　黒褐　細砂混じり極細砂　φ0.1～1cmの礫含む　砂質土　しまり普通

0　4m

掘立柱建物SB01

図版10　遺構

SB02

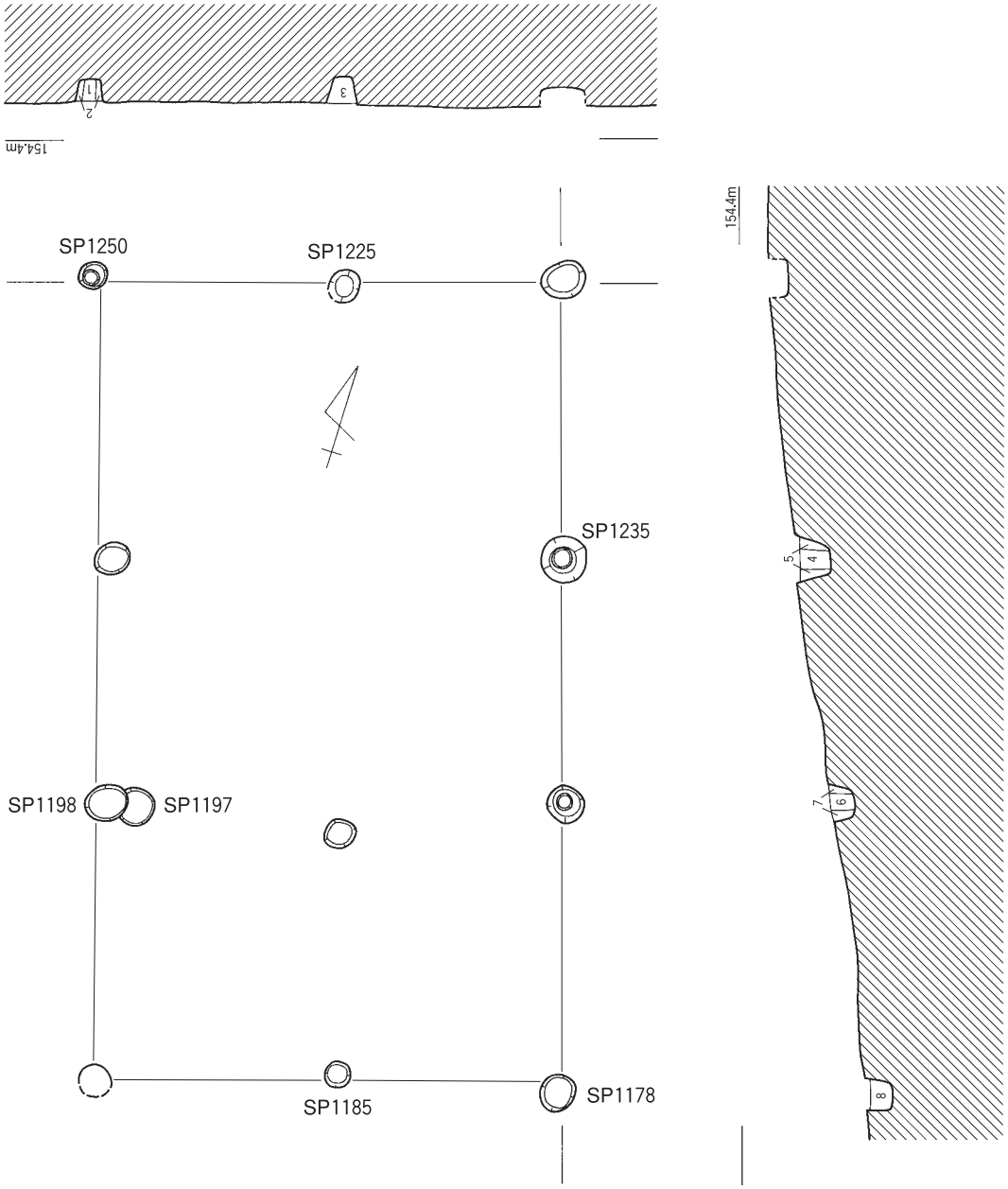


1.	10YR	4/2	灰黄褐	細砂		8.	10YR	4/3	にぶい黄褐(やや赤味)	粗砂混じり細砂	φ0.1～1cmの礫含む　砂質土　しまり普通
2.	10YR	5/3	にぶい黄褐	細砂	φ1cm以下の礫含む　砂質土　しまり普通	9.	2.5Y	4/1	黄灰	細砂混じり極細砂	φ0.1～0.5cmの礫を少量、炭少量含む　砂質土　しまり良い
3.	7.5YR	4/3	褐	粗砂混じり細砂	φ0.5cm以下の礫、土器片含む　砂質土　しまり普通	10.	10YR	4/3	にぶい黄褐(暗色)	粗砂混じり細砂	φ0.1～1cmの礫、炭少量含む　砂質土　しまり良い
4.	10YR	4/2	灰黄褐	細砂混じり極細砂	φ0.5～1cmの礫、微量の炭含む　砂質土　しまり良い	11.	10YR	4/2	灰黄褐	細砂混じり極細砂	φ0.1～0.5cmの礫少量含む　しまり普通
5.	10YR	5/2	灰黄褐	礫混じり細砂	φ0.5cm以下の礫多量に含む　粘性砂質土　しまり普通	12.	2.5Y	4/2	暗灰黄	細砂混じり極細砂	φ0.1～0.5cmの礫少量、炭少量含む　しまり普通
6.	7.5YR	5/3	にぶい褐	粗砂	φ0.3cm以下の礫をごくわずかに含む　粘性砂質土　しまり普通	13.	5YR	4/1	褐灰	細砂	φ0.3cm以下の礫を若干含む　粘性砂質土　しまり普通
7.	10YR	4/3	にぶい黄褐(やや暗)	細砂混じり極細砂	φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質土　しまり普通	14.	5YR	5/2	灰褐	粗砂混じり細砂	φ1cm以下の礫をかなり含む　粘性砂質土　しまり普通

0　4m

掘立柱建物SB02

SB03



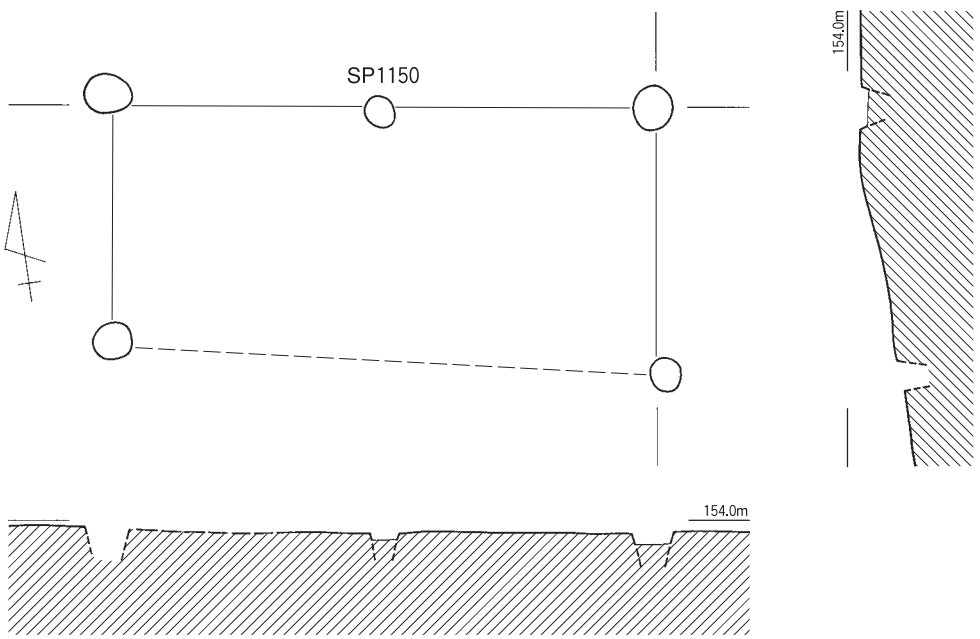
1. 7.5YR　5/1　褐灰　粗砂混じり細砂　φ0.3cm以下の礫をごくわずかに含む　粘性砂質土　しまり普通
2. 7.5YR　6/1　褐灰　粗砂混じり細砂　φ0.5cm以下の礫を若干含む　砂質土　しまり普通
3. 10YR　4/2　灰黄褐　礫混じり細砂　φ1cm以下の礫を多量、土器片含む　砂質土　しまり普通
4. 10YR　4/1　褐灰　粗砂混じり細砂　φ0.5cm以下の礫含む　粘性砂質土　しまり普通
5. 7.5YR　4/1　褐灰　粗砂　φ0.5cm以下の礫含む　粘性砂質土　しまり普通
6. 10YR　4/3　にぶい黄褐　細砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫を少量、炭含む　砂質土　しまり普通
7. 10YR　4/2　灰黄褐　細砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫を少量、炭含む　粘質土　しまり普通
8. 10YR　4/2　灰黄褐　礫混じり細砂

0　4m

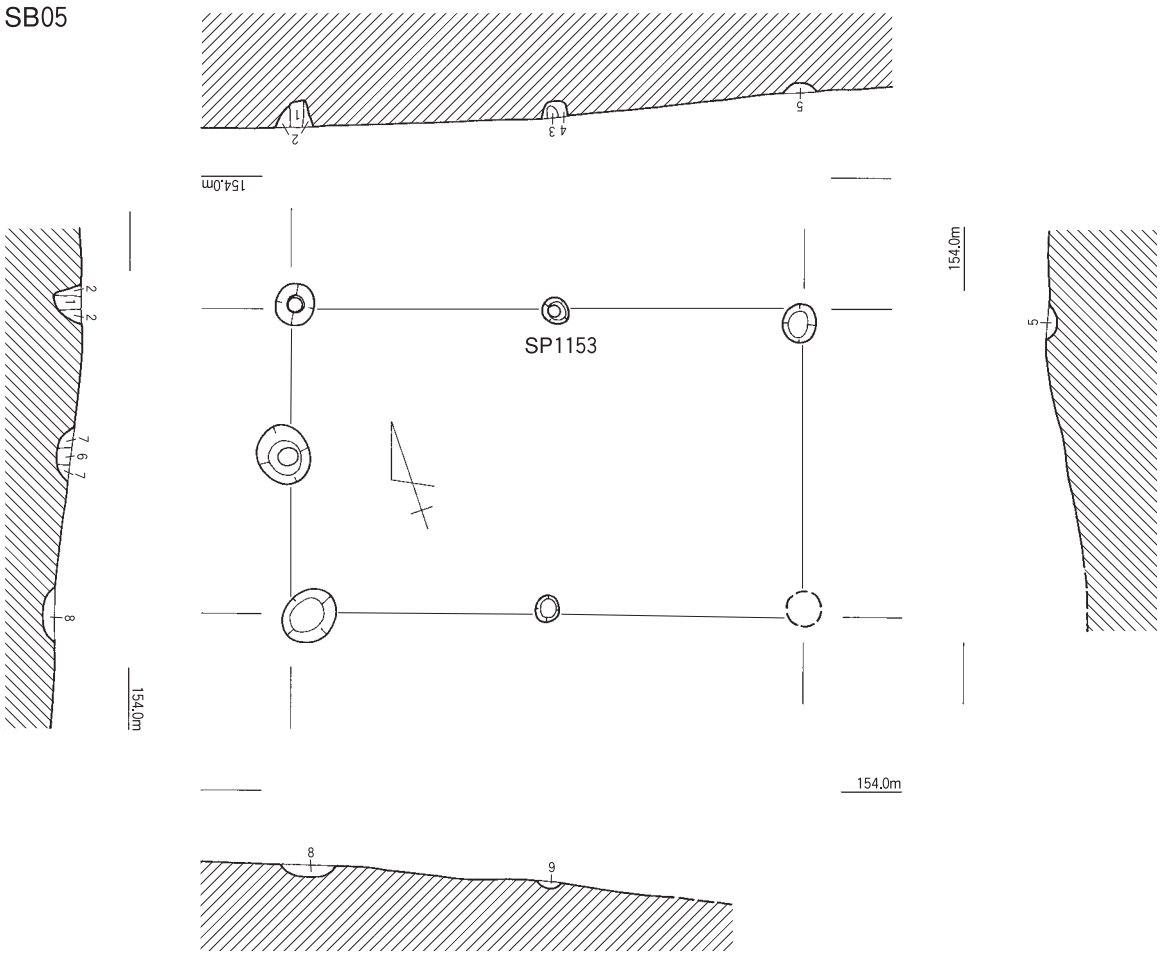
掘立柱建物SB03

図版12　遺構

SB04



SB05

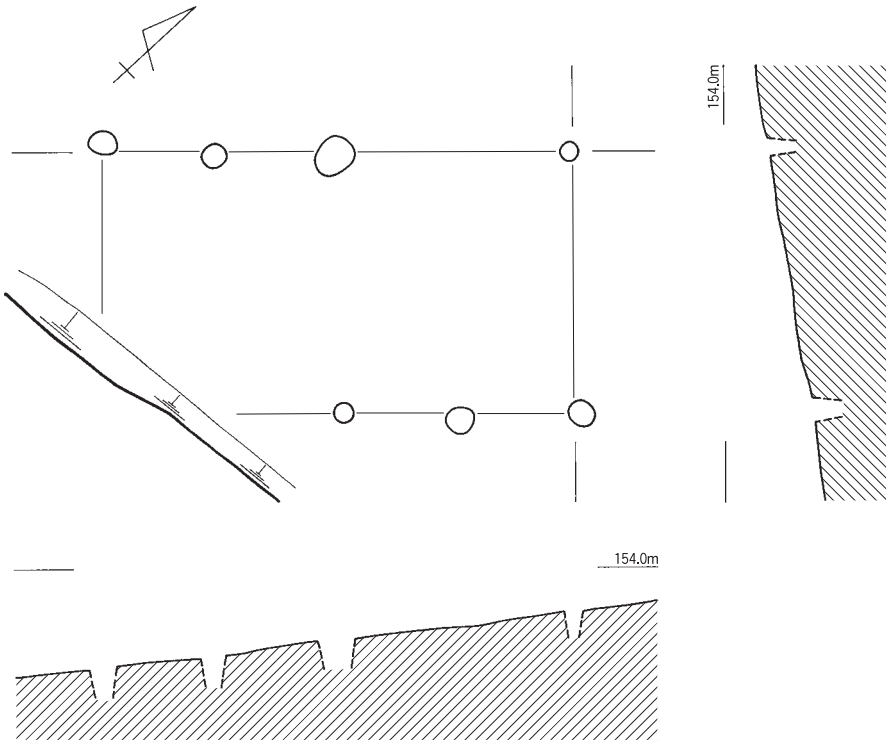


1. 10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂　φ0.3cm以下の礫、多量の炭化物、土器片含む　粘性砂質土　しまり普通
2. 10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂　φ0.3cm以下の礫を若干、炭化物を若干含む　粘性砂質土　しまり普通
3. 7.5YR　6/2　灰褐　礫混じり細砂　φ0.5cm以下の礫を多量、土器片含む　粘性砂質土　しまり普通
4. 10YR　5/1　褐灰　粗砂混じり細砂　φ0.3cm以下の礫、炭化物含む　粘性砂質土　しまり普通
5. 10YR　6/1　褐灰　粗砂混じり細砂　φ0.5cm以下の礫を若干、炭化物をごくわずかに含む　粘質土　しまり普通
6. 10YR　4/2　灰黄褐　細砂混じり極細砂　φ0.5cm以下の礫をごくわずかに含む　粘性砂質土　しまり普通
7. 10YR　5/3　にぶい黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.5cm以下の礫含む　粘性砂質土　しまり普通
8. 10YR　5/1　褐灰　細砂　φ0.5cm以下の礫含む　砂質土　しまり普通
9. 10YR　5/1　褐灰　細砂　φ0.3cm以下の礫をわずかに含む　砂質土　しまり普通

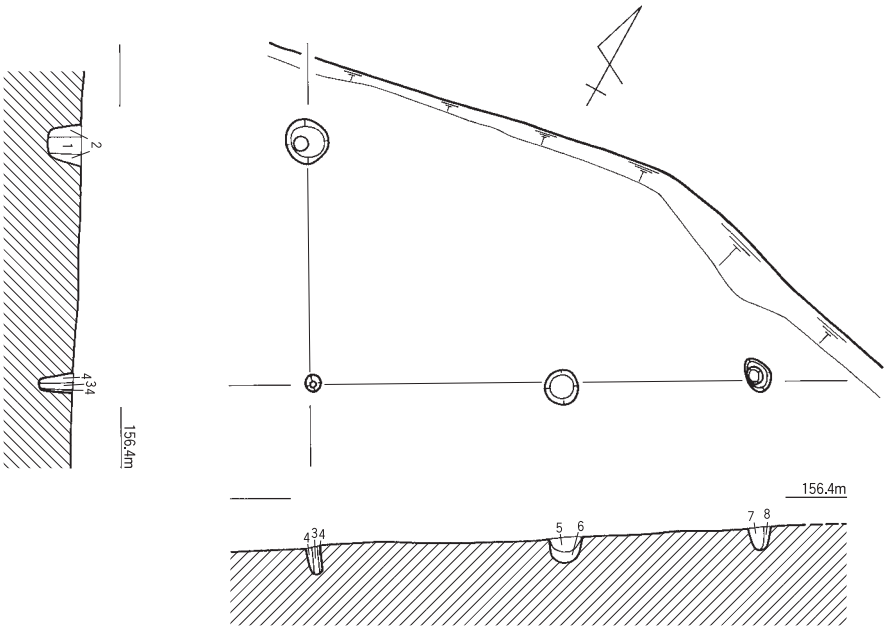
0　4m

掘立柱建物SB04・SB05

SB06



SB07

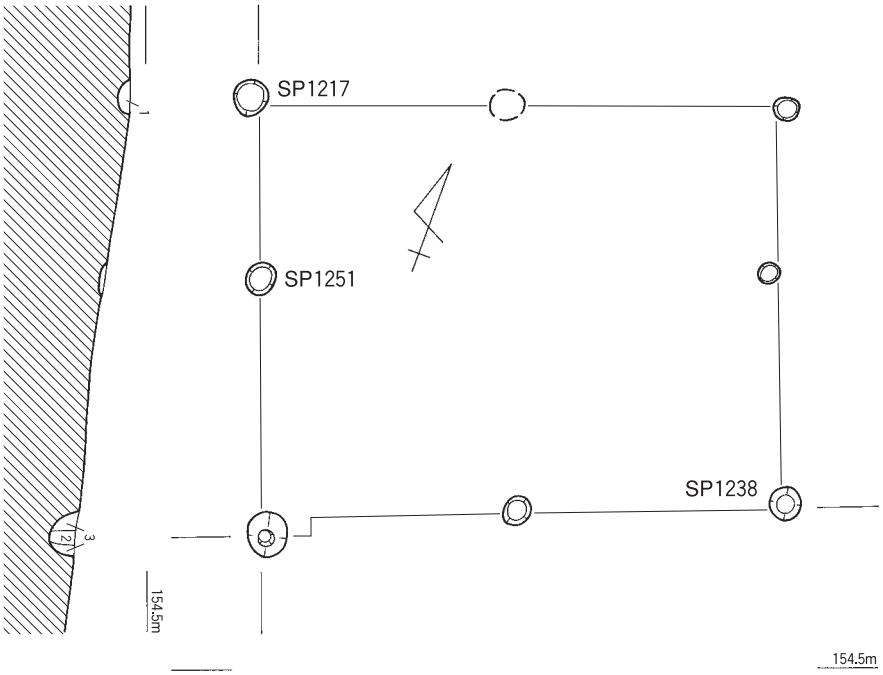


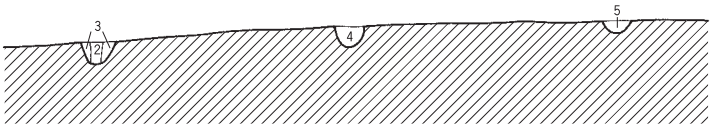
1. 10YR　4/4　褐　細砂　φ1cm以下の礫含む　砂質土　しまり普通
2. 10YR　5/4　にぶい黄褐　粗砂混じり細砂　φ1cm程度の礫を多量に含む　砂質土　しまり普通
3. 10YR　4/3　にぶい黄褐　極細砂　φ0.5cm以下の礫をわずかに含む　砂質土　しまり普通
4. 7.5YR　4/4　褐　粗砂混じり細砂　φ1cm以下の礫を多量に含む　砂質土　しまり普通
5. 10YR　4/3　にぶい黄褐　細砂　φ1cm以下の礫及び土器片含む　砂質土　しまり普通
6. 10YR　5/4　にぶい黄褐　粗砂混じり細砂　φ1cm以下の礫含む　砂質土　しまり普通
7. 7.5YR　5/2　灰褐　極細砂　砂質土　しまり普通
8. 10YR　5/4　にぶい黄褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1cm以下の茶褐色礫を若干含む　砂質土　しまり普通

掘立柱建物SB06・SB07

図版14　遺構

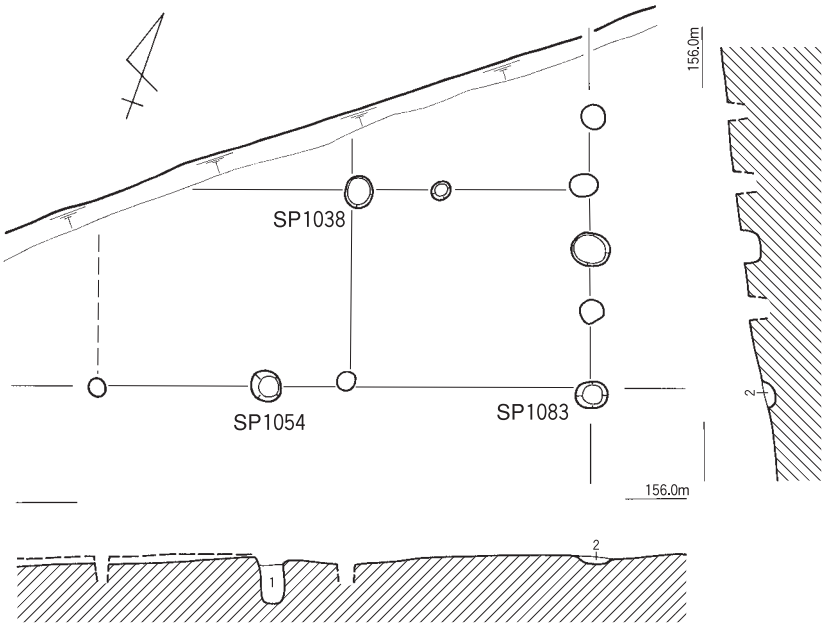
SB08





1. 10YR　5/4　にぶい黄褐　細砂混じり極細砂　φ1.5cm以下の礫含む　砂質土　しまり普通
2. 5YR　5/1　褐灰　粗砂混じり細砂　φ0.3cm以下の礫をわずかに含む　砂質土　しまり普通
3. 7.5YR　5/3　にぶい褐　礫混じり細砂　φ1.5cm以下の礫を多量に含む　砂質土　しまり普通
4. 10YR　5/3　にぶい黄褐　粗砂　φ1cm以下の礫含む　粘性砂質土　しまり普通
5. 7.5YR　5/1　褐灰　粗砂混じり細砂　φ0.5cm以下の礫含む　砂質土　しまり普通

SB09

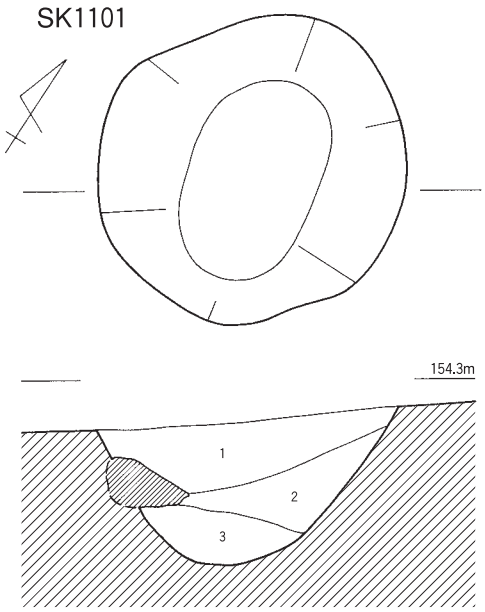


1. 10YR　3/3　暗褐　細砂　φ1cm以下の礫含む　砂質土　しまり普通
2. 7.5YR　4/4　褐　細砂混じり極細砂　φ1cm程度の礫含む　砂質土　しまり普通

0　4m

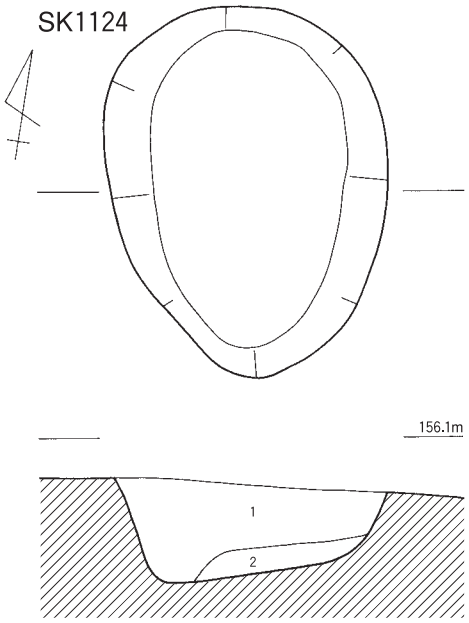
掘立柱建物SB08・SB09

SK1101



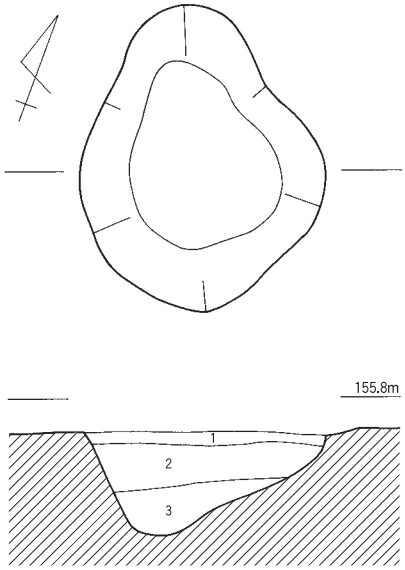
1. 10YR 3/2 黒褐　礫混じり細砂　φ0.5～1cmの礫多量に含む　炭化物若干含む　砂質土　しまり普通
2. 10YR 5/3 にぶい黄褐　細砂　φ0.5～1cmの礫含む　砂質土　しまり普通
3. 10YR 5/1 褐灰　細砂　φ0.3cm以下の礫をごくわずかに含む　粘質土　しまり普通

SK1124



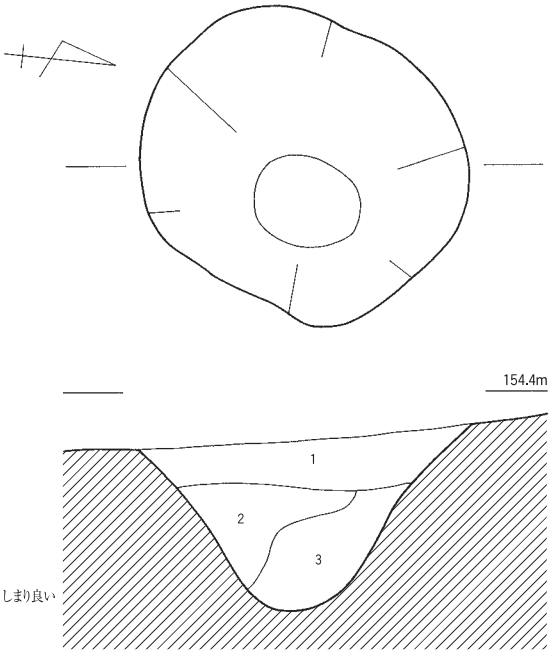
1. 10YR 5/4 にぶい黄褐　砂質土細砂　φ1cm以下の礫を多量に含む　しまり普通
2. 10YR 4/6 褐　砂質土細砂　φ1cm以下の礫を多量に含む　しまり普通

SK1126



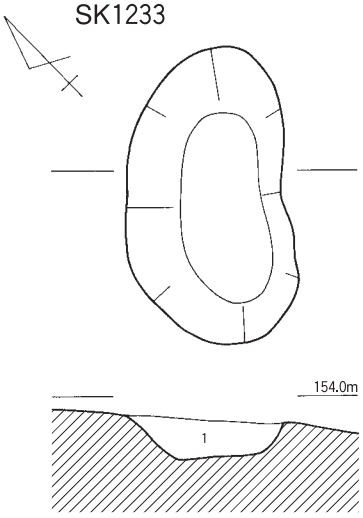
1. 10YR 3/3 暗褐　粗砂混じり細砂　φ0.5～1cmの礫含む　砂質　しまり普通
2. 10YR 3/3 暗褐(上層より明)　粗砂混じり極細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　まばらにφ1cmの礫含む　砂質 しまり良い
3. 10YR 4/3 にぶい黄褐　粗砂混じり極細砂　φ0.1～0.3cmの礫まばらに含む　やや粘質　しまり良い

SK1218

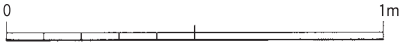


1. 2.5Y 5/2 暗黄灰　礫混じり細砂　φ1～3cmの礫を多量に含む　粘性砂質土　しまり普通
2. 10YR 5/4 にぶい黄褐　細砂　φ0.5cm以下の礫を若干含む　粘質土　しまり普通
3. 2.5Y 5/1 黄灰　粗砂　φ1～3cmの礫を多量に含む　粘性砂質土　しまり悪い

SK1233

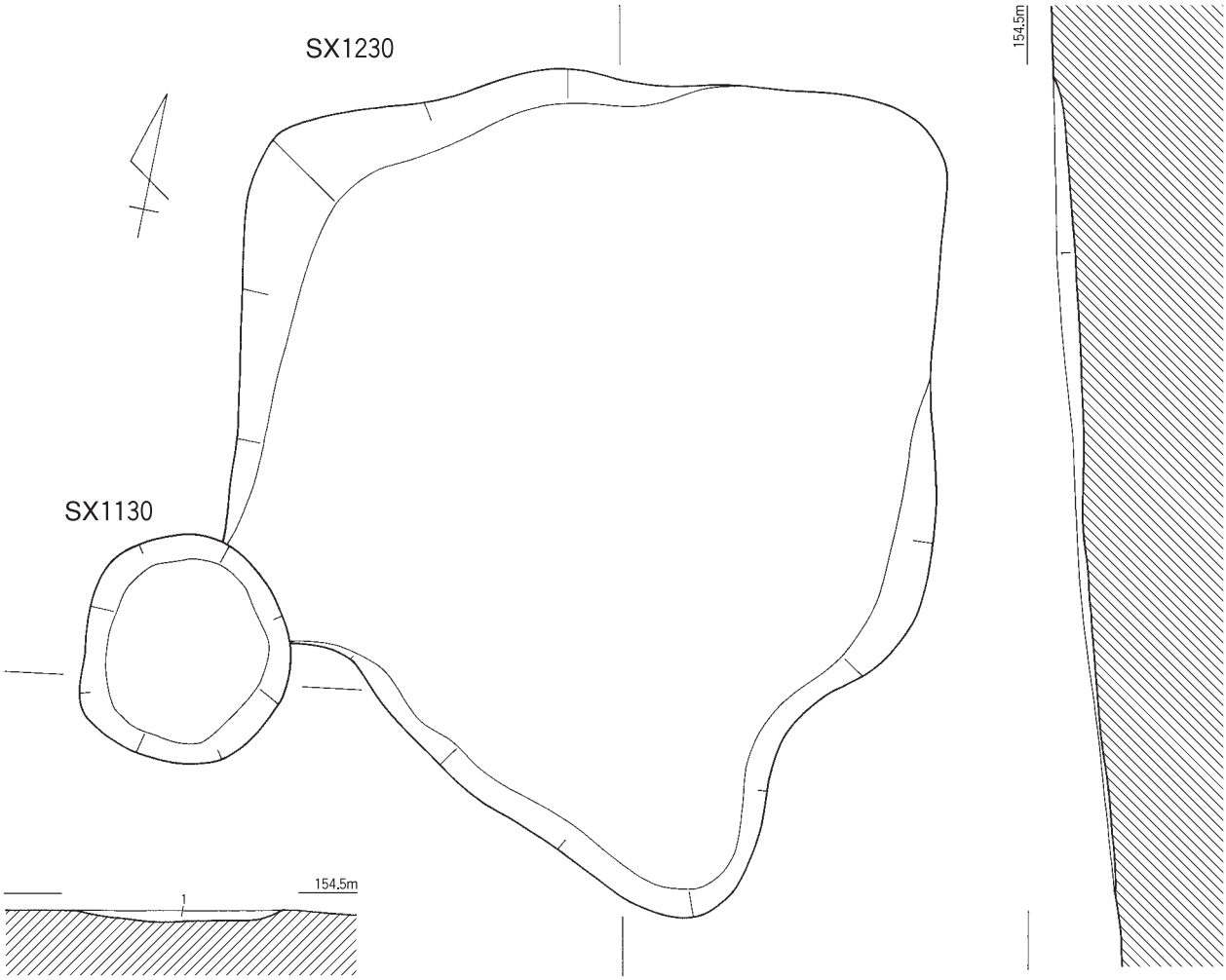


1. 10YR 4/3 にぶい黄褐　細砂　φ0.5cm以下の礫をわずかに含む　砂質土　しまり普通



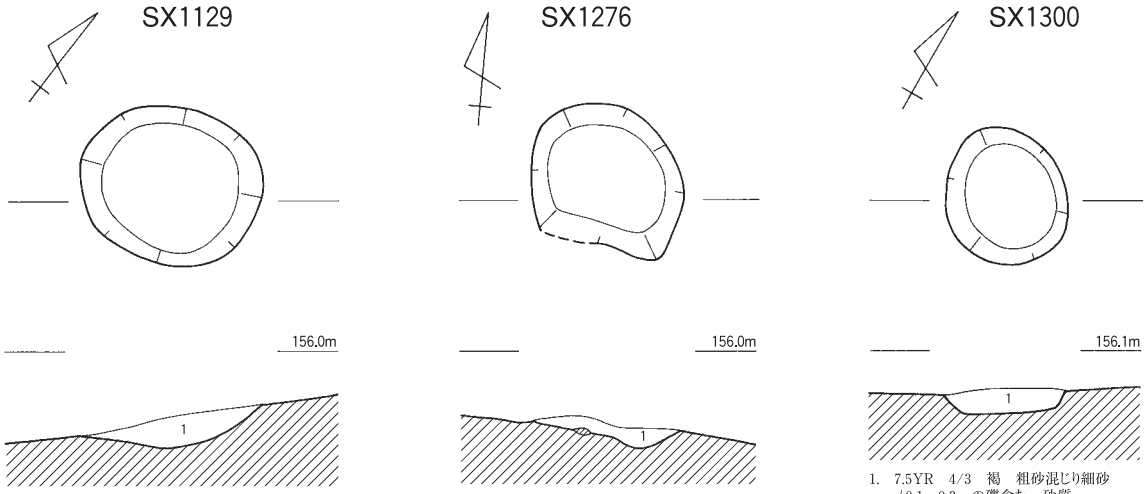
各土坑

図版16　遺構



1.　10R　5/8　赤　砂質土　粗砂混じり細砂　しまり良い
φ1cm程度の礫含む（焼土層）

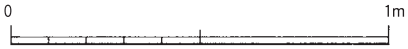
1.　10YR　4/2　灰黄褐　粘性砂質
粗砂混じり細砂　しまり普通　φ1cm程度の礫含む



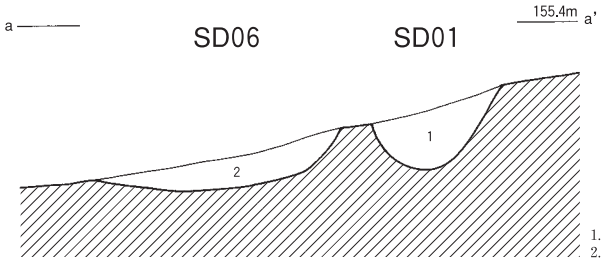
1.　7.5YR　3/3　暗褐　細砂混じり極細砂
φ0.5cmの礫、炭含む　砂質
まばらに焼土が混じる

1.　2.5YR　4/8　赤褐　粗砂混じり細砂
φ0.1～0.5cmの礫含む　砂質
ほぼ全体が焼土

1.　7.5YR　4/3　褐　粗砂混じり細砂
φ0.1～0.3cmの礫含む　砂質
全体に薄く焼けている

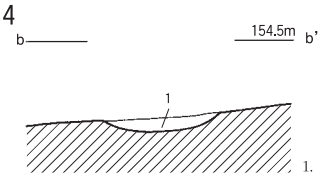


落ち込み・焼土坑



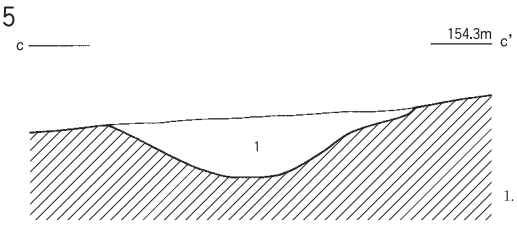
1.　2.5Y　4/1　黄灰　極細砂　φ0.5～1.5cmの礫含む　砂質土　しまり普通
2.　1に同じ

SD04

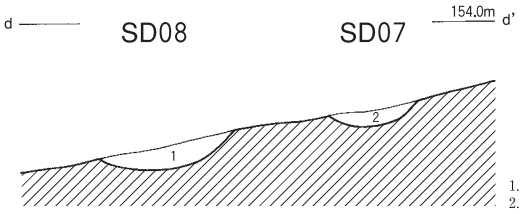


1.　10YR　5/2　灰黄褐　細砂　φ0.5cm以下の礫をわずかに含む　粘性砂質土　しまり悪い

SD05

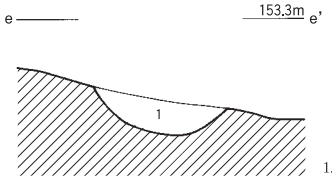


1.　10YR　4/2　灰黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.5～1cmの礫をかなり含む
粘性砂質土　しまり普通

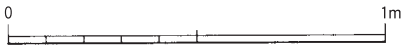


1.　2.5Y　5/1　黄灰　細砂　φ0.5cmの礫含む　砂質　しまり普通
2.　1に同じ

SD09

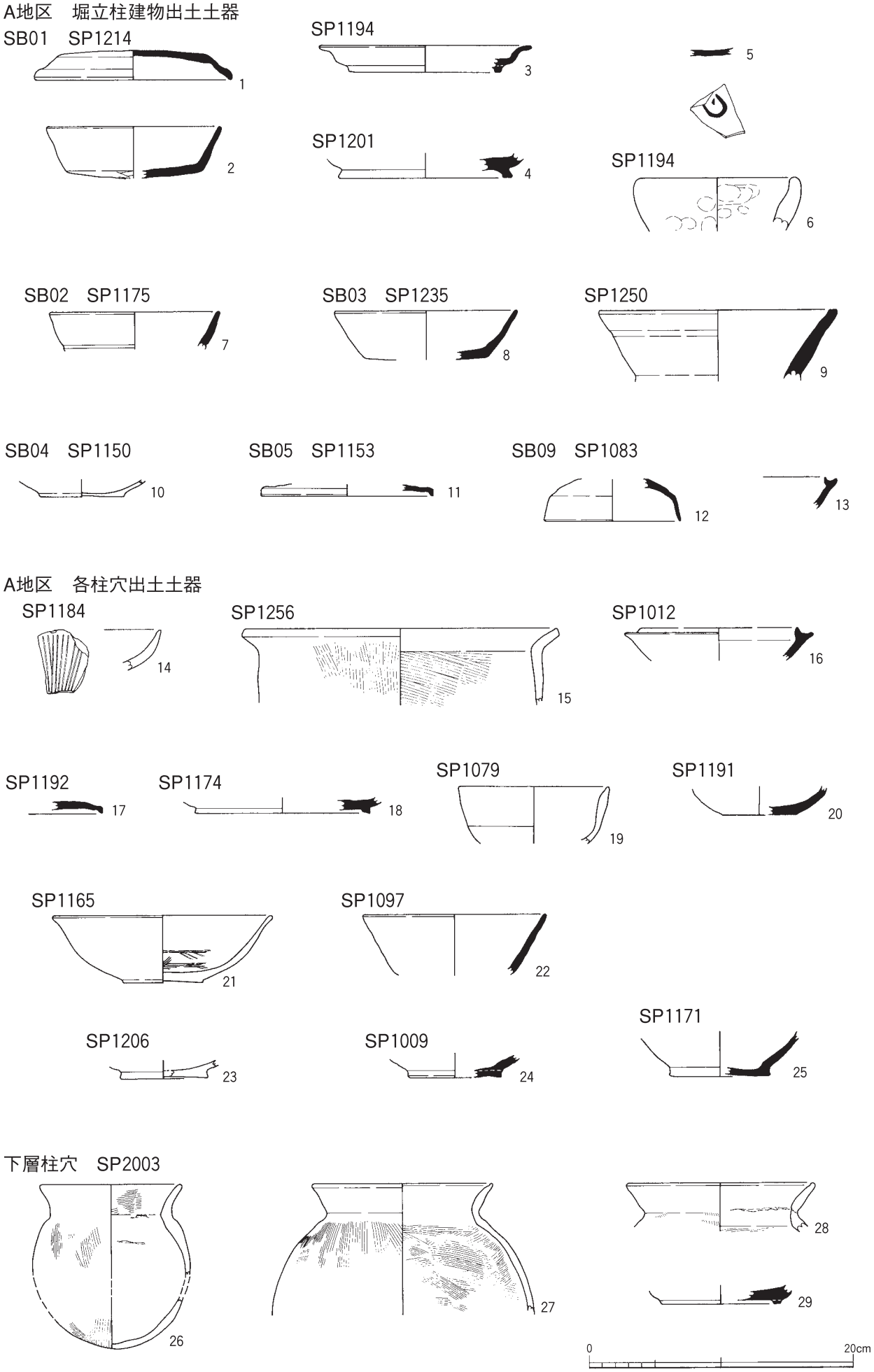


1.　10YR　4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり細砂　φ0.1～0.5cmの礫含む　炭若干含む　砂質　しまり普通



溝

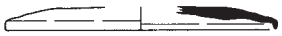
図版18　遺物



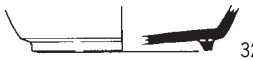
A地区掘立柱建物及び柱穴出土土器

A地区　各遺構出土土器

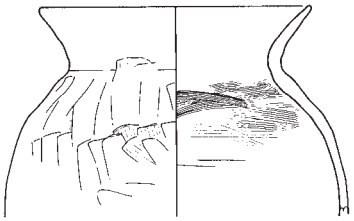
SK1126


30

31


32

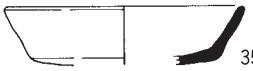
SX1230

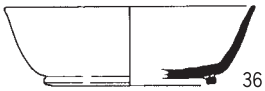

33

SX1256

34

SD05


35


36

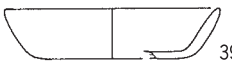
SD07

37

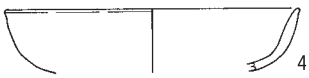
SD08

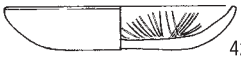
38

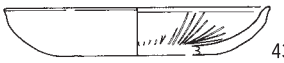
A地区　包含層出土土器


39

40

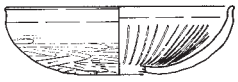

41

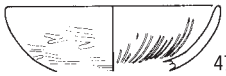

42

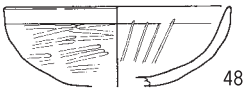

43

44

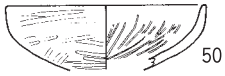
45


46

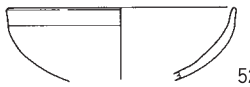

47


48

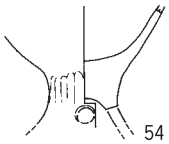
49

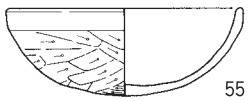

50

51


52

53

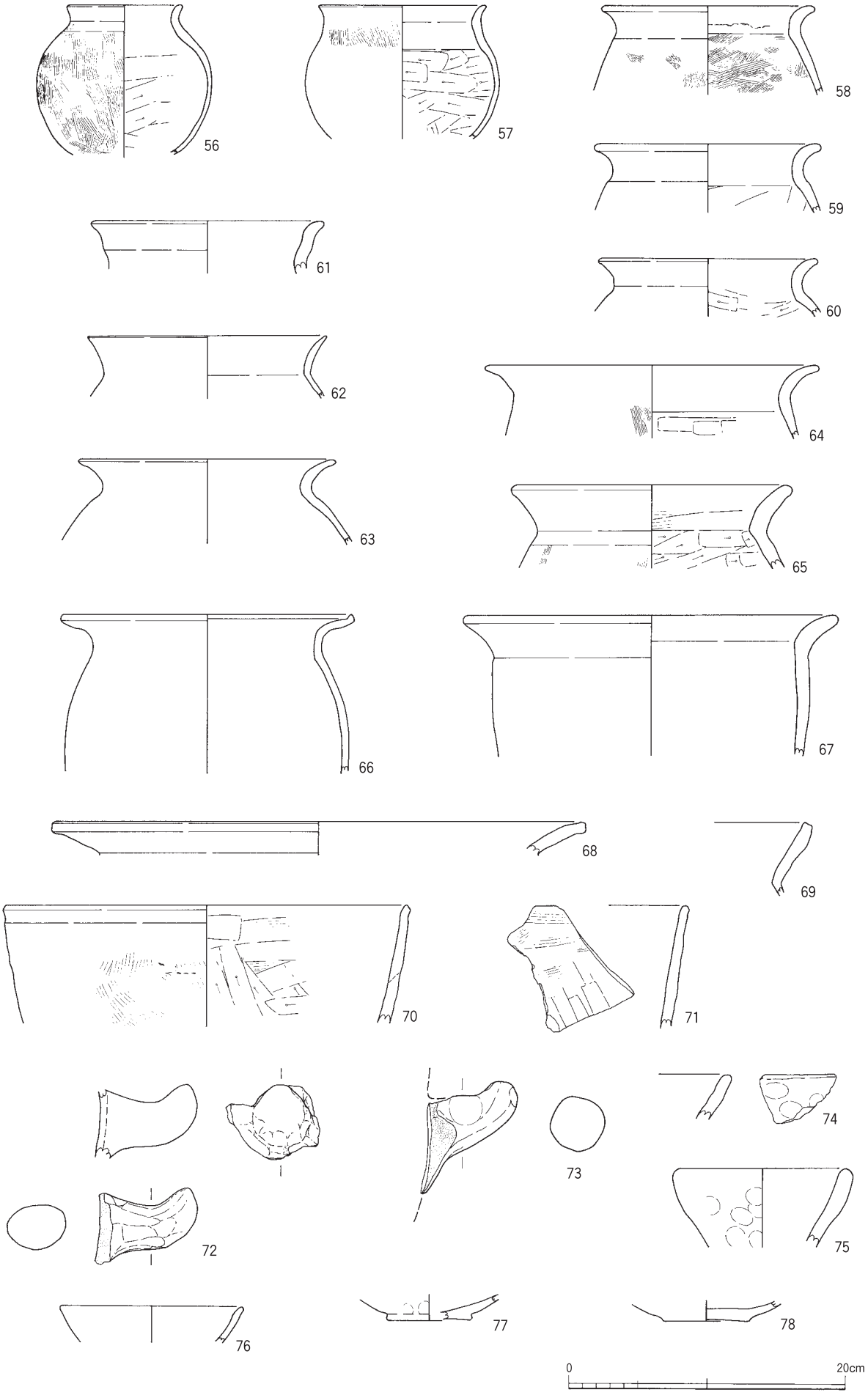

54


55

A地区遺構及び包含層出土土器（土師器）

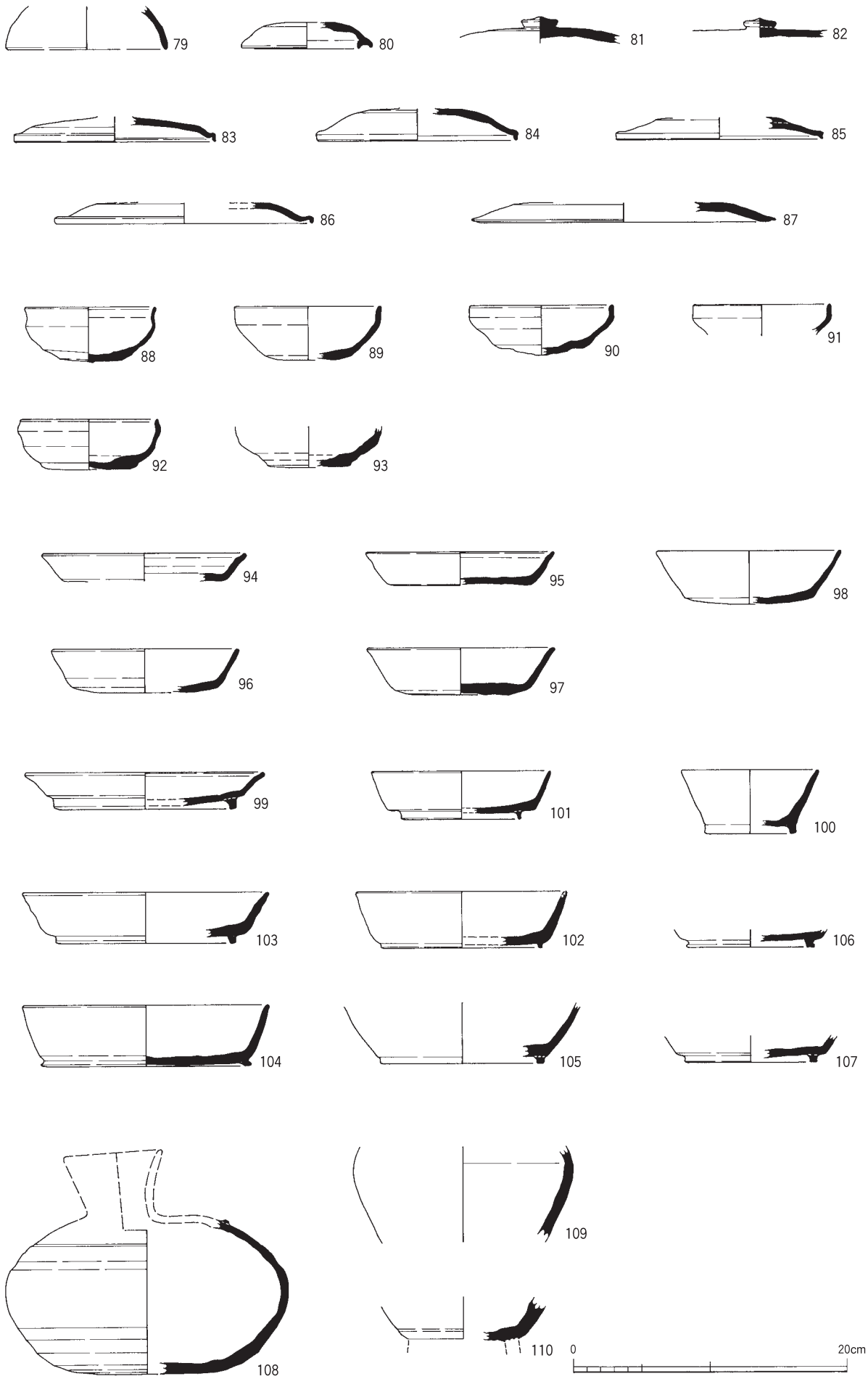
図版20　遺物

A地区　包含層出土土器



A地区包含層出土土器（土師器）

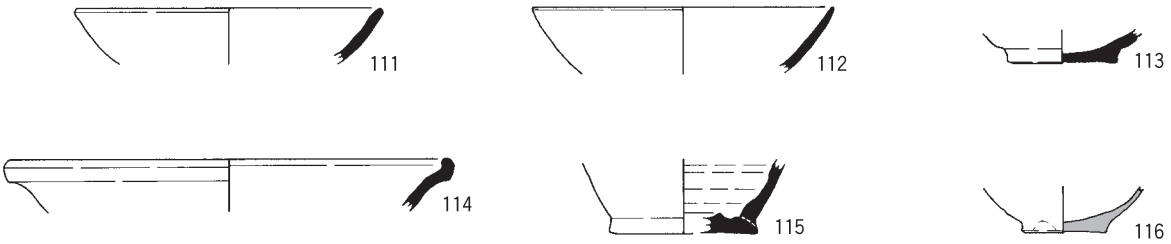
A地区　包含層出土土器



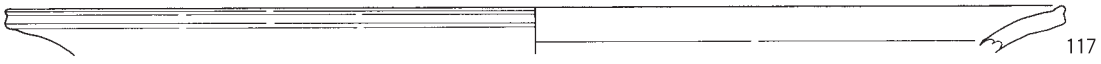
A地区包含層出土土器（須恵器）

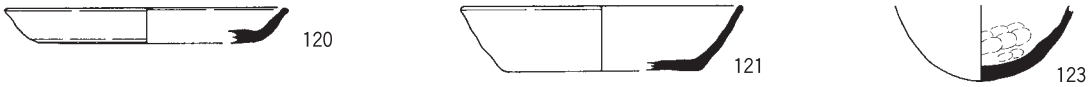
図版22　遺物

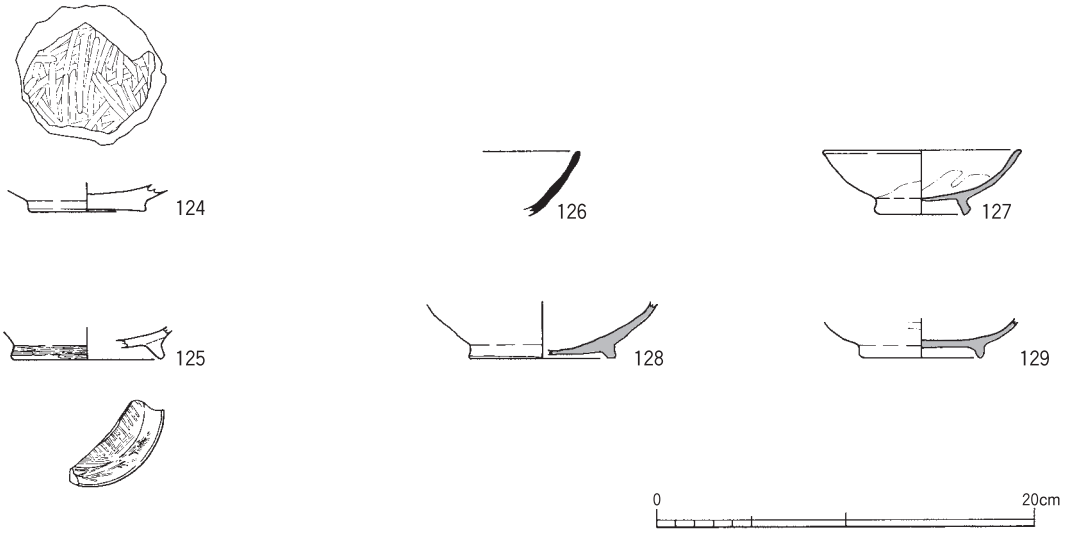
A地区　包含層出土土器



B地区　包含層出土土器

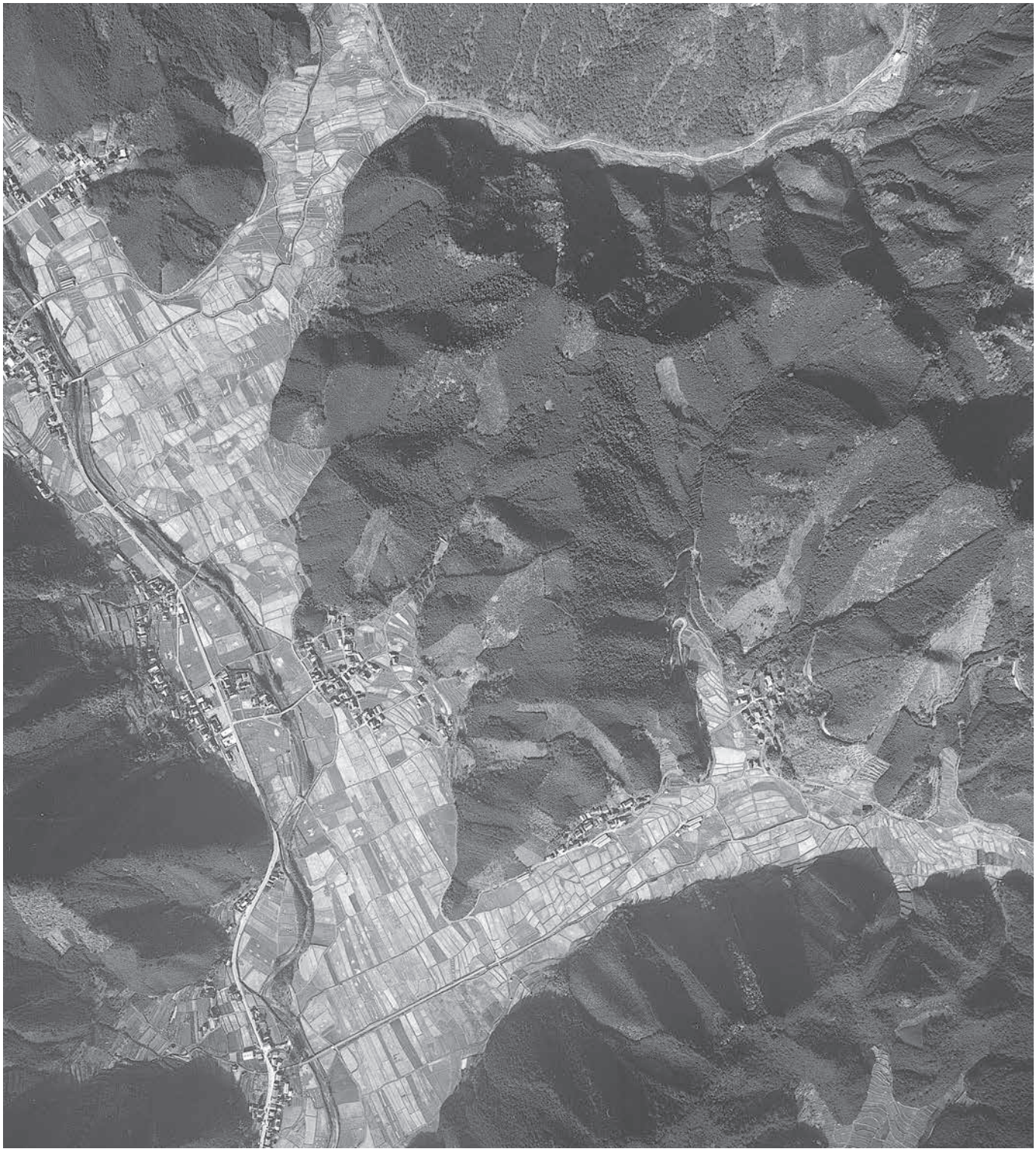






A地区包含層出土土器（古代～中世）・B地区包含層出土土器

写 真 図 版

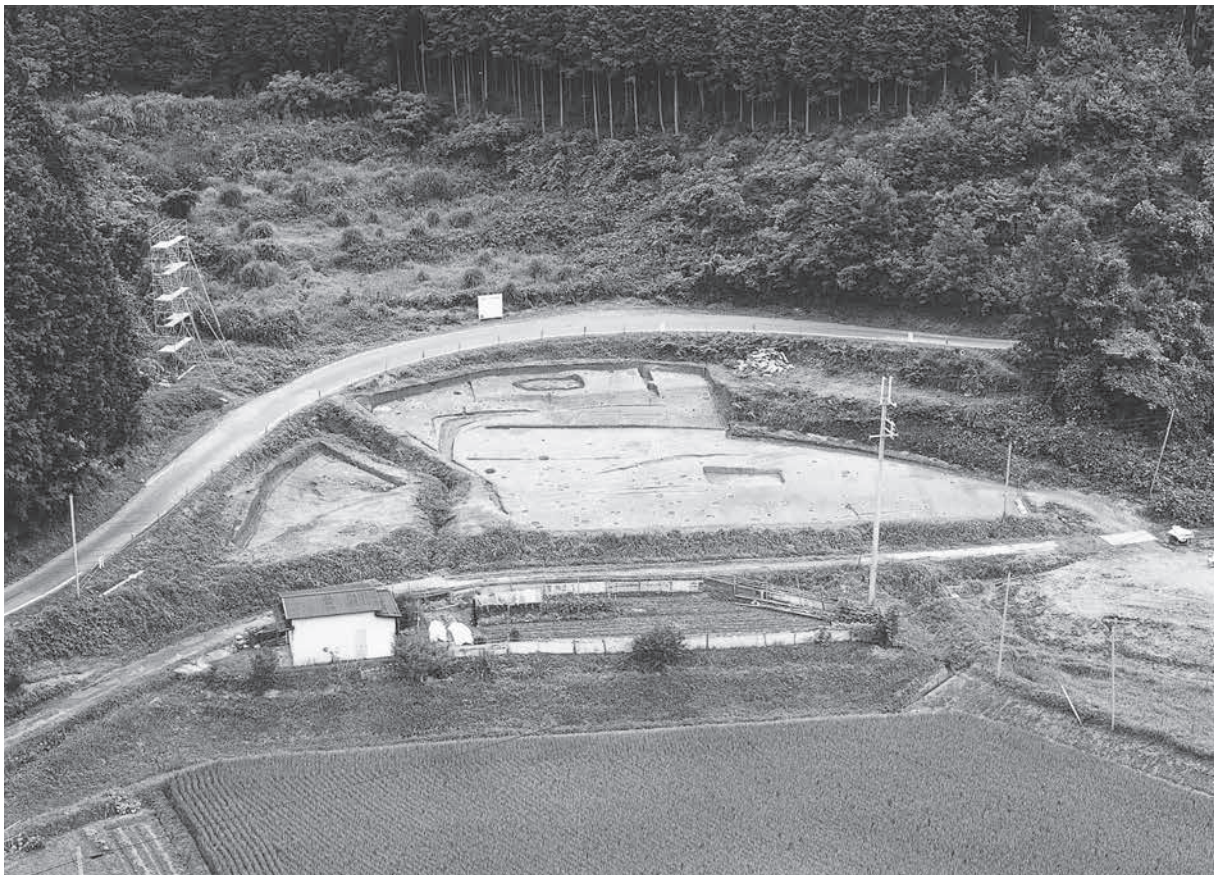


航空写真（上が北）

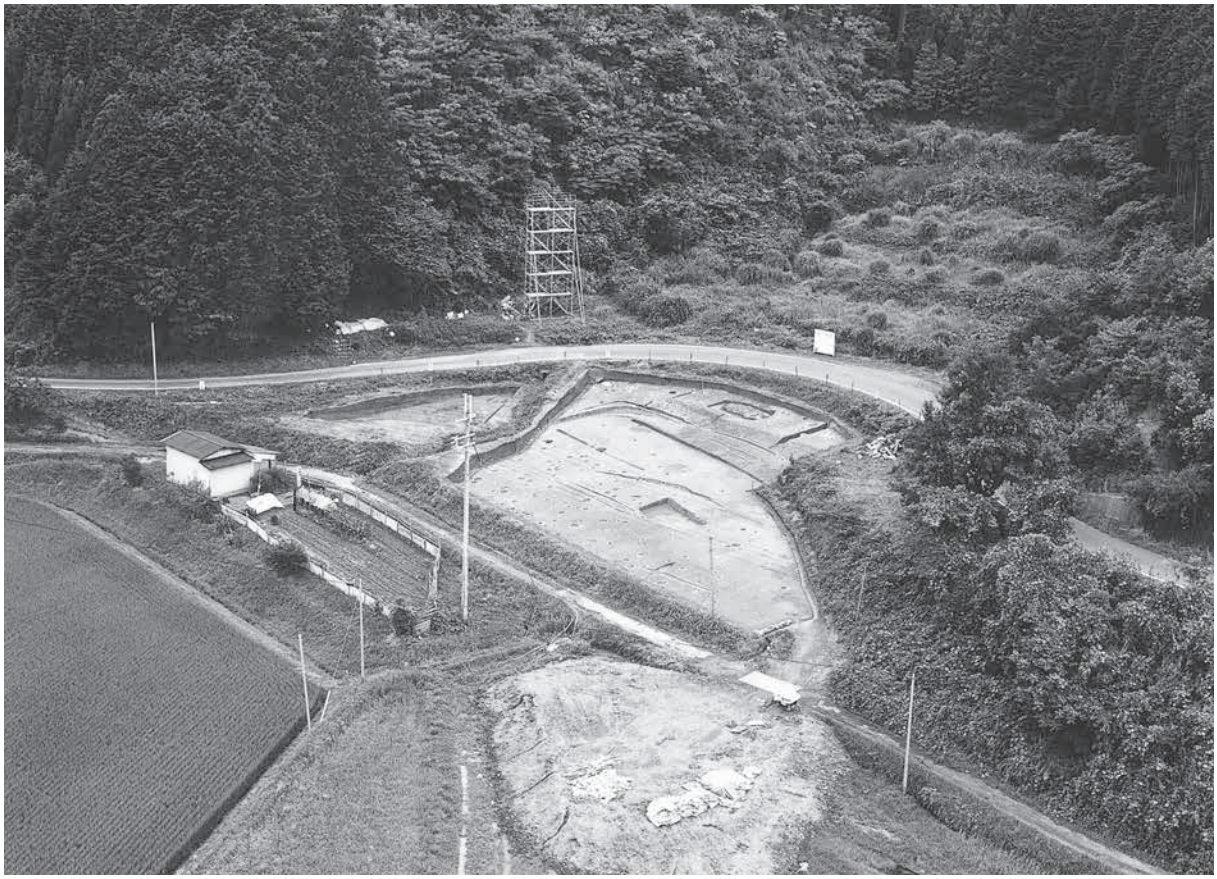
全景（上が東）

調査地点遠景（南から）

調査地点遠景（南西から）



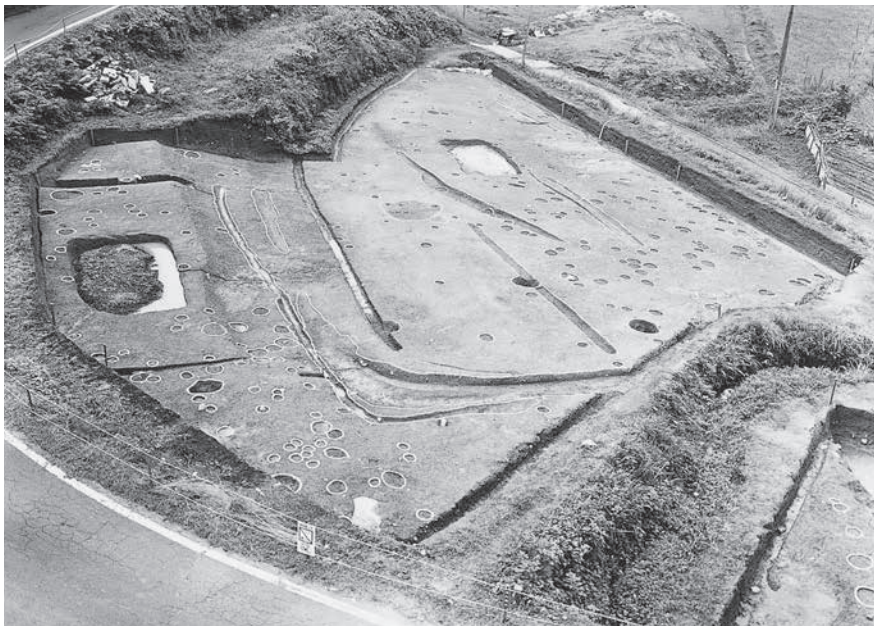
調査区近景（南から）



調査区近景（南東から）

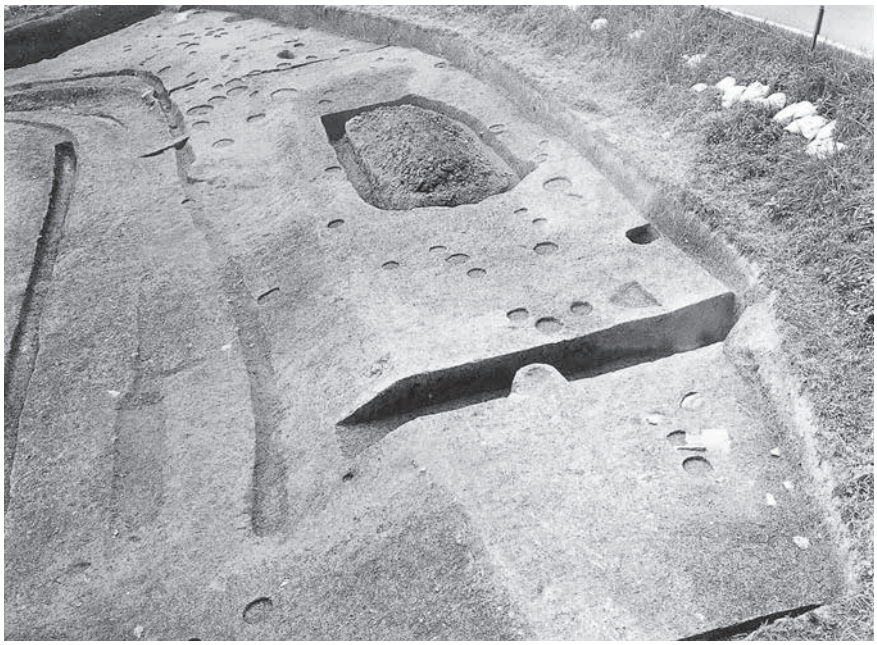
調査区近景（南西から）

調査区全景（北から）



A地区全景（西から）

A地区西半の遺構（南西から）

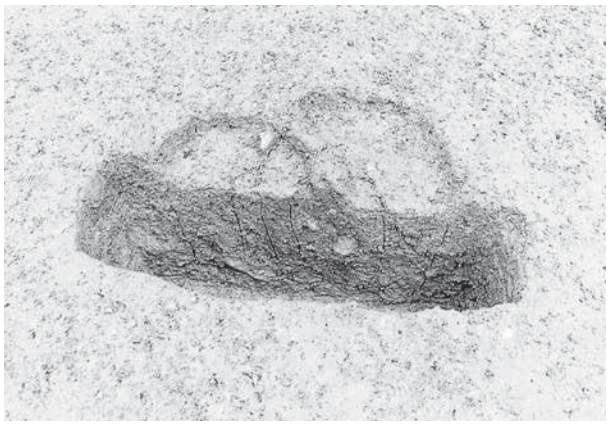


A地区上段の遺構（東から）

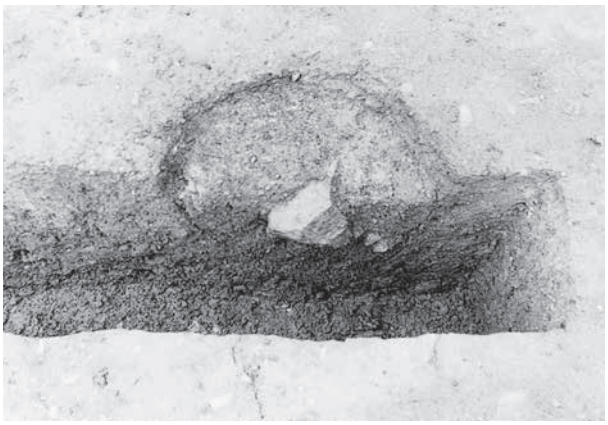
A地区上段の遺構（南東から）

A地区北東隅の遺構（南から）

A地区南西隅の遺構（北から）

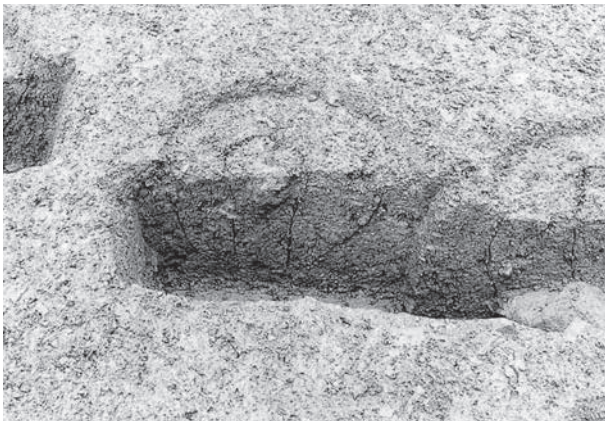


SB01　SP1195〔左〕・SP1194（南から）



SB01　SP1095（南から）

SB01　SP1214（北から）



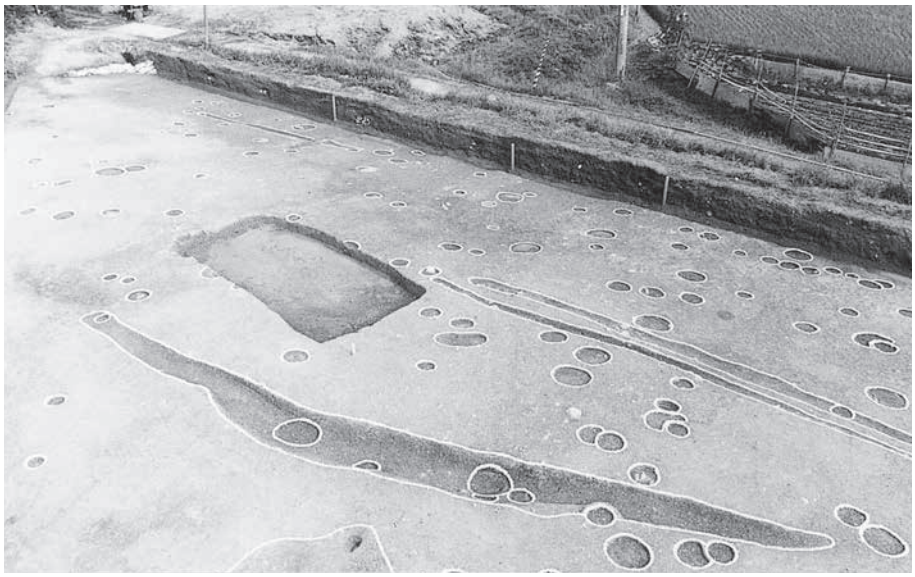
SB01　SP1273（南から）

SB01　SP1212（東から）

SB01　SP1100（南から）

SB01　SP1213（南から）

A地区　掘立柱建物SB01の柱穴

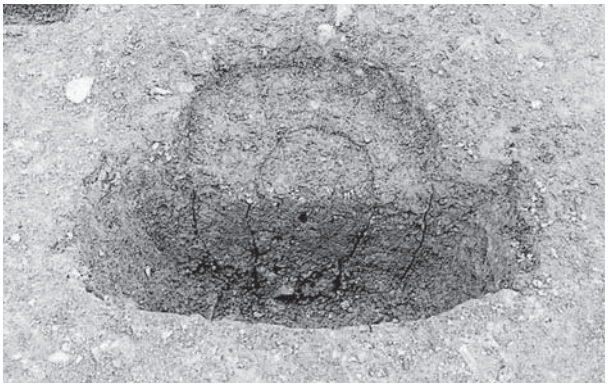


A 地区南東半の遺構
（北西から）

SB02　SP1248（南から）

SB03　SP1186〔左〕・SP1185（南から）

SB03　SP1226〔左〕・SP1225（南から）



SB03　SP1250（南から）

SB03　SP1198〔左〕・SP1197（北から）

SB03　SP1178（南から）

A 地区　掘立柱建物SB02・SB03の柱穴

SB05　SP1153（南から）

SB08　SP1251（南から）

SB08　SP1217（南から）

SB08　SP1238〔左〕・SP1237（南から）

SB09　SP1038（南から）

SP1054（南から）

SP1056（南から）

SP1010（南から）

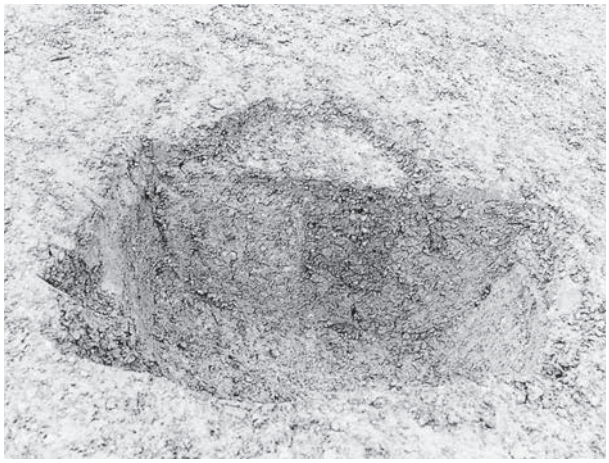
A地区　掘立柱建物SB05・SB08・SB09他の柱穴

SP1171（南から）

SP1232（南から）

SP1227（手前・南から）

SP1277（北から）

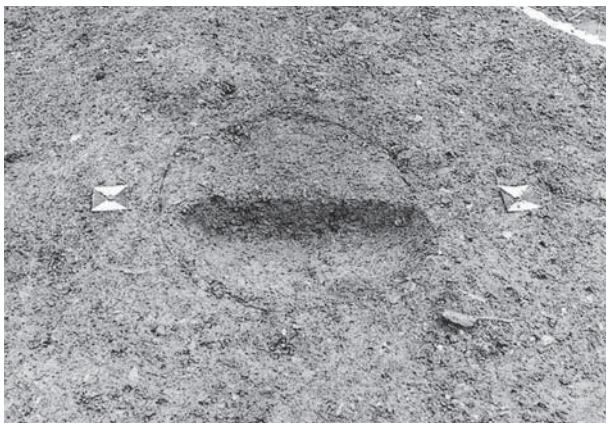


SP2004（西から）

A 地区　柱穴

焼土坑SX1130（南から）

焼土坑SX1276（南から）



焼土坑SX1300（南から）

落ち込みSX1230（東から）

A地区　焼土坑・落ち込み

左上　SD05（東から）
右上　SD09（西から）

SD01〔右〕・SD06
（東から）

SD07〔右〕・SD08
（東から）

A地区　溝

A地区西壁　南端

同上　南半

同上　中央

同上　北半

同上　北端

A 地区　西壁

A地区北壁　西端

同上　西半

同上　中央

同上　東半

A 地区　北壁

B地区全景（北西から）

B地区全景（南西から）

B地区全景（西から）

B地区　全景

B地区柱穴（南から）

B地区西壁

B地区西壁　近景

B地区　西壁

下層断割トレンチ全景
（南東から）

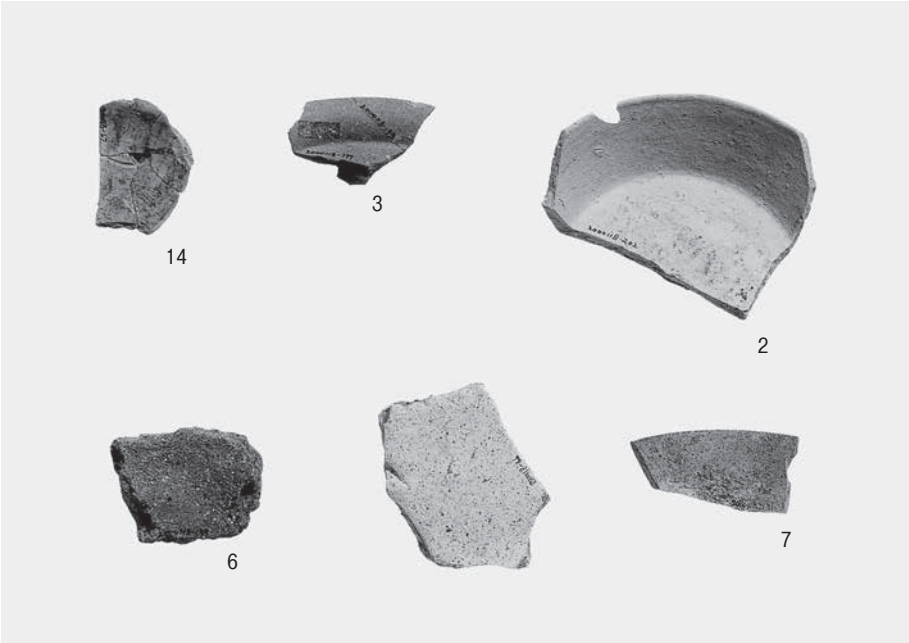
同上　東半（南東から）

同上　近接（南から）

A地区　下層断割トレンチ

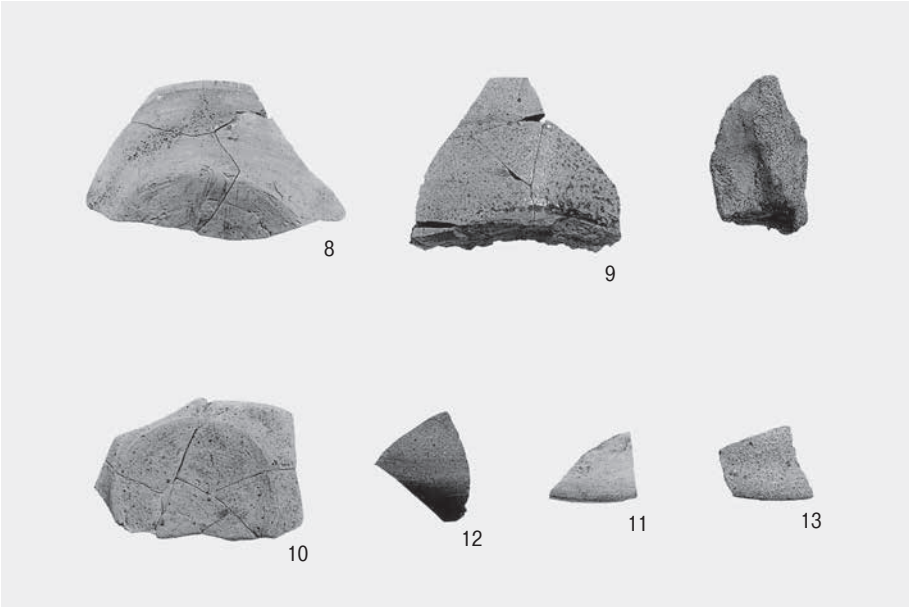
SB01　柱穴SP1214

SB01・SB02　他柱穴（外面）

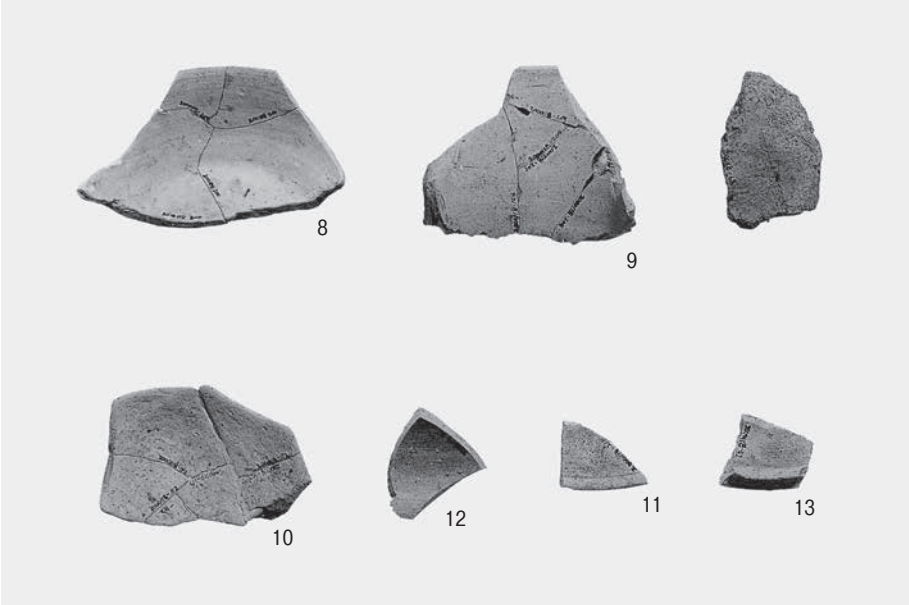


同上（内面）

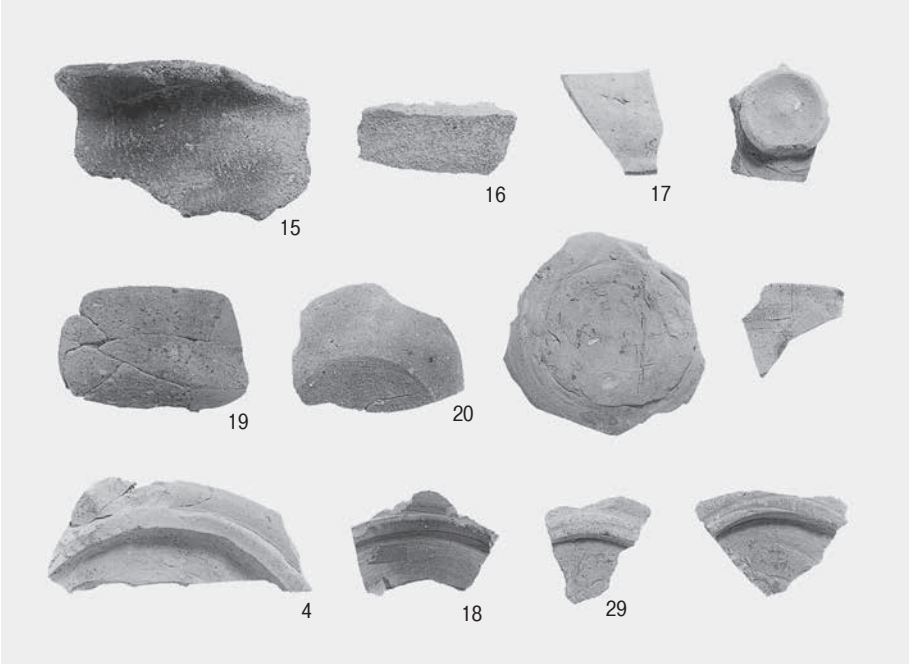
A地区　掘立柱建物柱穴出土土器



SB03～SB09（外面）

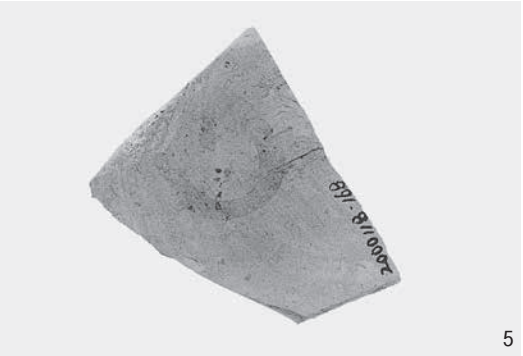


同上（内面）

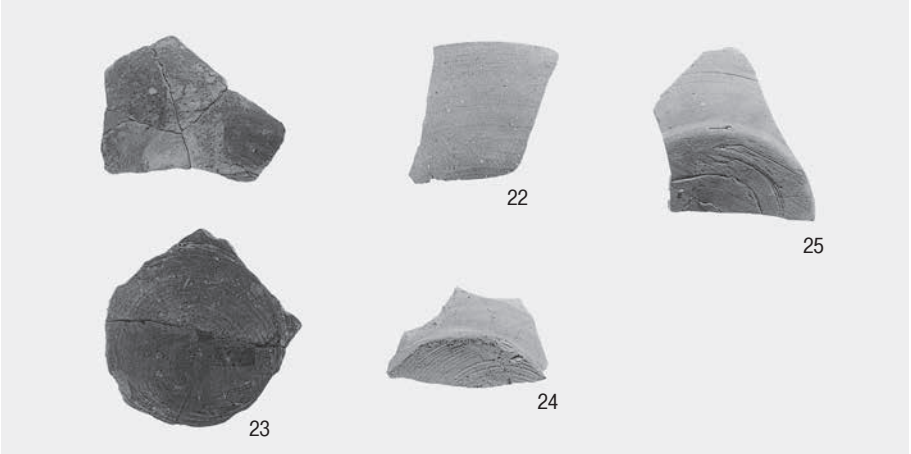


各柱穴

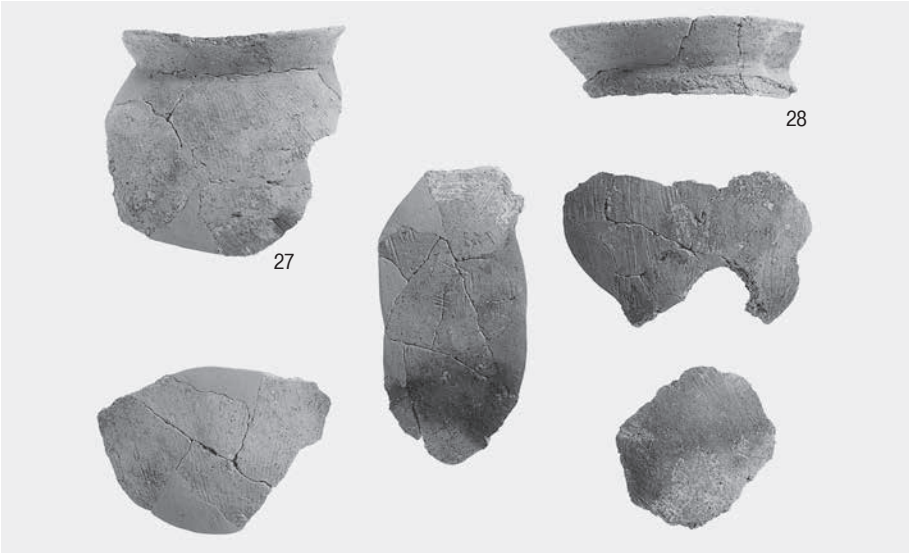
A地区　各柱穴出土土器Ⅰ



左上　柱穴SP1165
　　黒色土器
右上　SB01　柱穴SP1201
　　墨書土器



各柱穴

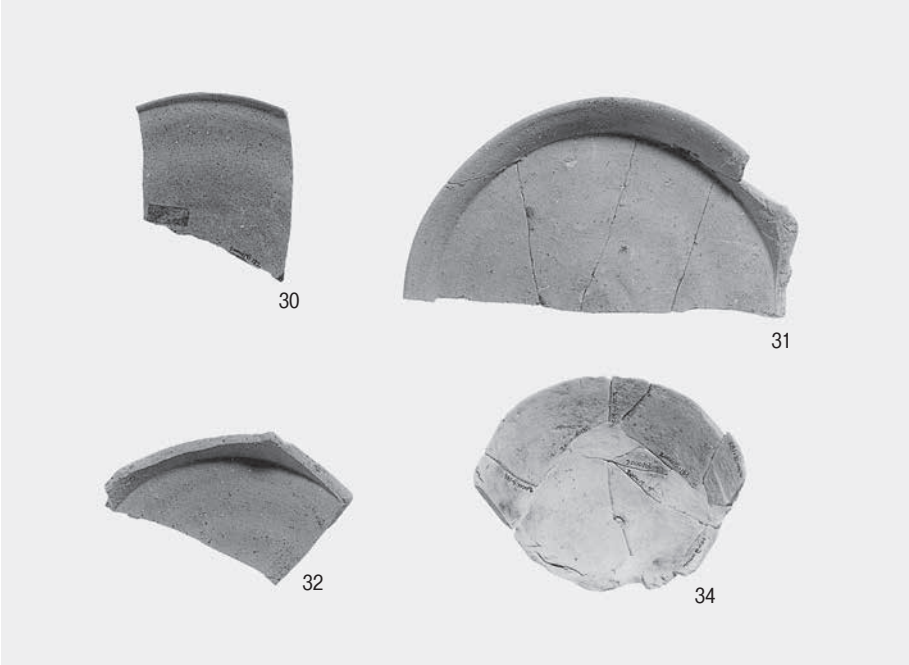


下層柱穴SP2003

下層柱穴SP2003　土師器　甕

A地区　各柱穴出土土器Ⅱ

土坑SK1126・落ち込みSX1256
（外面）

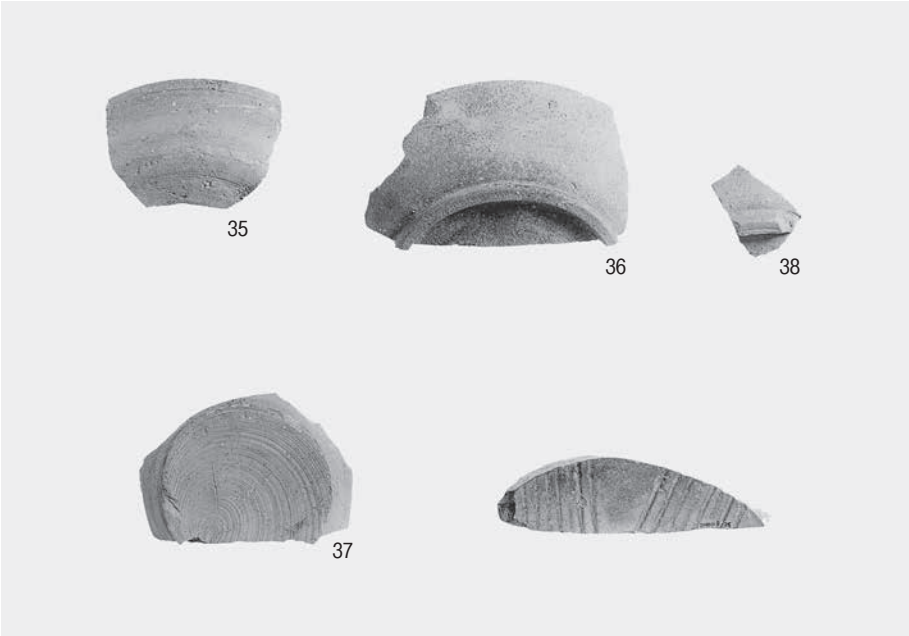


同上（内面）

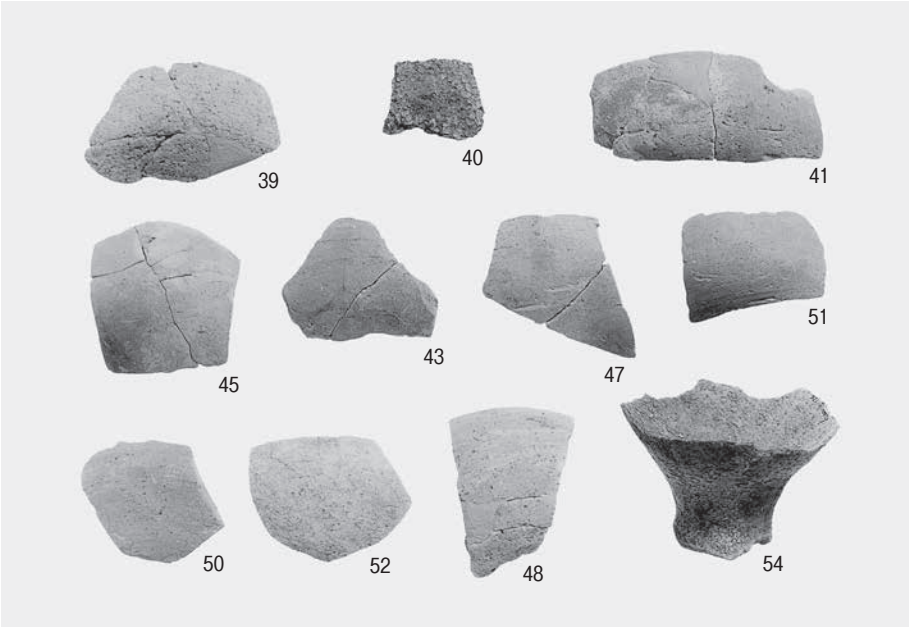
落ち込みSX1230
土師器　甕

A地区　土坑・落ち込み出土土器

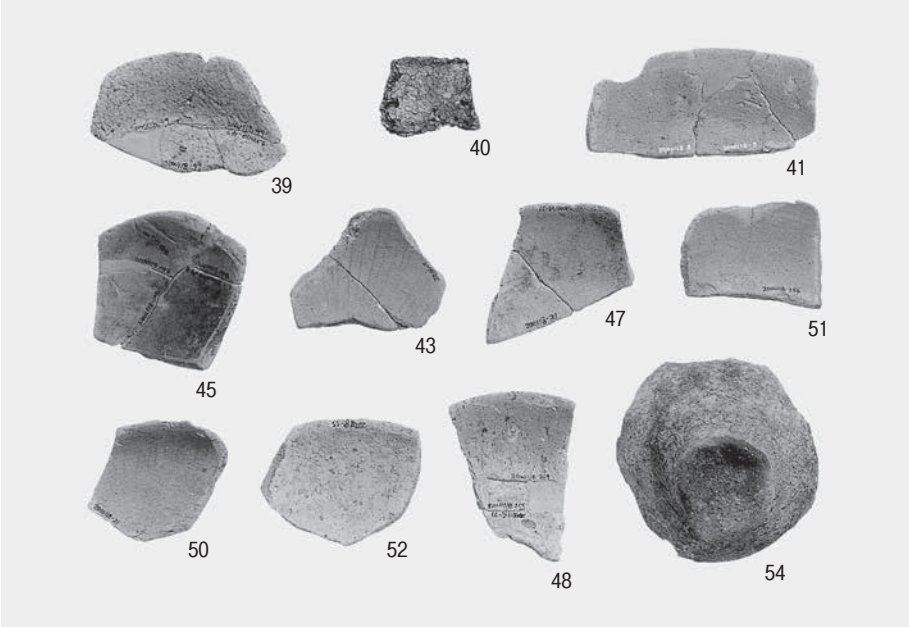
溝SD05・07・08



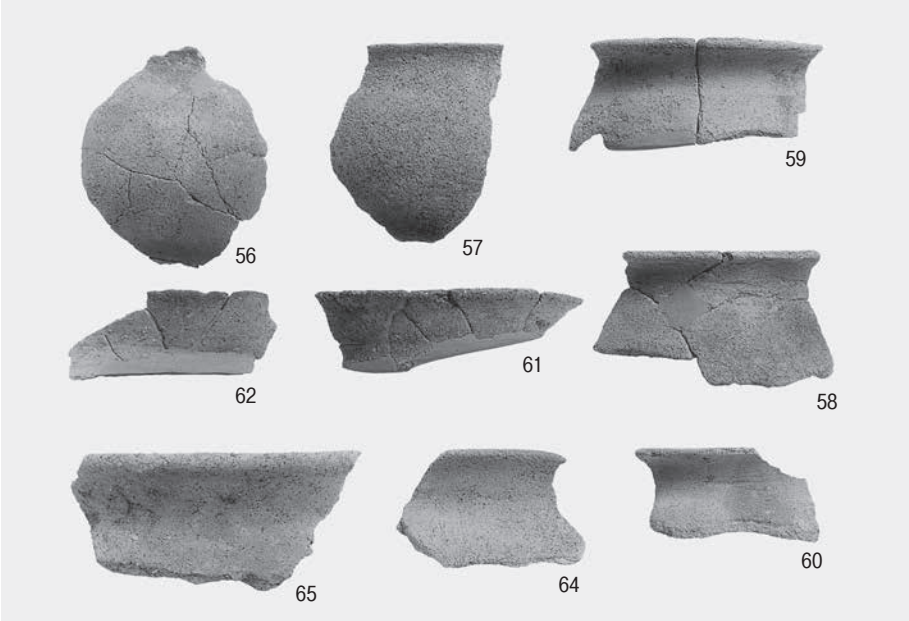
A地区　溝及び包含層出土土師器Ⅰ



杯・鉢（外面）

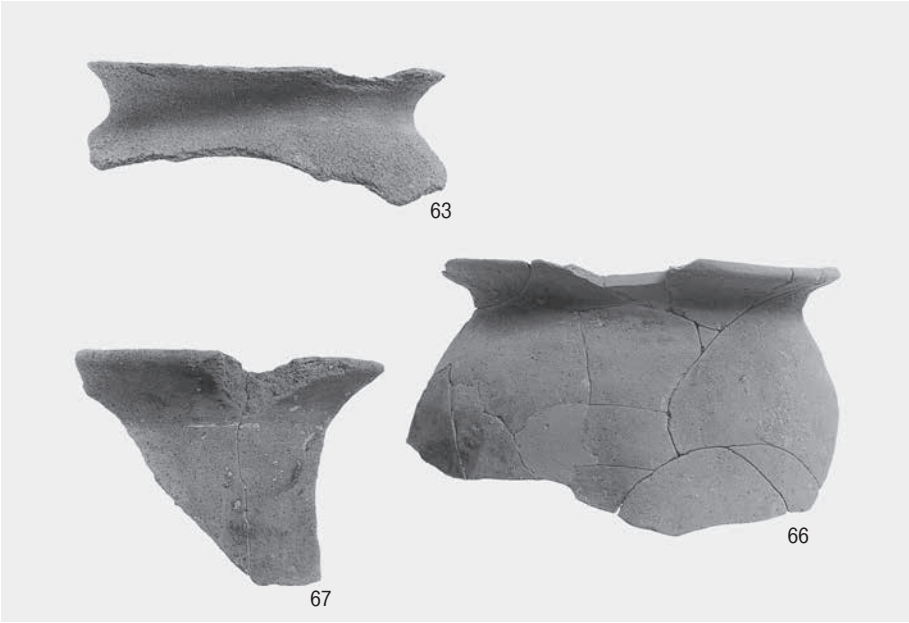


同上（内面）

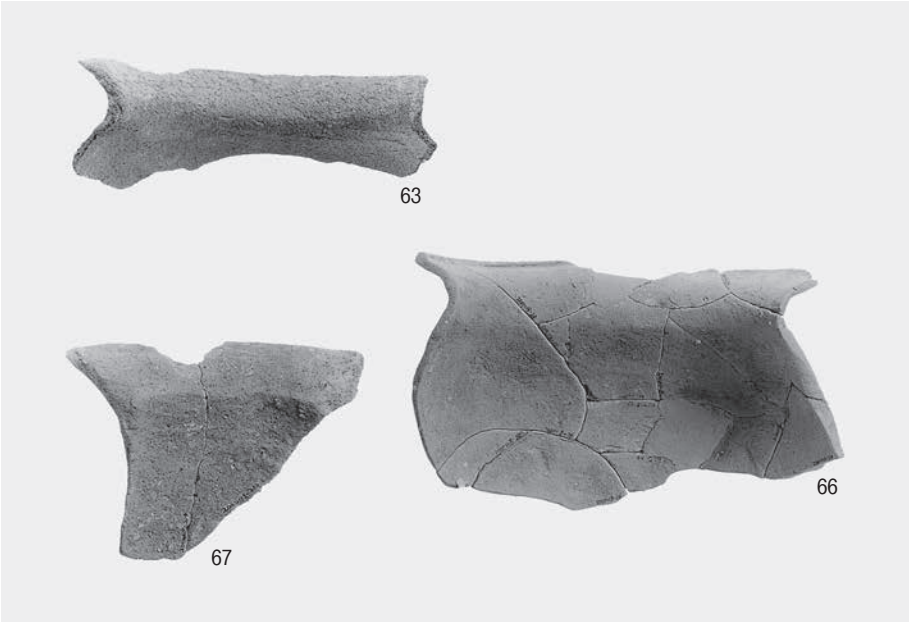


甕

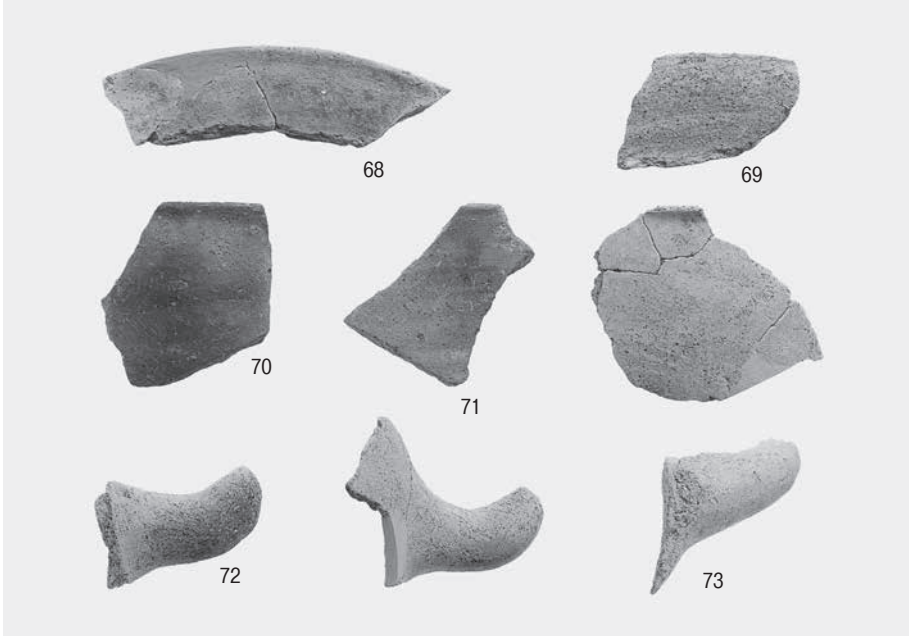
A地区　包含層出土土師器Ⅱ



甕（外面）

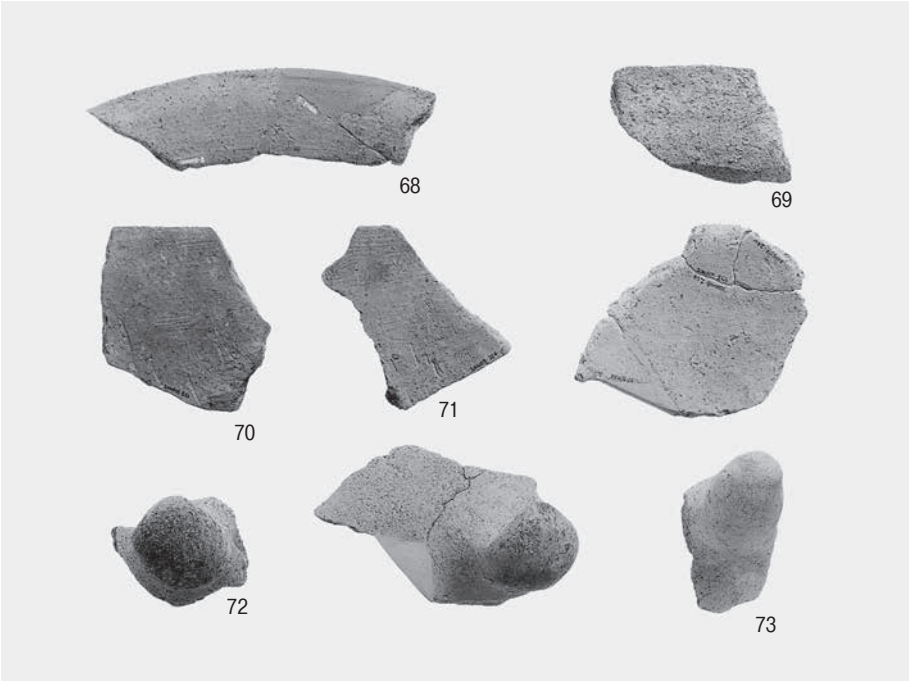


同上（内面）



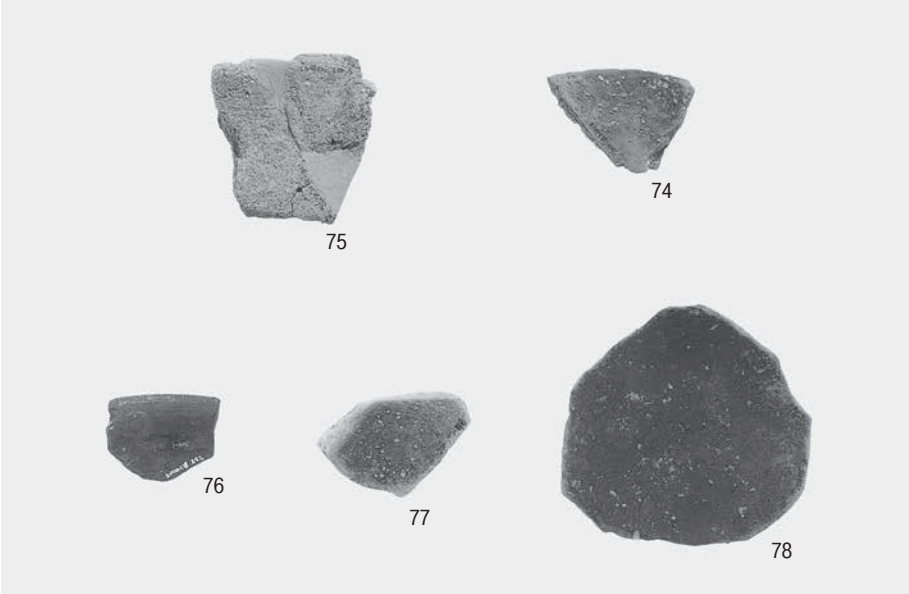
甑（外面）

A地区　包含層出土土師器Ⅲ



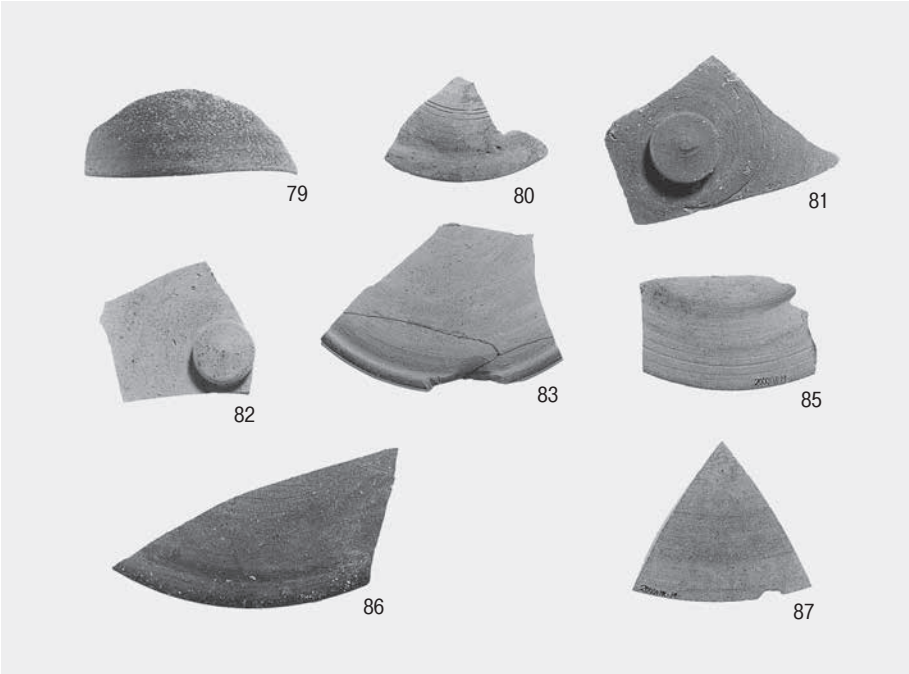
甑（内面）

製塩土器・黒色土器（外面）



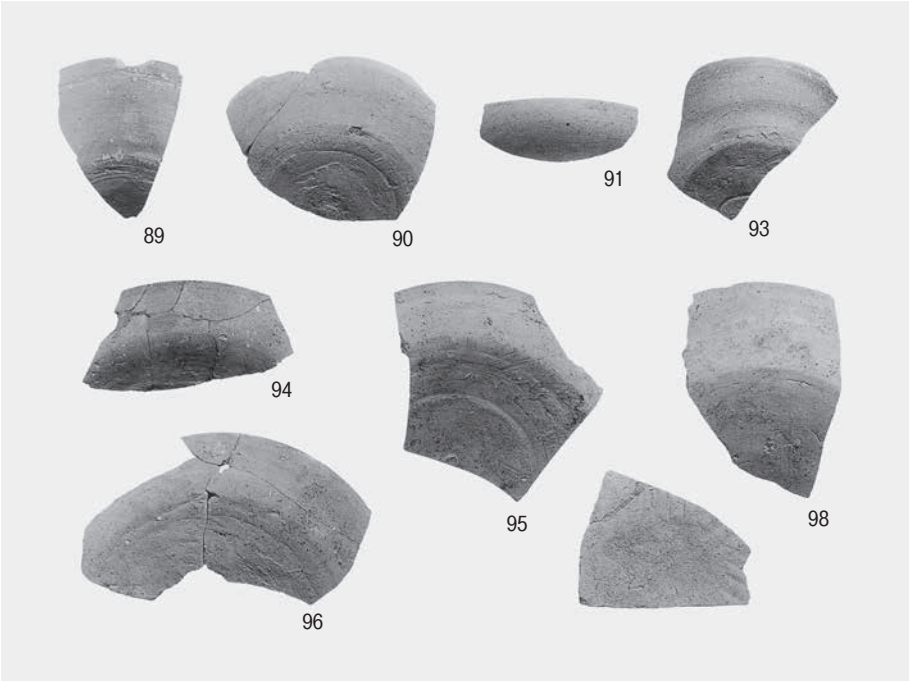
同上（内面）

A地区　包含層出土土師器Ⅳ

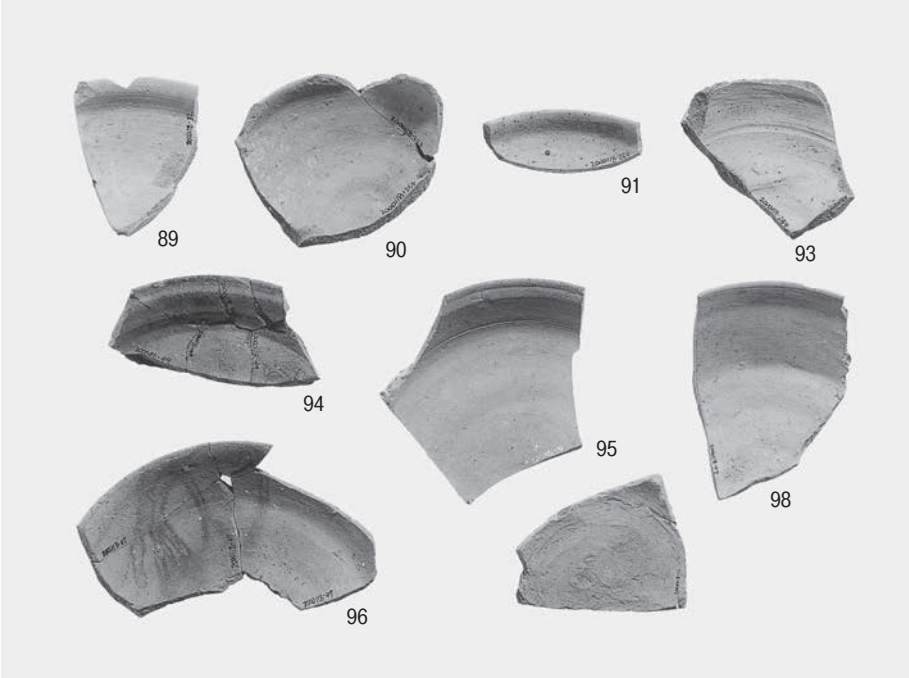


杯蓋

A地区　包含層出土須恵器Ⅰ

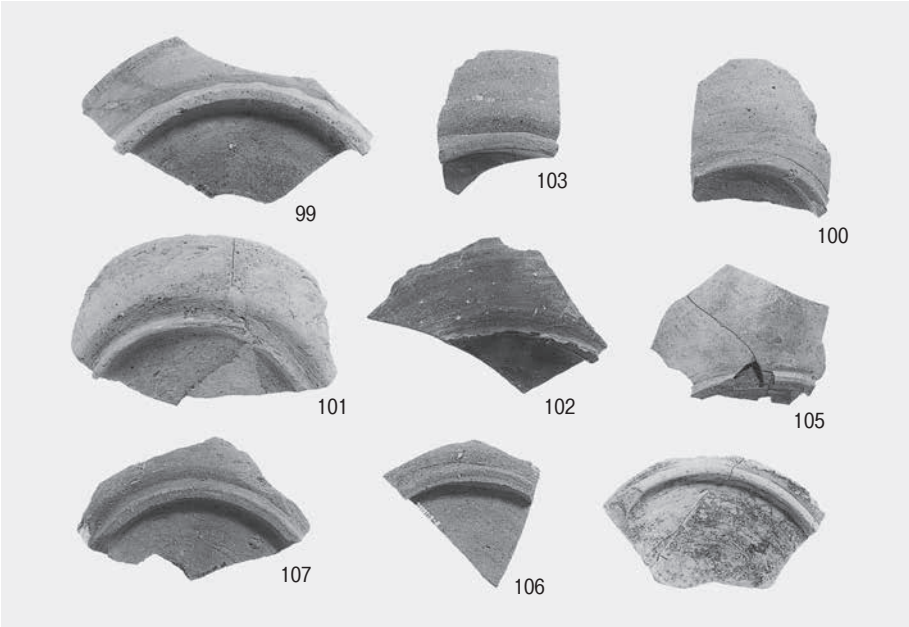


杯身（外面）

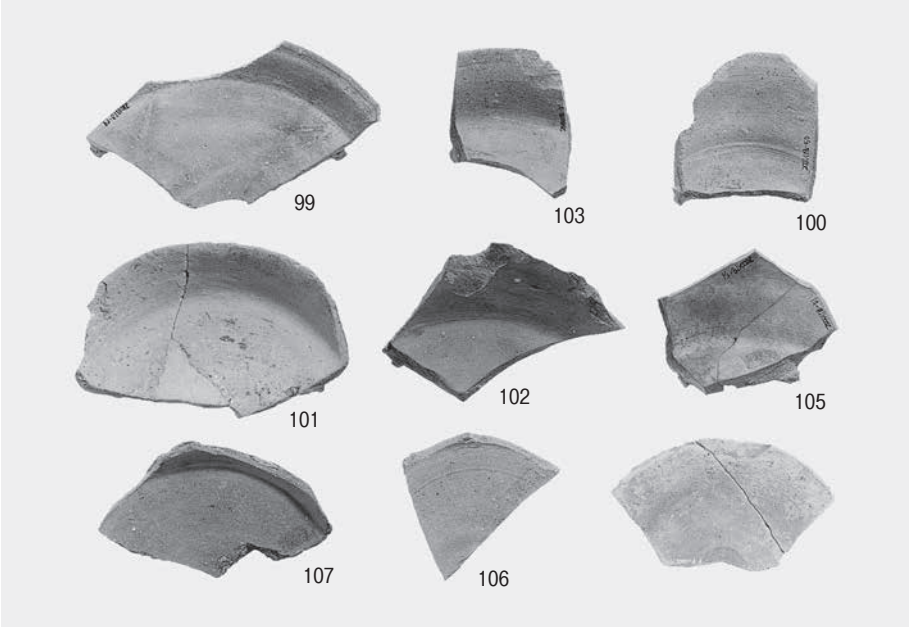


同上（内面）

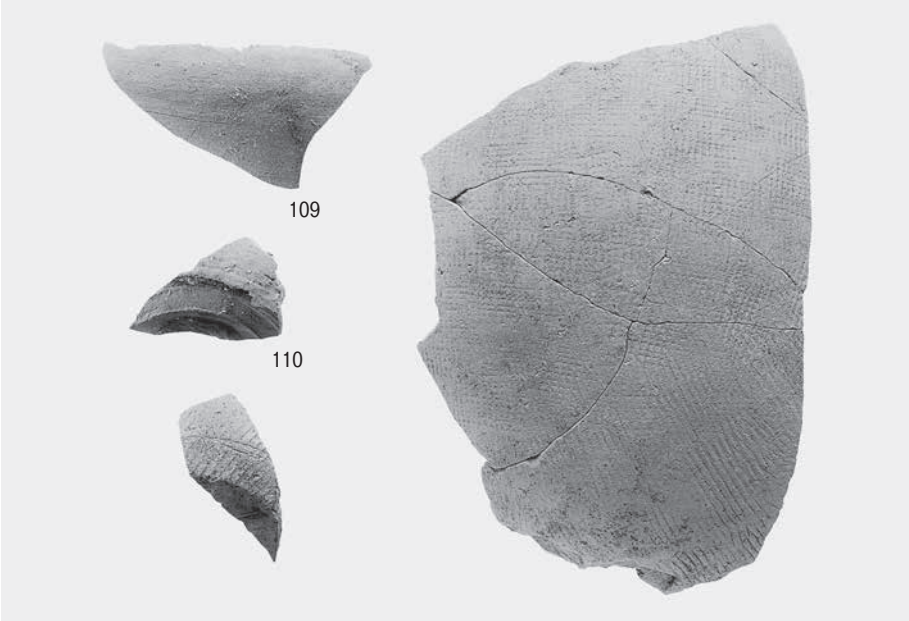
A地区　包含層出土須恵器Ⅱ



高台付杯身（外面）

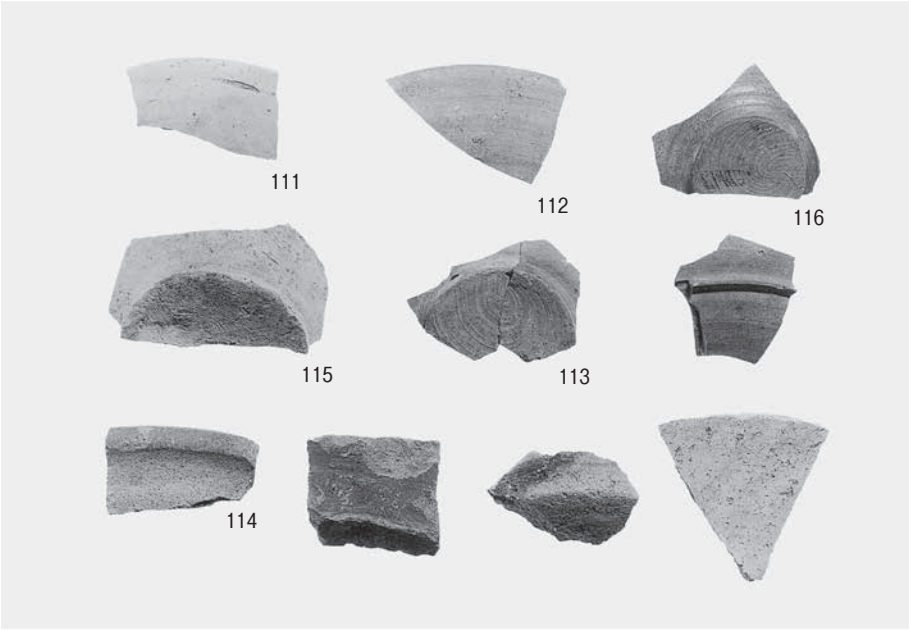


同上（内面）

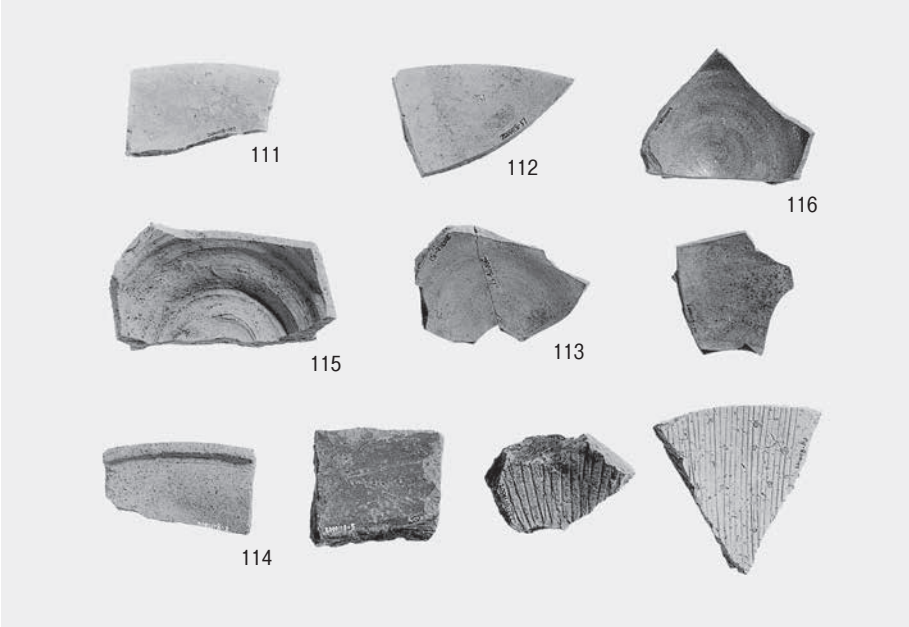


壺・甕

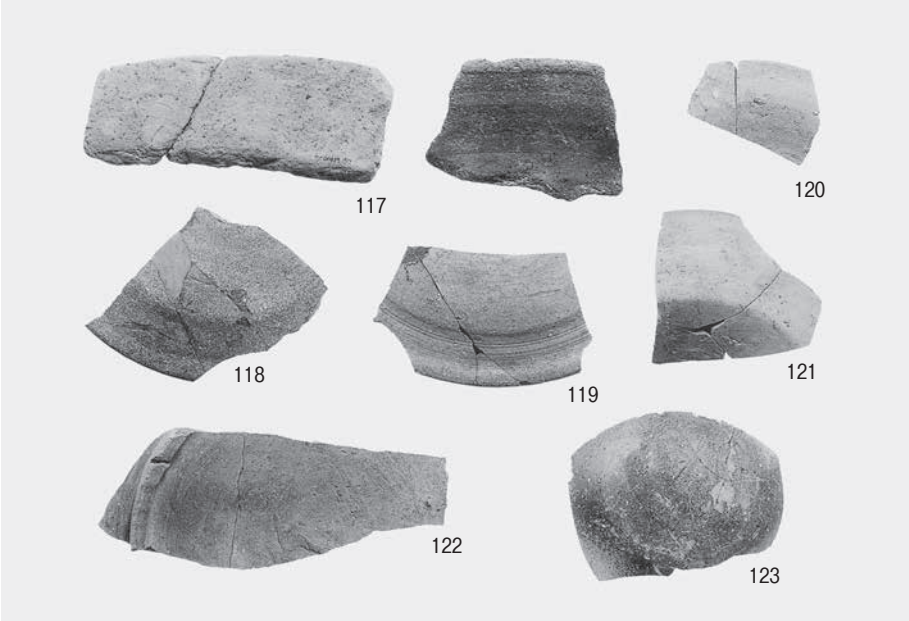
A地区　包含層出土須恵器Ⅲ



A地区
古代～中世土器（外面）

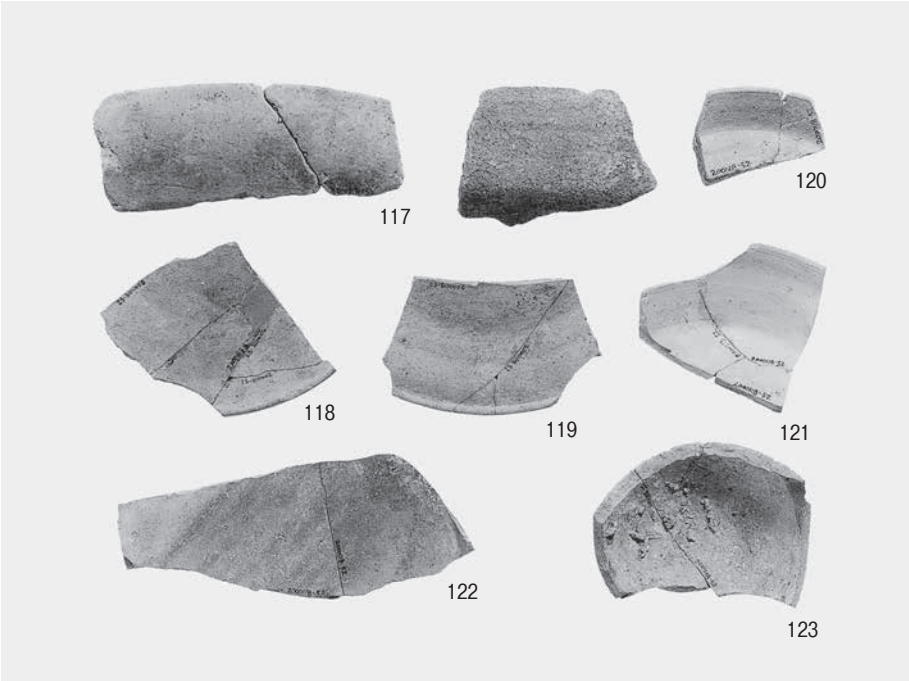


同上（内面）



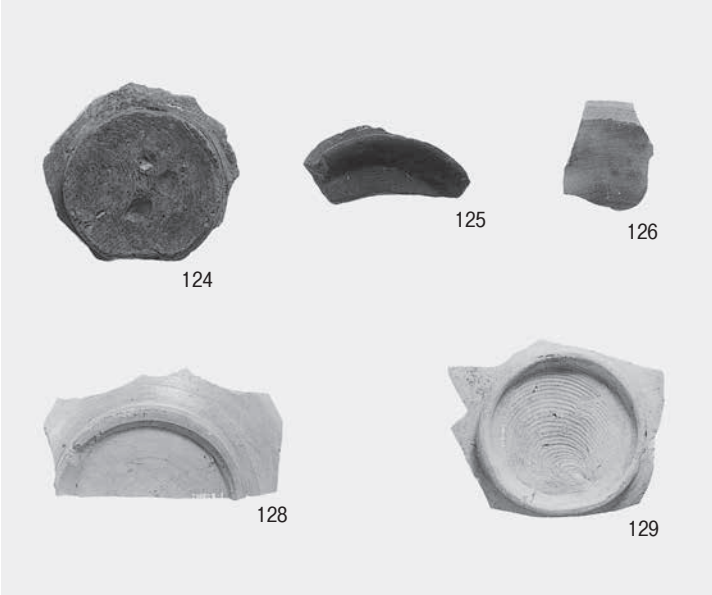
B地区
杯（外面）

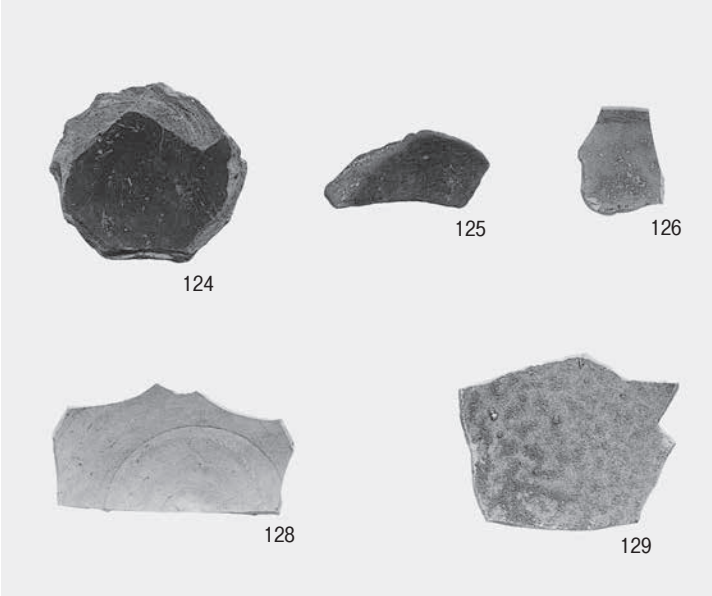
A地区　包含層出土　古代～中世土器・B地区　包含層出土須恵器Ⅰ



杯（内面）

右　緑釉陶器・灰釉陶器（外面）
右下　緑釉陶器・灰釉陶器（内面）





B地区　包含層出土須恵器Ⅱ・緑釉陶器・灰釉陶器

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひらのいせき
書名	平野遺跡
副書名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第393冊
編著者名	西口圭介
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目１番１号　TEL　079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　TEL　078-341-7711
発行年月日	2011(平成23)年３月25日

所収遺跡名(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査番号	調査期間	調査面積	調査原因
平野遺跡(ひらのいせき)	兵庫県丹波市(ひょうごけんたんばし)青垣町(あおがきちょう)中佐治(なかさじ)字平野(あざひらの)	282235	780078	35度15分51秒	135度0分23秒	(確認)990256 (本発掘)2000118	(確認)1999年11月19日 (本発掘)2000年6月15日～11月27日	(確認)40㎡ (本発掘)670㎡	一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平野遺跡	集落跡	平安時代	掘立柱建物 柱穴 焼土坑 溝	灰釉陶器・緑釉陶器・墨書須恵器・黒色土器椀・製塩土器・越前焼擂鉢	

要約	遠阪谷から東に分岐した谷に南面する律令期を中心とした小規模集落である。兵庫県側の丹波―氷上郡より、峠を越えて京都府側の丹波―福知山へと抜ける交通の要所に位置する。出土遺物には、灰釉陶器・緑釉陶器がある。

※緯度・経度は平成14年４月１日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告　第393冊

平　野　遺　跡

－ 一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ －

2011(平成23)年３月25日　発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
TEL 079-437-5589

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　ウニスガ印刷株式会社
〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39